

映像と文化 A

担当者：山中 剛史

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

写真や映画にとどまらず、テレビやネットなど、多様な進歩を遂げながら極めて広範囲に使用されている映像。しかし、例えば明治の人々はどのように映像を理解し受容していたのか。視覚文化の歴史的様相を横目に据えつつ、視覚＝イメージと視覚装置の発展が、近代化の中で如何様な位置を占め表象されてきたのかを概観しながら、現在にいたる映像作品の可能性を改めて読解する。応用系として3～4年生向。（右の授業計画予定は変更される場合もある）

2.学びの意義と目標

本講義では、写真や映画など19世紀より輸入・発展した各メディアが、種々の文化的コンテキストの中で如何に扱われてきたかを再検証していく。それは、ヴィジュアル文化全盛の今日、映像文化をその原初から改めて逆照射することによって、現代日本文化における映像作品の諸問題を改めて考えさせることになるだろう。

準備学習(予習)

普段から講義で紹介する関連文献に目を通し、実作に触れる機会を多く持って日常的に「映像」を考えながら見るという姿勢を身につけておく。

準備学習(復習)

板書や配布プリントを再読し自分なりの授業ノートをまとめること。また不定期に実施する小レポートは、その日の講義を反芻しながら疎かにせず時間をかけて執筆して下さい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 遠近法と近代的視覚の編成
3. 写真の発明
4. 視覚のスペクタクル
5. 写真と時間性
6. 表象装置としての映画
7. 映画における時空間表象
8. 日本における映画輸入と興行形態
9. 純映画劇運動の芸術思想（1）
10. 純映画劇運動の芸術思想（2）
11. 大正期におけるドッペルゲンガーモチーフ
12. 複製技術時代における映像メディアの可能性（1）
13. 複製技術時代における映像メディアの可能性（2）
14. 映像メディアにおけるドイツ表現主義の伝播
15. 映画言語とモンタージュ理論

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末レポート:70% (2)小レポート:30%
出席点について：毎回の出席は大前提となるので、出席点はないが欠席は減点の対象となる。

担当者：山中 剛史

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要**1.内容**

写真や映画にとどまらず、テレビやネットなど、多様な進歩を遂げながら極めて広範囲に使用されている映像。視覚文化の歴史的様相を横目に据えつつ、視覚＝イメージと視覚装置の発展が如何様に表象されてきたのかを概観しながら、現在にいたる映像作品の可能性を改めて読解していくために、その変遷する映像芸術の歴史的様相を芸術思潮のうちに主題化し、葛藤を繰り返しながら映像的結実へといたった過程を、個々の作品を実見することで跡付け検証する。応用系として3～4年生向。（右の授業計画予定は変更される場合もある）

2.学びの意義と目標

本講義では、写真や映画などの各メディアが、第二次大戦後の文化的コンテキストの中で如何に扱われてきたかを具体的に再検証していく。ヴィジュアル文化全盛の今日、改めて映像作品の孕む諸問題と可能性について見つめ直し、思考する眼を養っていききたい。

準備学習(予習)

普段から講義で紹介する関連文献に目を通し、劇場や展覧会など、実作に触れる機会を多く持って日常的に「映像」を考えながら見るという機会を持って欲しい。

準備学習(復習)

板書や配布プリントを再読し自分なりの授業ノートをまとめること。また不定期に実施する小レポートは、その日の講義を反芻しながら疎かにせず時間をかけて執筆して下さい。

授業計画

1. ガイダンス
2. シュルレアリスム以降の映像のモダニズム
3. 個人メディア時代の確立
4. 戦後復興と五社体制
5. 啓蒙手段としての映画メディア
6. 高度経済成長とメディアの転換
7. ニューヴェルヴァーグ運動
8. 戦後アヴァンギャルドの展開
9. フィルム・アンデパンダンの活動
10. 映像的パロディとその可能性（1）
11. 映像的パロディとその可能性（2）
12. 寺山修司の映像戦略
13. PVおよびCMの映像性
14. ヴィデオの可能性
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末レポート:70% (2)小レポート:30%
出席点について：毎回の出席は大前提となるので、出席点はないが欠席は減点の対象となる。

教えるための現代文 A

担当者：前田 潤

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

教員採用試験の「現代文」読解問題を念頭に置きながら、現代日本語で記されたあらゆるジャンルの文章読解力の向上を目標として講義を行う。領域横断的な文章素材を扱うことを通じて、文学・芸術はもちろん、社会思想・メディア・情報・身体・紛争・共同体といった重要な現代的問題系に関する思考を深めるとともに、「国語」教育に携ろうとする者として必要な、総合的な日本語操作能力の獲得を目指す。中学校・高等学校教科書、各種副読本、大学入学試験問題など、幅広い素材を対象テキストとする。

教職課程履修者のための科目。2年生以上で、「教科教育I」を取得したものか、並行履修しているものが受講できる。

教員採用試験の要求する「現代文」文章読解能力の水準を把握するとともに、「国語」教員として最低限必要な文章表現力の獲得を目標とする。

2.学びの意義と目標

多領域に向けて開かれた現代日本語の文章を読解できる能力を養うことが講義の目的となる。また、大学入試センター試験問題を含めて、高校・大学の入学試験問題を批判的に検討できる読解能力を身につけることを目標とする。

準備学習(予習)

今回の内容に関する予習を指示する場合がある。

準備学習(復習)

各回完結の授業となるため、前回の内容に関する毎回の復習を奨励する。

授業計画

1. ガイダンス（「現代文」の輪郭と臨界）
2. 「現代文」入門編（1） 評論
3. 「現代文」入門編（2） 小説
4. 言語論
5. 身体論
6. 絵画論
7. 写真論
8. メディア論
9. 共同体論
10. 資本主義論
11. 国際社会論
12. 文芸批評
13. 小説(1)
14. 小説（2）
15. 韻文

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席・受講姿勢:50% (2)最終テスト:50%

教えるための現代文B

担当者：前田 潤

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

受講者が、やがて教員として教壇に立つことを想定しながら、教材分析能力・問題作成能力・文章解説能力・授業構成能力など、教員として是非とも必要な能力の育成を目標として講義を行う。対象テキストの十分な理解を前提とした上で、それをいかに「教材」として用い、「授業」を作ってゆくのかということを実践的に学んでゆく講座となる。多数者の前で「授業」する能力の育成が目標となるため、教材研究過程の公開、模擬授業の実践など、多様な学びのプロセスを通じて、自己の思考の論理性や表現能力を客観化し、日本語操作能力の向上の足場をしっかりと築いてもらいたい。

教職課程履修者のための科目。2年生以上で、「教科教育法II」を取得したものか、並行履修しているものが受講できる。

現代日本語で書かれた文章素材の味読と分析を通じて、小学校から高等学校の教場に至るまで、徹底した教材研究と授業準備が教員と学生(生徒)の有意義な対話を作り出してゆくものであることを学んでほしい。

2.学びの意義と目標

教育教材の作成・編集、板書・発問の基礎、集団管理の方法などの諸視点を踏まえ、「現代文」講義が実践できる「教員能力」の育成を目指す。

準備学習(予習)

模擬授業を実践してもらうので、事前の教材研究が必要になる。

準備学習(復習)

各担当者により配布された教材を読み込んでゆく作業が重要である。

授業計画

1. ガイダンス
2. 高等学校教材としての「現代文」 評論編(1)
3. 高等学校教材としての「現代文」 評論編(2)
4. 高等学校教材としての「現代文」 評論編(3)
5. 教材としての「小説」(1)
6. 教材としての「小説」(2)
7. 教材としての「小説」(3)
8. 現代日本語文章能力養成のための「小論文」(1)
9. 現代日本語文章能力養成のための「小論文」(2)
10. 現代日本語文章能力養成のための「小論文」(3)
11. 教材研究のススメ 散文編
12. 教材研究のススメ 韻文編
13. 授業計画書執筆作法(1)
14. 授業計画書執筆作法(2)
15. 問題研究 大学入試センター試験

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席・模擬授業:50% (2)最終テスト:50%

教えるための古典

担当者：濱田 寛, 有馬 義貴

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この科目で学ぶ「古典」とは日本と中国の古典文学である。2人の担当者が7時間ずつ講義を行い、それぞれ8時間目に「中間試験」を実施する。

前半の古文では、用言を中心に古典文法の基礎を学習し、演習として『竹取物語』を読む。

中国古典では、基本的な漢文の語法を学習し、その演習として「散文」作品の読解を行う。文学史に関連して、より専門的な事項についても丁寧な解説を行う予定である。

2.学びの意義と目標

将来、生徒たちに教えるためには、古典の豊かな世界を楽しむことができるようになってこそ魅力的な授業が可能になる。

準備学習(予習)

シラバスを参照して講義内容に関わるテーマについて教科書・プリントの予習をすること / 具体的には教場にて指示

準備学習(復習)

自主課題プリント配付予定

授業計画

1. 古典文法入門
2. 動詞(1) (四段活用動詞)
3. 動詞(2) (上一段・上二段活用動詞、下一段・下二段活用動詞)
4. 動詞(3) (変格活用動詞)
5. 形容詞・形容動詞
6. 演習『竹取物語』(1)
7. 演習『竹取物語』(2)
8. 古典分野中間試験
9. 漢文訓読概説(1)
10. 漢文訓読概説(2)
11. 漢文訓読概説(3)
12. 儒家の思想 / 『論語』
13. 儒家の思想 / 『孟子』
14. 儒家の思想 / 『荀子』
15. 道家の思想 / 『老子』 * 定期試験にて学期末試験を実施

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)中間試験:50%:第8週に実施 (2)学期末試験:50%:定期試験に実施
全講義に出席する必要がある。欠席の場合はMoodleなどで講義内容を確認すること。

教えるための古典

担当者：濱田 寛, 有馬 義貴

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

前半の「漢文」では、「韻文」を中心に扱う。具体的には『詩経』から唐詩までの中国の韻文の史的展開と具体的な作品に即した鑑賞を行う。後半の「古文」では、助動詞を中心に古典文法の基礎を学習し、演習として『徒然草』を読む。

2.学びの意義と目標

人に教える為には、教授法の技術を磨く前に、まず自らの学力を養わなければならない。古典の豊かな世界を楽しむことができるようになって、始めて魅力的な授業も可能になる。文法もまた同じことが言えよう。

準備学習(予習)

シラバスを参照して講義内容に関わるテーマについて教科書・プリントの予習をすること / 具体的には教場にて指示

準備学習(復習)

その日に学んだことを確実に身に付けていくよう復習を行うこと。あやふやな事柄は必ず辞書を引いて確認する習慣を身に付けよう。

授業計画

1. 中国古典詩概説
2. 近体詩概説(1)
3. 近体詩概説(2)
4. 近体詩概説(3)
5. 新体詩概説(1)
6. 新体詩概説(2)
7. 新体詩概説(3)
8. 漢文分野中間試験
9. 助動詞概説、過去の助動詞
10. 完了の助動詞、推量の助動詞(1)
11. 推量の助動詞(2)、伝聞・推定の助動詞
12. 打消・打消推量の助動詞
13. 断定の助動詞、尊敬の助動詞
14. 演習『徒然草』(1)
15. 演習『徒然草』(2) * 定期試験にて期末試験を実施

教科書

評価方法

(1)中間試験:50%:第8週に実施 (2)学期末試験:50%:定期試験期間に実施
全講義に出席する必要がある。欠席の場合はMoodleなどで講義内容を確認すること。

教えるための古典

担当者：濱田 寛, 有馬 義貴

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

前半の「漢文」は、「史書」を中心に扱う。具体的には『春秋』三伝の比較対照を行いつつ「春秋の義」について学び、また高等学校の教材として定番ともいえる『史記』について、知見を深めたい。後半の「古文」は、助詞を中心に古典文法の基礎を学習し、演習として『伊勢物語』を読む。

2.学びの意義と目標

人に教える為には、教授法の技術を磨く前に、まず自らの学力を養わなければならない。古典の豊かな世界を楽しむことができるようになって、始めて魅力的な授業も可能になる。

準備学習(予習)

シラバスを参照して講義内容に関わるテーマについて教科書・プリントの予習をすること / 具体的には教場にて指示

準備学習(復習)

その日に学んだことを確実に身に付けていくよう復習を行うこと。あやふやな事柄は必ず辞書を引いて確認する習慣を身に付けよう。

授業計画

1. 中国史書概説
2. 『春秋』読解演習(1)
3. 『春秋』読解演習(2)
4. 『史記』読解演習(1)
5. 『史記』読解演習(2)
6. 『史記』読解演習(3)
7. 『史記』読解演習(4)
8. 漢文分野中間試験
9. 助詞概説、格助詞
10. 接続助詞
11. 副助詞
12. 係助詞
13. 終助詞・間投助詞
14. 演習『伊勢物語』(1)
15. 演習『伊勢物語』(2) * 定期試験にて期末試験を実施

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)中間試験:50%:第8週に実施 (2)学期末試験:50%:定期試験期間に実施
全講義に出席する必要がある。欠席の場合はMoodleなどで講義内容を確認すること。

教えるための古典

担当者：濱田 寛, 有馬 義貴

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この科目で学ぶ「古典」とは、日本と中国の古典文学である。2人の担当者が7時間ずつ講義を行い、読解力を養う。日本の古典では、和歌の修辞法や敬語法について学習し、演習として『古今和歌集』・『新古今和歌集』・『枕草子』を読む。後半の漢文では、中国文学史を軸に、様々な作品を鑑賞する。また、日本漢文学についても理解を深めることになる。

2.学びの意義と目標

人に教える為には、教授法の技術を磨く前に、まず自らの学力を養わなければならない。古典の豊かな世界を楽しむことができるようになって、始めて魅力的な授業も可能になる。

準備学習(予習)

シラバスを参照して講義内容に関わるテーマについて教科書・プリントの予習をすること / 具体的には教場にて指示

準備学習(復習)

その日に学んだことを確実に身に付けていくよう復習を行うこと。あやふやな事柄は必ず辞書を引いて確認する習慣を身に付けよう。

授業計画

- 1.和歌の修辞法(1)
- 2.和歌の修辞法(2)
- 3.演習『古今和歌集』・『新古今和歌集』
- 4.敬語法(1)
- 5.敬語法(2)
- 6.演習『枕草子』(1)
- 7.演習『枕草子』(2)
- 8.古典分野中間試験
- 9.中国文学史(1)
- 10.中国文学史(2)
- 11.中国文学史(3)
- 12.中国文学史(4)
- 13.日本漢文学史(1)
- 14.日本漢文学史(2)
- 15.日本漢文学史(3) * 定期試験にて期末試験を実施

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)中間試験:50%:第8週に実施 (2)学期末試験:50%:定期試験期間に実施
全講義に出席する必要がある。欠席の場合はMoodleなどで講義内容を確認すること。

海外文化交流研修(アジア)A

担当者：未定

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

3月初めに実施する韓国研修旅行（主に啓明大学校訪問）を中心に、事前の「韓国語講習」「韓国文化講習」及び、研修旅行後の「事後講習」を通じて総合的に日本と韓国との文化交流の歴史と現在を学ぶものである。

1～4年生対象の「体験と実践」を重視する「学科基礎科目」のうちの選択必修科目の一つに位置付けられる。

2.学びの意義と目標

研修旅行においては本学との提携校である啓明大学校との交流（交流会等）をメインに、韓国のヒト・モノ・コトに実際に触れ、関わることで、実践的な「異文化体験」をすることになる。その体験は、学生個々の体験として、あるいは共に参加する学生たちのお互いの共有体験として、将来にわたって貴重なものとなるだろう。

準備学習(予習)

- 1、韓国語講習：2月に集中授業を実施
- 2、外部講座受講（レポート提出）
- 3、課題図書研究（レポート提出）
- 4、その他のミーティング

準備学習(復習)

- 1、研修レポート、冊子の作成
- 2、事後講習として外部講座受講（レポート提出）

授業計画

- 1.「事前講習」「研修旅行」「事後講習」すべてについて、ガイダンス内で指示する。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)韓国語講習:10% (2)韓国文化講習:15% (3)研修旅行:50%
(4)事後講習:25%

担当者：溝口 カブスン

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

正確な発音に基づく反復指導をする。特に、語彙を増やすこと発話力に重点を置く。
文法事項の復習も併行して行う。
また、韓国の現代社会・文化を理解するための映像教材を積極的に活用していく。

授業計画

1. STEP 1 1 基本の文字を覚えましょう、基本会話I
2. 2 文字はこれで全部です、基本会話II
3. 3 パッチムと発音の変化、基本会話III
4. STEP 2 1 ホテルで名前を聞かれました
5. 2 フロントで時間をたずねました
6. 3 街で場所をたずねました
7. 4 友達の誘いをことわりました
8. 5 地下鉄に乗りました
9. 6 タクシーで観光をすすめられました
10. 7 メニュー選びに迷いました
11. 8 料理の感想を聞かれました
12. 9 伝統茶は種類が豊富です
13. 10 お茶を飲みながら話をしました
14. 11 市場で買い物をしました
15. 12 待ってくださいと言われました
16. 13 ショッピングに行きました
17. 14 警備員に注意されました
18. 15 商品をすすめられました
19. 16 値段の交渉をしました
20. 17 エステに行きました
21. 18 明日の予定を話しました
22. 19 劇場に行きました
23. 20 ロビーで話をしました
24. STEP 3 HOTEL / ホテル・TOWN / 街中
25. TRANSPORTATION / 交通・RESTAURANT / レストラン
26. TEAROOM / 茶房・MARKET / 市場
27. SHOPPING 1・2 / 買い物
28. AESTHETIC / エステ・THEATER / 劇場
29. 韓国の現代社会に触れるI
30. 韓国の現代社会に触れるII

2.学びの意義と目標

以下の能力を養成し、知識を深める。
1 韓国語で簡単な日常会話をすること
2 そのために必要な言語知識を身に付けること
3 韓国の現代社会・文化に対する理解を深めること

準備学習(予習)

韓国語の日記
発表準備

教科書

溝口甲順 『入門ドリル 書いて簡単！韓国語』（一藝社）

準備学習(復習)

毎回、学習内容から課題を指示する。
プリントを配布する場合もある。

評価方法

(1)発表・レポート:60% (2)小テスト・提出物:30% (3)授業態度:10%

韓国語コミュニケーションB

担当者：金 三順

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1. 内容

韓国語Iまたは韓国語IIを履修した学生を対象にする。会話を中心としながら、やや複雑な文型が理解できるように指定したテキストにそって学習していき、中でも特にコミュニケーション力を養うところに重点をおく。合わせて、言語の背景にある文化や社会などの知識を広げていくために映像などの資料を通してより理解を深めていく。

2. カリキュラム上の位置づけ

韓国語の初級から中級的な位置づけである。

2.学びの意義と目標

初級レベルの段階で終わらず、もう少し進んだ学習ができる。基礎的な文型からの応用力が身にづけられ、自分の意志や考えをしっかりと表現ができ、さらに文化などの映像資料を通して韓国への一人旅や歌、ドラマなども楽しめる学習ができるように目指す。

準備学習(予習)

会話の練習の際、より楽しめることができるように、指定したテキストの単語や発音などは事前に予習してほしい。

準備学習(復習)

学習が終わった文章や単語などは必ず暗唱し、韓国人と会話の際、自然に話せるように自分のものにするように復習してほしい。

授業計画

1. 授業のガイダンス、『大韓民国』について
2. 第1課 韓国語の勉強にきました。
3. ソウルの観光のスポーツ
4. 第2課 鐘路で下宿しようと思います。
5. 慶州(新羅の都)の観光スポーツ
6. 第3課 少し教えていただけますか。
7. 仮面劇、舞踊、国楽について
8. 第4課 湿気が多くてとても蒸し暑いです。
9. 韓国の伝統的な家屋について
10. 第5課 好きな韓国の食べ物はなんですか。
11. キムチの作り方や韓食について
12. 第6課 忙しければ今度の土曜日に旅行に行きませんか。
13. 族譜について
14. 第7課 景福宮と仁寺同に行った覚えがあります。
15. 俳優、伊原剛志
16. 朱蒙(高句麗の始祖、総集編)
17. 第8課 サンウさんに聞いてみるがあります。
18. 李朝王朝の最後の太子妃 『李方子』
19. 第9課 何を作るのですか。
20. ナザレ園日本妻
21. 第10課 話がj はやくて聞き取れません。
22. 日韓併合への道
23. 第11課 何を聞いていますか。
24. 徴兵制度について
25. 第12課 着てみてもいいですか。
26. 新韓流(NHK作成、60分)
27. 第13課 顔をみたらむくんではいますね。
28. 結婚や礼儀作法などについて
29. 第14課 何号線に乗らなければなりませんか。
30. 総合的な感想の発表

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業の参加度:30% (2)発表や小テスト:40% (3)期末テスト:30%
できる限り授業に真面目に参加してほしい。

韓国文化演習

担当者：清水 均

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1、本学と提携関係にある韓国啓明大学の夏季セミナー（KLCC・3週間）に参加して、認定される科目である。午前中は韓国語を学び、午後は伝統的な韓国文化を体験する。韓国語のクラスは初級からの学びが可能である。また午後の韓国文化の体験学習は、韓国茶道、伝統演劇・音楽・舞踏・技術・武道、現地訪問など多彩なプログラムが用意されており、通例の留学では経験しがたいほどに豊富な内容になっている。2、3週間の寮生活を通して、韓国文化の理解を深め、韓国の学生たちと交流を深めることが出来るのも魅力のひとつであろう。

2.学びの意義と目標

「海外文化交流研修（アジア）」を経験してから、翌年この科目を履修するも良いし、その逆もありうる。いずれにせよ、近くて遠い国といわれた韓国との関係改善は、次代を担う若者たちの相互理解から始まるといえる。

準備学習(予習)

研修先の指示、基準に従う。

準備学習(復習)

研修先の指示、基準に従う。

授業計画

1. 研修先である韓国啓明大学のプログラムに従う（以下同様）
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.
- 8.
- 9.
- 10.
- 11.
- 12.
- 13.
- 14.
- 15.
- 16.
- 17.
- 18.
- 19.
- 20.
- 21.
- 22.
- 23.
- 24.
- 25.
- 26.
- 27.
- 28.
- 29.
- 30.

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)本学における事前準備講座:10%
- (2)現地研修の出席状況:60%
- (3)事後レポート:30%

教職演習 A

担当者：有馬 義貴

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代文の読解問題について演習形式にて検討を加える。

2.学びの意義と目標

- ・現代文についてより深い理解とより確かな読解力の涵養を目指す。
- ・「解答者」としての立場に限定せず、読解問題作成における「出題者」としての視点も含んだ、複眼的な視点からの学習を目指す。

準備学習(予習)

事前に配付するプリントの読解問題を解いた上で授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業で検討を加えた問題について、自分自身で解説できるようにしておくこと。

授業計画

1. ガイダンス及び演習(1)
2. 演習(2)
3. 演習(3)
4. 演習(4)
5. 演習(5)
6. 演習(6)
7. 演習(7)
8. 演習(8)
9. 演習(9)
10. 演習(10)
11. 演習(11)
12. 演習(12)
13. 演習(13)
14. 演習(14)
15. 演習(15)及び総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:80% (2)平常点:20%

教職演習 B

担当者：有馬 義貴

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

教員にとって授業の成否を決定する重要かつ基本的な作業である教材研究の方法を学ぶ。なお、本演習は「教職演習A」を継続するものである。

2.学びの意義と目標

教員は一方でよく学ぶ者でありたい。教材研究の方法を実践的に学びつつ、自立した学習スタイルの習得を目標とする。

準備学習(予習)

演習発表の資料の準備に相当の時間を要する。

準備学習(復習)

演習発表（他の受講者の発表も含む）について、評価できる点や改善すべき点などをまとめておくこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 演習準備（1）
3. 演習準備（2）
4. 演習準備（3）
5. 演習準備（4）
6. 演習準備（5）
7. 演習（1）
8. 演習（2）
9. 演習（3）
10. 演習（4）
11. 演習（5）
12. 演習（6）
13. 演習（7）
14. 演習（8）
15. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:80% (2)平常点:20%

キリスト教文化論 A

担当者：柳田 洋夫

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の歴史や現状を知るために、宗教についてのある程度の理解が必要不可欠であることは言うまでもない。また、日本人は「無宗教」であるというが、ほんとうにそうであろうか。この授業においては、宗教学的アプローチを援用しつつ、宗教とは何かについて考えていきたい。

2.学びの意義と目標

宗教一般についての基本的理解を得るとともに、特にキリスト教と文化との関連について学び考察する。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. 宗教の「始まり」について
2. 宗教・呪術・科学
3. さまざまな宗教のかたち
4. 何を信じるのか - 宗教的实在観について
5. 宗教から見た人間 - 宗教的人間観について
6. 宗教から見た世界 - 宗教的世界観について(1)
7. 宗教から見た世界 - 宗教的世界観について(2)
8. 宗教儀礼・修行について(1)
9. 宗教儀礼・修行について(2)
10. 宗教集団について(1)
11. 宗教集団について(2)
12. 文化とキリスト教(1)
13. 文化とキリスト教(2)
14. Gospel in 文楽
15. まとめと試験

教科書

プリントを配布する

【参考文献】

脇本平也『宗教学入門』岸本英夫『宗教学』
A・E・マクグラス『キリスト教神学入門』

評価方法

(1)出席・参加度:40% (2)試験:40% (3)礼拝レポート:20%
試験と礼拝レポートの詳細については授業で指示する。出席状況と礼拝レポート提出数が規定に満たない場合は評価の対象としない。

キリスト教文化論 B

担当者：柳田 洋夫

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「神学こそは、およそ人が学びたいと願うものの中で最も魅力的なものだ」とイギリスの神学者A・E・マクグラスは言う。キリスト教神学は、欧米文化のみならず日本文化の深層からの理解にも資するものである。この授業においては、キリスト教神学について、また、人格・人権思想へのキリスト教の貢献について学ぶ。

2.学びの意義と目標

キリスト教神学思想についての基礎的理解を得ることによって、神学や哲学についての文献や議論にある程度対応できるようになるとともに、抽象的な問題にも自ら積極的に挑む姿勢を身につける。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. 「神学」とそのよりどころ(1)
2. 「神学」とそのよりどころ(2)
3. 神はどのようにして知られるか 啓示と自然
4. 神学と諸思想(1) 神学と哲学との微妙な関係
5. 神学と諸思想(2) ロマン主義・マルクス主義
6. 神学と諸思想(3) フェミニズム・ポストモダニズム
7. 神学と諸思想(4) 解放の神学・黒人神学
8. 神についての探求(1)
9. 神についての探求(2)
10. 神と創造
11. イエス・キリストとは誰のことが
12. 聖霊と「霊性」
13. 救いとは何か
14. キリスト教と人権
15. まとめと試験

教科書

プリントを配布する

【参考文献】A・E・マクグラス『キリスト教神学入門』

評価方法

(1)出席・参加度:40% (2)試験:40% (3)礼拝レポート:20%
試験と礼拝レポートの詳細については授業で指示する。出席状況と礼拝レポート提出数が規定に満たない場合は評価の対象としない。

近代文学読解

担当者：菊池 有希

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本授業では、松本清張の『砂の器』をテキストに、批評理論の考え方とその実践の仕方について学んでゆく。「テキストを批評的に読むとはいかなる営為か」ということの一部を覗いてもらうというのが、本授業の趣旨である。

2.学びの意義と目標

本授業で学ぶことになる批評理論の考え方は、小説作品に限らず文学作品一般、もっと言えば広義の文化現象について考察する上でも有効であろうと思われる。授業を通して学んだ「読み」の作法を様々な場面で実践できるようになること、それが本授業の学びの目標である。

準備学習(予習)

指定のテキストを読了しておくこと。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 批評理論とは何か
3. ジャンル批評
4. 読者反応批評
5. マルクス主義批評
6. ポストコロナル批評
7. 新歴史主義
8. 中間まとめ
9. 文化批評
10. フェミニズム批評
11. 精神分析批評
12. 脱構築批評
13. 透明な批評
14. 期末まとめ
15. 試験及びその解説

教科書

松本 清張 『砂の器 上 (新潮文庫)』 (新潮社)
松本 清張 『砂の器 下 (新潮文庫)』 (新潮社)

評価方法

(1)試験:100%

言語学概論

担当者：D. バーガー

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

この授業は言語学の入門講座である。言語の色々な様式（話しことば、手話、書き言葉）、人間の言語は動物のコミュニケーション手段とどのように異なるか等、われわれの言語知識の構成要素などを含む言語の本質を考察することから始まる。次に、人間の脳の言語機能についての簡単な紹介に続き、形態論、統語論、意味論、音声学、音韻論という言語研究の主な分野をそれぞれ順に概説する。最後に、言語がどのように変化するか、人間がどのように言語を習得するかについて紹介する。一般的な人間の言語だけではなく、言語の普遍的な特性と各言語がどのようにその特性を実現するかを理解するために日本語と英語を始め、様々な世界の諸言語（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、ポントック語、チカソー語、トルコ語、アカン語等々）の事例を考察する。

2. 学びの意義と目標

この授業を通して言語学を理解を深めると同時に、普段、無意識的に用いている言語の性質を認識することを望んでいる。

準備学習(予習)

前回と当日の授業のキーワードの一覧を参照すること。

準備学習(復習)

講義を聞きながら記入したワークシートを復習すること。小テストのためにキーワードとワークシートを復習すること。

授業計画

1. 授業紹介、言語の本質
2. 言語について何が分かっているか
3. 言語知識:音体系の知識、意味の知識、言語知識の創造性、文と非文の知識
4. 言語知識:
言語知識と言語運用、文法の知識、記述文法、規範文法、教授用文
5. 言語普遍性:文法の発達、手話（言語生得の証拠）
6. 動物の「言語」
7. 人間の脳:脳の2つの側面、一側化の証拠、失語症の研究
8. 人間の脳:分離脳、一側化の他の証拠
9. 言語の文法的側面 I:形態論 語の構造
10. 形態論
11. 形態論
12. 言語の文法的側面 II: 統語論 言語の文型
13. 統語論
14. 統語論
15. 言語の文法的側面 III:意味論 ことばの意味
16. 意味論
17. 意味論
18. 言語の文法的側面 IV:音声学 言語の音
19. 音声学
20. 音声学
21. 音声学
22. 言語の文法的側面 V: 音韻論 言語の音型
23. 音韻論
24. 音韻論
25. 言語変化: 音変化の規則性、音韻変化
26. 言語変化: 形態変化、統語変化
27. 言語変化: 語彙変化、借用語
28. 言語習得: 幼児言語習得の段階
29. 言語習得: 言語習得の生物学的基盤、「生得説」
30. 言語習得: 「臨界期仮説」、第2言語習得理論

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)授業への出席:10% (2)授業での参加態度:10% (3)ワークシート:30% (4)小テスト:25% (5)期末試験:25%

言語学特殊講義

担当者：小林 茂之

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

アングロサクソン時代の古英語の文法を学び、代表的な古英語文献を原文で講読する。英語文化圏における古典を読み、キリスト教のブリテン島への伝来と普及、ヴァイキングの侵略とヴァイキングとの戦いについて学ぶ。また、受講者は、古英語の文学に日本古典の戦記文学との共通性を見いだせるだろう。

2.学びの意義と目標

古英語を通して歴史言語学の基礎的知識と文化・歴史・宗教的背景を総合的に学ぶとともに、人文学における比較研究の視点を養い、大学レベルにおける人文学研究の基礎的知識と方法を身に付け、卒業研究や人文学系大学院への進学など、研究の発展を図る。

準備学習(予習)

毎回、教科書の講読箇所を読んでくることが理想的であるが、それができない場合には、講読後に内容を確認することを望む。なお、講読では日本語訳や対訳をプリントで予習用に配布する。

準備学習(復習)

教科書の内容を把握して、古英語の知識を身に付ける。また、日本の古典や歴史・文化との比較について考察してみる。

授業計画

1. 導入(1)
2. 導入(2)
3. Ch.1
4. Ch.2
5. Ch.3.1-3.2
6. Ch. 3,3-3.4
7. Ch.4
8. Ch.5
9. Ch.6
10. Ch.7
11. Ch. 8
12. Ch. 9
13. Ch.10
14. Ch.11
15. Ch.12
16. Ch.13
17. Ch.14
18. Ch.15
19. 古英語原文講読(1)
20. 古英語原文講読(2)
21. 古英語原文講読(3)
22. 古英語原文講読(4)
23. 古英語原文講読(5)
24. 古英語原文講読(6)
25. 古英語原文講読(7)
26. 古英語原文講読(8)
27. 古英語原文講読(9)
28. 古英語原文講読(10)
29. 予備日
30. まとめ

教科書

Peter S. Baker 『Introduction to Old English』 (Wiley-Blackwell)

評価方法

(1)レポート:40% (2)出席:30% (3)授業態度:30%

担当者：内藤 みち

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要**1.内容**

日本語の特徴的表現に対する外国人の理解や受けとめ方を通しその特質を学んだり、日常使用している日本語を様々な角度から分析し話者の属性や対話対象との人間関係等の規則性を捉えていく社会言語学的内容となる。特定の日本語表現に対する諸外国の人々の理解や異なるコミュニティに属する日本人の受けとめ方方については主に読み物を通し触れていくが、受講生自身の言語活動もその特質を導き出す分析対象となる。

2.学びの意義と目標

日本語母語話者の言語意識や言語活動から日本語の特質やその規則性を見出ししていくことにより、日本語が話される社会の規則性に触れていく。日本語の表現を通し、属しているコミュニティや話し手と聞き手の人間関係を導き出したり、社会背景の変化をみる。

準備学習(予習)

日本語表現等を拾い出し考察する事前課題がある。

準備学習(復習)

授業内容で扱った言語表現や言語活動の身のまわりでの使用を取り上げ考察する復習がある。

授業計画

1. 授業概要、「ファティック」
2. 「察し」
3. 「集団語 / 属性」(1)
4. 「集団語 / 属性」(2)
5. 非言語コミュニケーション(1)
6. 非言語コミュニケーション(2)
7. 言語と文化(1)
8. 中間試験
9. 言語と文化(2)
10. 言語変化(1) / 語彙
11. 言語変化(2) / 文法
12. 言語変化(3) / 音声
13. 「対称詞」
14. 「自称詞」
15. 総まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)中間試験:35% (2)期末試験:35% (3)提出物等:10%
(4)クラスワーク:20%

言語文化論

担当者：小林 茂之

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

英語は、多くの日本人にとってもっとも身近な外国語である。しかし、英語はもともとブリテン島にやってきたゲルマン系部族の弱小方言に過ぎず、世界語に発展するまでの過程には、歴史的変遷に伴う多くの変化が起きた。16Cに現代英語(PDE)に近い初期近代英(EModE)が成立し、現代でも普通に用いられる最も古い英語訳聖書である欽定訳聖書は、初期近代英語による傑出した作品である。本講義の前半では、BBC製作の日本語版DVDを楽しみながら、ほぼ内容が対応し、やさしい英語に書き直された教科書を読み進めていく。前半では、ベーオウルフ、チョーサ、後半では、格調を備えた英語の規範となった欽定訳聖書の英語についてやや詳しく取り上げたい。また、さいたまの彩の国劇場で、上演されてきた地元の文化となったシェイクスピアについても取り上げる。

2.学びの意義と目標

言語と文化との関係を歴史を通して学ぶ。特に、イギリス英語とアメリカ英語が異なる理由を知ることが、英語学習に大変役立つ。

準備学習(予習)

教科書を予習してることが理想的であるが、少なくとも毎回の授業後に内容を確認する。また、CDを聞いて、教科書を読んでくる。

準備学習(復習)

積極的に発展的読書をする。また、発展的読書を通して、レポートの準備をする。

授業計画

1. 千年の歴史と五大陸への展開(Video 1)
2. テキスト Introduction
3. テキスト Ch.1 (1)
4. テキスト Ch.1 (2)
5. 異文化との出会い(Video 2)
6. テキスト Ch.2 (1)
7. テキスト Ch. 2 (2)
8. シェイクスピアの時代 (Video 3)
9. テキスト Ch. 3 (1)
10. テキスト Ch. 3 (2)
11. スコットランド人海を渡る (Video 4)
12. テキスト Ch. 4 (1)
13. テキスト Ch. 4(2)
14. 黒人たちの英語(Video 5)
15. テキスト Ch. 5(1)
16. テキスト Ch. 5 (2)
17. 開拓者のアメリカ(Video 6)
18. テキスト Ch. 6(1)
19. テキスト Ch. 6(2)
20. 大英帝国の遺産(Video 7)
21. テキスト Ch. 7(1)
22. テキスト Ch. 7(1)
23. 武器としてのアイルランド語(Video 8)
24. テキスト Ch. 8(1)
25. テキスト Ch. 8(2)
26. 英語の未来(Video 9)
27. テキスト Ch. 9(1)
28. テキスト Ch. 9(2)
29. 英語訳聖書の比較:初期近代英語と現代英語(1)
30. 英語訳聖書の比較:初期近代英語と現代英語(2)

教科書

Bright Viney 『History of English』 (Oxford University Press)

評価方法

(1)レポート:40% (2)出席:30% (3)授業態度:30%

古典読解 A

担当者：網本 尚子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この授業では、主に平安時代の代表的な文学作品のいくつかを読み味わう。単に現代語訳するだけでなく、読解に際して必要な古語や文法の知識を深めるとともに、平安時代の風俗や考え方についての講義を通して、古典を学ぶ上で最低限覚えておくべき常識を身につける。

2.学びの意義と目標

私たちと同じ日本人が、平安時代にどのように生活し、どのような物の考え方をしていたのかを知ることによって、現代と古典の世界がかけ離れたものではなく、現代は昔の日本の延長上に成立していることを理解する。また、平安時代と現代との相違点や共通点について考察し、双方の根底に横たわる、日本人としての共通認識や常識について理解を深めることを目標とする。

準備学習(予習)

授業で取り上げる作品について、辞典・事典・高校の教科書・参考書などで、あらかじめ下調べしておくこと。

準備学習(復習)

試験では、ノート・プリントの持ち込みを許可するので、ノート整理は毎回きちんとしておくこと。

授業計画

1. ガイダンス・日本語の言葉遊び
2. 和歌 1 女性歌人の詠んだ恋の歌
3. 和歌 2 百人一首に見られる恋の歌
4. 伊勢物語 1 伊勢物語とは？井筒の女の物語
5. 伊勢物語 2 伊勢物語に描かれた恋愛
6. 伊勢物語 3 伊勢物語を題材とした能
7. 枕草子 1 清少納言の経歴。清少納言と紫式部
8. 枕草子 2 すばらしい女性とは？
9. 枕草子 3 宮中の楽しい思い出
10. 枕草子 4 好きな花あれこれ
11. 源氏物語 1 紫式部の経歴
12. 源氏物語 2 紫式部の処世術。桐壺更衣の生き方
13. 源氏物語 3 桐壺更衣の受けたいじめと桐壺帝の愛情
14. 源氏物語 4 光源氏の女性遍歴と紫上の苦悩
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席点:15%:授業日数の三分の二以上出席
- (2)平常点:15%:授業内で行う復習問題、宿題の内容で評価
- (3)試験:70%
欠席・遅刻・早退・学生証忘れなどは、出席点減点の対象とする。
受講態度が悪い(私語・居眠り・ノートを取らない・課題にまじめに取り組まないなど)場合は、平常点を減点する。

古典読解 B

担当者：網本 尚子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この授業では、主に中世の代表的な文学作品のいくつかを読み味わう。単に現代語訳するだけでなく、読解に際して必要な古語や文法の知識を深めるとともに、その時代の風俗や考え方についての講義を通して、古典を学ぶ上で最低限覚えておくべき常識を身につける。

2.学びの意義と目標

私たちと同じ日本人が、中世においてどのように生活し、どのような物の考え方をしてきたのかを知ることによって、現代と古典の世界がかけ離れたものではなく、現代は昔の日本の延長上に成立していることを理解する。また、中世と現代との相違点や共通点について考察し、双方の根底に横たわる、日本人としての共通認識や常識について理解を深めることを目標とする。

準備学習(予習)

授業で取り上げる作品について、辞典・事典・高校の教科書・参考書などで、あらかじめ調べしておくこと。

準備学習(復習)

試験では、ノート・プリントの持ち込みを許可するので、ノート整理は毎回きちんとしておくこと。

授業計画

1. ガイダンス・陰陽師安倍晴明
2. 今昔物語 1 平安末期の人々の生活
3. 今昔物語 2 平安末期の凶悪犯罪
4. 今昔物語 3 芥川龍之介『藪の中』と今昔物語
5. 平家物語 1 敦盛の最期
6. 平家物語 2 小督の悲恋
7. 平家物語 3 那須与一の大勝負
8. 徒然草 1 徒然草と平家物語。兼好法師の生い立ち
9. 徒然草 2 兼好法師の女性観
10. 徒然草 3 兼好法師の人生観
11. 能 1 平家物語と能。能初心者のための鑑賞講座
12. 能 2 能「安宅」と歌舞伎「勧進帳」
13. 狂言 1 狂言の歴史
14. 狂言 2 狂言の特徴
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席点:15%:授業日数の三分の二以上出席
- (2)平常点:15%:授業内で行う復習問題、宿題の内容で評価
- (3)試験:70%
欠席・遅刻・早退・学生証忘れなどは、出席点減点の対象とする。
受講態度が悪い(私語・居眠り・ノートを取らない・課題にまじめに取り組まないなど)場合は、平常点を減点する。

古典日本語

担当者：上宇都ゆりほ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

『蜻蛉日記』の講読を通して、古典作品を理解する上で必要な基礎知識として、特に古典文法を習熟する。また作者である道綱母の苦悩を通して、平安時代の恋愛・結婚観や、当時の文化的背景など幅広く時代思潮を知る。さらに愛という『蜻蛉日記』のテーマより、世界の愛の名作と比較する。

2.学びの意義と目標

本講座は、古典研究(言語・文学・歴史・文化等)を目指す2年生以上の選択科目である。さらに日文の学生にとっては、第2外国語の選択必修科目であり、さらに教職を目指すものにとっては「教えるための古典」と並行履修をしてそこで学んだことの習熟をはかる科目でもある。それぞれの履修目的に応じて各自の到達目標を設定し、授業に臨んでほしい。

古典文法が苦手という学生は多い。古典文法を覚えるだけの授業は、おそらく古典文学の魅力を大いに削いでしまったのではないか。本講義では、古典文法を最初から学び直し、古典文法を正確に理解することが正確な古典読解の第一歩として重要であることを再認識することを第一目標とする。しかし単なる暗記としての文法ではなく、生きた言語としての古典文学を通して理解するために、平安時代の貴族階級の女性によって創作された日記文学である『蜻蛉日記』を通して、当時の恋愛・結婚観や時代背景の読解も第二の目標として設定する。さらに第三の目標として、日本文学にとどまらず、世界文学の中で愛というテーマを深く考える契機とする。

準備学習(予習)

まず古典になれること。テキストを繰り返し音読し、古語辞書を引いて口語訳を試みること。語学の勉強と同じで、予習・復習が大切である。古語辞典か電子辞書を持参して授業に臨む事。

準備学習(復習)

動詞の活用から始まり、次回学ぶ文法について予習として指示する。また授業の中で学んだ文法について、次の授業で小テストとして習熟度を確認するので、授業で学んだ文法を復習すること。

授業計画

- 『蜻蛉日記』と日記文学 歴史的仮名遣いと五十音図
- 動詞の活用(1)
- 動詞の活用(2)
- 動詞の活用(3)
- 動詞の活用(4)
- 動詞の活用(5)
- 動詞の活用(6)
- 動詞の活用(7)
- 動詞の活用(8)
- 動詞の活用(9)
- 動詞の活用(10)
- 愛と罪をめぐる世界の文学ー「オペラ座の怪人」より「ファントム」(1)
- 愛と死をめぐる世界の文学ー「オペラ座の怪人」より「ファントム」(2)
- 動詞の復習
- 動詞の復習
- 中間試験
- 形容詞の活用(1)
- 形容詞の活用(2)
- 形容動詞の活用(1)
- 形容動詞の活用(2)
- 愛と罪ートルストイ「復活」(1)
- 愛と罪ートルストイ「復活」(2)
- 過去の助動詞
- 打消・打消推量の助動詞
- 完了の助動詞
- 推量の助動詞(1)
- 推量の助動詞(2)
- 受身・尊敬・自発・可能の助動詞
- 断定・希望・伝聞・推定・比況の助動詞
- まとめ

教科書

角川書店『蜻蛉日記(角川ソフィア文庫 ビギナーズ・クラシックス)』(角川グループパブリッシング)
松村明『チェックシート わかりやすい古典文法』(明治書院)

評価方法

(1)中間試験:30% (2)学期末試験:30% (3)小テスト・レポート:40%

古典日本語

担当者：高桑 佳與子

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

古典文法の習熟を図っていきます。『紫式部日記』という古典作品の中でもかなり手応えのある文章を読んでいくことで、古典の文法・読解力をつけていきます。授業内容は、もう一度古典文法の基礎、動詞・助動詞レベルから学習し、敬語の解説も随時加えながら、無理なく深化させていきます。また、『紫式部日記』を読解していくことで、紫式部が仕えた中宮彰子（藤原道長の娘中宮）の華やかな平安貴族の生活を知ることができ、それらを見る紫式部の眼差しから「作家紫式部」の理解も深めていきます。

2. 学びの意義と目標

古典作品を、自力で辞書を引ながら適切に読解できる文法力を養うことが目標です。『紫式部日記』を読むことによって平安文学の頂点を極めた紫式部の体験した世界を知ること。当時の上流貴族の生活や、行事の描写などは歴史的にも価値のあるものです。また、紫式部の精神を理解することは『源氏物語』を始めとし、その後の日本文学に流れる精神への理解につながります。広く古典作品へのアプローチ力を高めるための講座です。

準備学習(予習)

『紫式部日記』の配布プリントを利用してノートを作り、自分で辞書を引いて、口語訳をする。また、文法の教科書は該当部分を読んでおくとよい。

準備学習(復習)

まとめの講義を利用しながら復習を行うとよい。

授業計画

1. 授業概説
2. 秋のけは入り立つままに 歴史的仮名遣い 文・文節
3. 渡殿の戸口の局に見出たせば 単語・品詞の種類
4. 九日、菊の綿を 動詞(1)
5. 御帳の東おもては 動詞(2)
6. 御いださきの御髪おろしたてまつり 動詞(3)
7. 午の時に、空晴れて 動詞(4)
8. 動詞のまとめ
9. 五日の夜は 形容詞・形容動詞(1)
10. 十月十余日までと 形容詞・形容動詞(2)
11. 行幸ちかくなりぬとて 副詞・連体詞
12. おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て 接続詞・感動詞
13. 中間試験
14. 宮の御前聞こしめすや 助動詞(1)
15. 入らせたまふべきことも近うなりぬれど 助動詞(2)
16. 御前の池に、水鳥どもの 助動詞(3)
17. ころもに、物語をとりて見れど 助動詞(4)
18. 師走の二十九日に参る 助動詞(5)
19. 宮の内侍ぞ 助動詞(6)
20. 和泉式部といふ人こそ 助動詞(7)
21. 丹波の守の北の方をば 助動詞(8)
22. 助動詞まとめ
23. 清少納言こそ、したり顔に 助詞(1)
24. よろずのこと、人によりてことごとなり 助詞(2)
25. それ、心よりほかのわが面影をば 助詞(3)
26. 助詞のまとめ
27. さまよう、すべて人はおいらかに 敬語(1)
28. 左衛門の内侍といふ人はべり 敬語(2)
29. いかに、いまは言忌みしはべらじ まとめ
30. まとめ

教科書

松村明 『チェックシートわかりやすい古典文法』(明治書院)

評価方法

- (1) 授業時提出物:20%:授業時発表含む
- (2) 中間試験:40%
- (3) 期末試験:40%

こどもと文化

担当者：寺崎 恵子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

こどもは育つ者である。その育つ過程に、おとなはどのように関わってきたのだろうか。育ち・育ての文化のありようを把握したい。また、こどもは、私たちおとなの目にどのように映る人たちだろうか？日々の暮らしのなかでの、こどもとおとなとの 目交 を文化として把握したい。このような問題意識をもって、広義の こども のおもしろさを把握したい。

2.学びの意義と目標

こどもを把握することは、私たちが自分自身の生き方を確認することでもある。こどもとの関わりのなかで、自分自身について新たな発見が起こることがある。それが、この学びのおもしろさであり、学びの意義である。

こどもの文化のありようを把握して、こどもに関する言説を冷静にとらえて、自身の子ども観を表現することを学びの目標とする。

準備学習(予習)

配布プリントをよく読んで、わからないところに印をつける。

準備学習(復習)

授業の内容と小レポートの内容、そして配布資料とをあわせて、充実したノートを作成する。ノート作成の要点について、初回に説明する。

授業計画

- 1.こどもとおとな（問題提起）
- 2.こどもの原風景（1） 子ども期について
- 3.こどもの原風景（2） わらわらとしていること
- 4.母なるものと父なるもの
- 5.子ども組の役割
- 6.旅すること、冒険すること
- 7.食べる・食べられる
- 8.ことばともの
- 9.話す と 語る
- 10.見ると見える
- 11.教材とのかかわり
- 12.こどもの時間・こどもの空間
- 13.遊ぶこども
- 14.家族のなかのこども
- 15.こどもとおとな(まとめ)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)小レポート:75%:各回5点×15回(2)期末課題:25%:初回に出題する期末課題の書式と取り組み方について、初回に説明する。

児童文学

担当者：藤田 のぼる

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

一口に「児童文学」といっても、童話、小説、詩、絵本、ノンフィクションといったジャンルがあり、これを数ヶ月間の講義でこなすのは難題です。が、あえて欲張ってそれをやってみたいと思っています。ですからこの講義はかなり駆け足の進行になります。

全体は大きく三部に分かれ、第一部（児童文学に描かれた子ども）では、さまざまな角度から作品の中の子ども像を中心に、児童文学作品を紹介していきます。第二部（不思議の形、テーマを深める）では、テーマ、方法、思想などの角度から作品を紹介します。これらを通して、児童文学がなにを、どのように描いているのかをみてもらいます。

第三部のテーマは、「（児童）文学を読むということは、読者にとってどのような行為なのか」ということについて考えるということです。特に児童文学の場合、それを読むことが子どもにとって無条件に「良いこと」とされ、場合によっては強制されたりもするわけですが、本とは、物語とはどのようなものなのかを、皆さんの子ども時代の体験なども合わせながら考えていきたいと思ひます。

2.学びの意義と目標

児童文学は、第一義には子どもの読者に向けて書かれたものですが、今子ども時代と訣別しようとしている時期に、児童文学に触れることには格別の意義があると思ひます。また、大人として、さまざまな場で子どもと相対する機会に、児童文学というアイテムが大きな役割を果たすと思ひます。

準備学習(予習)

テキストに沿った形の講義は後半からになりますが、事前に少しずつ読んでおいてください。

準備学習(復習)

上記「要望」と重なりますが、かなり駆け足の進行になるので、講義の中で紹介された作家、作品について、努めて実際に読むこと。（レポート作成の前提ともなります。）

授業計画

1. 始めに～児童文学の講義を始めるにあたって
2. 児童文学に描かれた子ども1～学校の中の子ども
3. 児童文学に描かれた子ども2～家族の中の子ども
4. 児童文学に描かれた子ども3～社会の中の子ども
5. 児童文学に描かれた子ども4～成長する子ども
6. 児童文学に描かれた子ども5～発見する子ども
7. 児童文学に描かれた子ども6～冒険する子ども
8. 児童文学に描かれた子ども7～闘う子ども
9. 児童文学に描かれた子ども8～さまざまな子ども像
10. 不思議の形～いろいろなファンタジー
11. 不思議の形～ファンタジーの方法1
12. 不思議の形～ファンタジーの方法2
13. 不思議の形～ファンタジーの方法3
14. 不思議の形～ファンタジーの方法4
15. テーマを深める1～「生」と「死」をめぐる
16. テーマを深める2～「愛」について
17. テーマを深める3～「特別」の人たち
18. テーマを深める4～「戦争」に迫る
19. 子どもと読書の問題をめぐる
20. 子どもの「読書離れ」を考える1～内因と外因
21. 子どもの「読書離れ」を考える2～「建前の児童文学」
22. 子どもの「読書離れ」を考える3～児童文学の流れ
23. 「読書」の意味を考える1～物語と小説
24. 「読書」の意味を考える2～物語をめぐる
25. 「読書」の意味を考える3～小説をめぐる
26. 「読書」の意味を考える4～読書という行為の固有性
27. 今、求められる児童文学とは1～情報性ということ
28. 今、求められる児童文学とは2～仕掛けと入口
29. 今、求められる児童文学とは3～子どもたちの「現実感覚」
30. まとめ

教科書

藤田のぼる『児童文学への3つの質問』（てらいんく）

評価方法

(1)レポート:70% (2)出席:15% (3)提出物:15%

出版と編集

担当者：山本 俊明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

わたしたちが読んでいる出版物（書籍や雑誌）を造りだしている「出版（書籍・雑誌）編集者」は、実際にどのような仕事をしているのか。本講義では、キャリアデザインを考えている受講生を対象にし、出版編集者が出版物を作成する過程を実際に体験しながら、出版の理論と方法を学ぶ。

授業内容は、第一に、出版物の企画、編集、制作過程を実際に即して学ぶことである。現在、出版編集者が直面している「『良書』の企画と『売れる本』の企画の葛藤」、「編集・校正作業」を学ぶとともに「著作権（盗用）侵害」、「差別語問題」、「出版物によるプライバシー侵害、名誉毀損問題」など、出版と編集に関わる諸問題を取り上げる。

さらに、現在では出版物をデジタル化し、読書専用端末機スマートフォンなどで読む、ということが実際に行なわれるようになった。「電子出版」の現状と課題を考える。

授業では、実際に「雑誌」（共同作業）と「書籍」（ひとり1点）を作成することを通して、出版と編集過程を体験的に学ぶことをめざす。

2. 学びの意義と目標

本講義では、出版過程を学びながら、受講者が企画に基づいて、取材し、自分で原稿を書き、自分で編集・校正し、装丁（ブックデザイン）する。授業の成果として「雑誌」と「自分の本」を完成させる。このように、実際に体験を通して学ぶことは座学とはことなる学修成果をあげることが期待される。

第一の目標は、コミュニケーション・メディアとしての出版物の出版過程を実習することにより、インタビューによる聞き力、原稿をまとめる編集力、原稿を読み編集し校正する力、というコミュニケーション能力を向上させることである。

第二に、メディアの受け取り手の視点からメディアの制作者、情報の発信者の視点に立つことにより、発信する情報が受け取り手にどのように伝わるかを自己吟味する力、またメディアに対する批判力を身につけることが、この授業の第二の目標である。

準備学習(予習)

「授業掲示板」に授業で取り扱う主題に関する資料が掲載される。設問を考えながら資料をよく読み、授業への準備学習をする。

準備学習(復習)

授業では、各回扱う分量が多いため、省略しながら進められる。「授業掲示板」には授業内容のパワーポイントが載せられているので、内容を確認し復習に利用すること。また編集者が学ぶ編集記号、校正記号などを学ぶが、授業時間だけでは、すべてを取り扱えない。各自で復習して覚えるようにすること。

授業計画

1. 出版と編集の現在 講義の概要
2. 企画の立て方 書籍の企画評価
3. 企画の立て方 書籍の企画傾向
4. 企画の立て方 雑誌の種類と傾向
5. 企画の立て方 雑誌の企画を立てる
6. 企画の立て方 雑誌の企画会議
7. 企画の立て方 雑誌の企画と取材
8. 編集の方法 原稿の作成
9. 編集の方法 インタビューなどの編集
10. 編集の方法 取材の方法と原稿作成
11. 編集の方法 原稿整理の方法
12. 編集の方法 文章を結びつける、入れ替える
13. 編集の方法 原稿の割り付け
14. 編集の方法 翻訳の諸問題
15. 編集の方法 出版・表現の自由と差別語問題
16. 編集の方法 出版と人権侵害問題
17. 編集の方法 著作権と剽窃、盗用問題
18. 校正の方法 本と雑誌の基礎知識と校正記号
19. 校正の方法 原稿引き合わせと初校
20. 校正の方法 赤字引き合わせ、横組校正
21. 校正の方法 コンピュータ植字における問題
22. 造本の方法 印刷の基礎知識、歴史と技術
23. 造本の方法 用紙・製本の基礎知識
24. 造本の方法 装丁の理論
25. 造本の方法 装丁の実際
26. 造本の方法 装丁と造本の実際
27. 電子出版と編集 電子出版の登場による編集
28. 電子出版と編集 電子書籍のコンテンツ編集
29. 電子出版と編集 電子書籍の機能
30. 出版と編集の現在 講義のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)レポート:60%:4つのレポートをそれぞれ点数で評価。
- (2)授業レポート:40%:毎回の授業出席レポートを評価。レポートは、「企画書」「雑誌原稿」「ハリリー・ポッター/ちびくろサンボ問題」「自分の本」の4つであり、それぞれ点数化。授業参加レポートと合計で評価する。

女性学

担当者：藤田 和美

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

女性学とは、既存の知や文化を、ジェンダー（性別）の視点から読み直し、読みかえるものである。近代以降の女性解放運動から現代の女性学研究、更には男性学研究までの学問の成立の歴史的過程をたどりながら、その成果を学び、性・結婚・労働・文化・芸術・メディア・教育・健康・スポーツなど、現代の私達を取り巻く諸問題について考える。

授業は講義を中心に進めるが、グループ学習もおこなう。ビデオなどの視聴覚教材も利用する。毎回授業時に感想を提出してもらう。

2.学びの意義と目標

女性学は研究のための研究ではなく、性差別からの解放を訴えた社会運動と、多分野の学問研究の知見が連動して形成された実践的、かつ学際的な学問研究である。各研究分野における理論的枠組みや方法論などを参考にして、女性であれ、男性であれ、性別にかかわらず私達一人一人が自分らしさを大切にして主体的に考え、行動することができるような性と生のあり方を探る。

現代日本におけるジェンダー問題に対する認識を深め、男女共同参画社会の実現に向けて、私たちは具体的にどうすれば良いのか、社会において何が必要かを様々な角度から検討する。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるトピックについて新聞等で情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、関連する文献を読むこと。

授業計画

1. ジェンダーとは何か(1)
2. ジェンダーとは何か(2)
3. 異文化における女性・男性(1)
4. 異文化における女性・男性(2)
5. 性の多様性(1)
6. 性の多様性(2)
7. 近代化とジェンダー(1)
8. 近代化とジェンダー(2)
9. 慣習とジェンダー(1)
10. 慣習とジェンダー(2)
11. 労働とジェンダー(1)
12. 労働とジェンダー(2)
13. 労働とジェンダー(3)
14. 労働とジェンダー(4)
15. 文化・芸術におけるジェンダー(1)
16. 文化・芸術におけるジェンダー(2)
17. メディアの中の女性像・男性像(1)
18. メディアの中の女性像・男性像(2)
19. スポーツとジェンダー(1)
20. スポーツとジェンダー(2)
21. 家族関係をめぐる諸問題(1)
22. 家族関係をめぐる諸問題(2)
23. 家族関係をめぐる諸問題(3)
24. 家族関係をめぐる諸問題(4)
25. 教育とジェンダー(1)
26. 教育とジェンダー(2)
27. 男女共同参画社会に向けて
28. グループ・ディスカッション
29. 発表
30. 発表、講評

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)授業時の感想:30% (2)宿題:20% (3)レポート:40% (4)発表:10%

書道(初級)

担当者：小室 陽子

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

書は文字を素材にした創造芸術です。先人の残してくれた素晴らしい文化遺産、中国や日本の古典を教材に、正しく美しい文字を書くための場としたい。毛筆を主とし、筆順、書技、理論等、漢字、仮名、硬筆を含め文字そのものについても考えていきたい。又、各書体の特徴をより正確に理解するためにその書体での作品を制作します。

2.学びの意義と目標

書写の指導が必要な中・高等学校の教職を志す学生自身が毛筆で書くことへの抵抗感をなくし、楽しく筆で紙とむきあえるようにし、教壇に立った時によりよい生徒指導ができるようにしたい。

準備学習(予習)

実技が主なので、書道用具を必ず持参、書くことに専念してほしい。

準備学習(復習)

授業で配布されたプリントを改めて読み直し、書体の特徴を理解しておくこと。

授業計画

1. 講師と学生の自己紹介・講義の進め方・評価方法
2. 文房四房、永字八法、氏名揮毫
3. 執筆法、用筆法
4. 書体の変遷
5. 篆書の成立、特徴、石鼓文の鑑賞・臨書
6. 篆書・泰山刻石の鑑賞・臨書
7. 隸書の成立、特徴、曹全碑の鑑賞・臨書
8. 隸書・乙英碑の鑑賞・臨書
9. 草書の成立、特徴、十七帖の鑑賞・臨書
10. 草書・十七帖の臨書
11. 行書の成立、特徴、趙孟頫;行書千字文の鑑賞・臨書
12. 行書・蘭亭序の鑑賞と臨書
13. 行書・蘭亭序の全臨(1)
14. 行書・蘭亭序の全臨(2)
15. 楷書の成立、特徴・九成宮醴泉銘の鑑賞・臨書
16. 楷書・九成宮醴泉銘の臨書
17. 楷書・孔子廟堂碑の鑑賞・臨書, 硬筆
18. 楷書・孔子廟堂碑の臨書
19. 楷書・雁塔聖教序の鑑賞・臨書, 硬筆
20. 楷書・雁塔聖教序の臨書
21. 漢詩作詩(1)
22. 漢詩作詩(2)
23. 仮名の成立、いろは歌
24. 仮名、毛筆・硬筆
25. 仮名、仮名の基本用筆
26. 平安時代の古筆に学ぶ
27. 高野切第三種、鑑賞・臨書
28. 高野切第三種、臨書
29. 作品製作
30. 作品制作・鑑賞

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)実技課題:60%:時間毎の実技課題 (2)授業態度:20%:取り組み方 (3)授業準備:10%:用具の準備なども加味 (4)出席状況:10%

書道(中級)

担当者：小室 陽子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

正しく美しい文字を書くことに加えて、中級では楷書を主として行書・草書・隸書・仮名の各書体をより確実な筆づかいで書けるようにし、意に沿った筆づかいを身につけるようにしたい。

そのために、初級では臨書の中で形臨を主体に行ってきたが、中級では、意臨をも含めた臨書ができるようにすることを目標とします。

さらに、一つの古典を少し長く臨書することによって、より確実な筆づかいを身につけるとともに、書くことに対する集中力を養い、細部まで見られる観察眼を身につけていきたい。又、漢詩を理解することによって古典的な作品の理解が進むこととなるので、漢詩を作詩し新たな面からの鑑賞眼を養うようにしたい。

2.学びの意義と目標

より高度な技術を身につけ、各書体で作品を制作することによって確実にその書体を理解することを目標とします。

準備学習(予習)

実技時間が長くなります。

書道用具を必ず持参し書くことへの集中力を持続させてほしい。

準備学習(復習)

学びから作品制作への方途を時間毎に練り上げていくことを心がけてほしい。

授業計画

1. 楷書・九成宮醴泉銘 臨書
2. 九成宮醴泉銘 臨書
3. 九成宮醴泉銘 臨書
4. 九成宮醴泉銘 臨書
5. 九成宮醴泉銘 臨書
6. 九成宮醴泉銘 臨書
7. 楷書・作品制作
8. 作品制作・鑑賞
9. 行書・蘭亭序 臨書
10. 蘭亭序 臨書
11. 蘭亭序 臨書
12. 蘭亭序 臨書
13. 草書・十七帖 臨書
14. 十七帖 臨書
15. 十七帖 臨書 草書作品制作
16. 草書作品制作
17. 漢詩 作詩
18. 漢詩 作詩
19. 隸書・曹全碑 臨書
20. 曹全碑 臨書
21. 曹全碑 臨書
22. 曹全碑 臨書
23. 隸書・作品制作
24. 作品制作・鑑賞
25. 仮名・高野切 臨書
26. 高野切 臨書
27. 高野切 臨書
28. 高野切 臨書
29. 仮名 作品制作
30. 作品制作・鑑賞

教科書

欧陽詢 『九成宮醴泉銘[唐・欧陽詢/楷書](中国法書選31)』(二玄社)

評価方法

- (1)実技課題:70%:時間毎の実技課題
- (2)授業態度:20%:取り組み方
- (3)出席状況:10%

専門演習 (言語)

担当者：川口 さち子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習では、課題を言語にしぼり、教材を分析しながら、日本語の特徴を探っていく。そして言葉の研究に必要な基礎知識を身につけ、自分の身の周りの事象から日本語の問題点を見つけ出す力をつけてほしい。

講義前半では、主語の問題、代名詞の問題を中心に取り扱う。

後半では、「日本語の乱れ」を中心にテーマに沿った調査・発表の方法を身につけることを目標とする。

2.学びの意義と目標

- ・課題にしたがってデータ検索や調査を行う方法を学ぶ第一歩である。
- ・身の周りの事象に疑問を持ち、問題点を見つけ出す力をつけること。

準備学習(予習)

発表の際は、レジユメを作成する。発表の前に、文献にあたって十分調べること。

準備学習(復習)

他の発表者の発表を見て、いろいろ学び、取り入れること。

授業計画

1. 演習へのガイダンス
2. 英語との比較を通して日本語の特徴を探る
3. 英語との比較を通して日本語の特徴を探る
4. 英語との比較を通して日本語の特徴を探る
5. 好きな題材を選び、日本語の特徴を探る
6. 各自の分析結果の発表・討議・意見交換
7. 各自の分析結果の発表・討議・意見交換
8. 「日本語の乱れ」などを中心にグループに分かれてテーマを選ぶ
9. データ検索・調査の方法を学ぶ
10. 調査・発表その1
11. 調査・発表その2
12. 調査・発表その3
13. レポート作成準備
14. レポート作成準備
15. 最終レポート発表と提出

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)調査発表・レポートの内容:60%
- (2)討論への参加度:20%
- (3)出席状況:20%

専門演習 (言語)

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

普段何気なく耳にし、口に出している日本語の多様性に目を向ける。ことばを通して、性・世代・集団・地域・心理・書きことば・話しことばなどのバラエティを学ぶ。

2.学びの意義と目標

ことばの位相性を学ぶことで、ことばから社会を見る目を養い、多角的なものを見、思考できるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

発表者は十分な発表準備を行うこと。発表者以外は、教科書を熟読しておくこと。

準備学習(復習)

発表者は、自分の発表に対する振り返りレポートを提出すること。発表者以外は、発表者に対するコメントシートを作成すること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 学びの場の多様性
3. 女のことば・男のことば
4. 幼児のことば・育児のことば
5. 専門のことば・仲間のことば
6. 若者ことば・キャンパスことば
7. ことばのデフォルメ
8. 方言のイメージ
9. 東の方言・西の方言
10. 気づかれにくい方言
11. 新しい方言・古い方言
12. 方言と共通語
13. ことばの切り替え
14. 敬うことば・へりくだることば
15. まとめ

教科書

上野 智子, 佐藤 和之, 定延 利之, 野田 春美 『ケーススタディ 日本語のバラエティ』 (おうふう)

評価方法

- (1)出席:25% (2)発表:30% (3)振り返りレポート:10%
(4)期末レポート:25% (5)コメントシート:10%

専門演習 (比較文化)

担当者：菊池 有希

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

幻想文学 (fantastique) は、E.T.A.ホフマンやフランス・ロマン派、あるいはE.A.ポーら西洋の作家によって開拓された文芸ジャンルであるが、日本においても、泉鏡花や谷崎潤一郎、佐藤春夫や江戸川乱歩など、幻想文学作家は数多く存在する。本ゼミにおいては、まず、専門演習の段階において、欧米の幻想文学の概説書を輪読する。その際、重要な事項については、担当者に事典類などで事前に調べてきてもらい、担当箇所を要約の上、報告をしてもらうかたちで進めてゆく。(続く専門演習の段階においては、専門演習において学んだことを基礎に、日本近代幻想文学の各作品の 幻想の方法 について読み解いてゆく予定である。)

2.学びの意義と目標

本ゼミの専門演習では、概説書にしる文学作品にしる、テキストを精読することで得られる 快楽 を、まずは知ってもらい、次に、それを味読しつつ解釈・分析する作法について学んでゆく。このことは、今後各自がどのようなテーマを選択してゆくにせよ、次の卒業研究の段階に進んでゆくために必要な礎石となるはずである。

準備学習(予習)

ゼミ発表においては、周到な準備が要求される。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表及び討議
3. 発表及び討議
4. 発表及び討議
5. 発表及び討議
6. 発表及び討議
7. 発表及び討議
8. 発表及び討議
9. 発表及び討議
10. 発表及び討議
11. 発表及び討議
12. 発表及び討議
13. 発表及び討議
14. 発表及び討議
15. 全体討議

教科書

ジャン・リュック スタインメツ, Jean Luc Steinmetz, 中島 さおり 『幻想文学 (文庫クセジュ)』 (白水社)

評価方法

(1)期末レポート:50% (2)発表:25% (3)授業参加度:25%

専門演習 (比較文化)

担当者：濱田 寛

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

古典学の基本をテキストの「輪読」形式の演習を通して学ぶ。対象とするテキストは和文・漢文に対する受講生の理解度を踏まえて選定する。

2.学びの意義と目標

比較文化の研究を目標とする本ゼミにおける、基礎的・技術的な事項を学ぶ。本演習で修得する知識・技術は卒業研究での自律的な研究のための基礎力に相当する。

準備学習(予習)

演習発表の準備には相当の時間を要する

準備学習(復習)

演習発表において指摘を受けた箇所についての追加調査を「事後報告」として提出する

授業計画

1. ガイダンス
2. 演習方法の解説
3. 模擬演習(1) / 担当教員による模擬演習
4. 模擬演習(2) / 担当教員による模擬演習
5. 演習発表(1)
6. 演習発表(2)
7. 演習発表(3)
8. 演習発表(4)
9. 演習発表(5)
10. 演習発表(6)
11. 演習発表(7)
12. 演習発表(8)
13. 演習発表(9)
14. 演習発表(10)
15. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習発表:80% (2)積極性:20%
積極性とは演習における傾聴・発言に対する評価をいう。演習形式の授業では、演習に「参加」する姿勢が問われる。出席をもって単位が保証される訳では無い。

専門演習 (文化)

担当者：清水 均

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

ある社会学者が「物語」について考えることで私たちは世界の変化とそのしくみについて考えることができるし、逆に世界のしくみとその変化を考えることで、物語たちの魅力を徹底的に引き出すことができる」と述べている。ここには「物語」・「想像力」・「世界のしくみ」における往還構造が示されているが、本ゼミではこの視座に立って、「物語」を通じて私たちの立ち位置を追究していく。

2.学びの意義と目標

現代の「想像力」を分析することを通じて、私たちがどのような世界に存在しているのかを考える。また、そのことを通じて、世界（社会）に対する批評的な視座を獲得することを目指す。

準備学習(予習)

自らの発表の準備は当然「間にあわせ」では充実した発表に繋がらない。持続的な準備の経過を「研究ノート」に記述することを求める。

準備学習(復習)

各授業時における発表に対して、感想・見解・質問を「発表シート」に記述し、毎授業時に提出する。

授業計画

1. ガイダンス:ゼミ形式の授業の方法について
2. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
3. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
4. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
5. 研究発表(1)
6. 研究発表(1)
7. 研究発表(1)
8. 研究発表(1)
9. 研究発表(1)
10. 研究発表(2)
11. 研究発表(2)
12. 研究発表(2)
13. 研究発表(2)
14. 研究発表(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:50% (2)最終レポート:30% (3)研究ノート:10% (4)発表シート:10%

専門演習 (文学)

担当者：黒木 章

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

島崎藤村の『破戒』と田山花袋の『蒲団』を読む。
演習の形で研究の方法等を学ぶ文学入門である。ここでは文学研究のアプローチ法として幾つかの代表的な先行文献等を読んでそれと自分の主体的な読みとを重ねて問題を把握し、今後の自分の研究方法を探るための基礎訓練をする。

2.学びの意義と目標

次に予定されている演習や卒業研究・卒業論文執筆に繋げるようにする。
『破戒』は日本近代文学の可能性を開き、『蒲団』はその可能性を歪めたと言われて久しい。だが、現代の我々からみて本当にそのように言えるのだろうか。作品と周辺の事情を再検討して日本近代文学特に自然主義文学の問題を探究する。

準備学習(予習)

日本近代の小説を読んでとにかく楽しみたい人や将来作家になりたい人など参加の動機はさまざまでよいが、やや高度で専門的な取組みを目指すので、討議参加のための予習・レジュメ作りは必須。

準備学習(復習)

討議と参考文献等の処理の仕方、レポートの作り方などその都度みられる。

授業計画

1. 導入。運営方法の確認
2. 『破戒』読解
3. 同 上
4. 同 上
5. 同 上
6. 同 上
7. 同 上
8. 『蒲団』読解
9. 同 上
10. 同 上
11. 同 上
12. 同 上
13. 『破戒』と『蒲団』をめぐる批評の検討
14. 同 上
15. 同 上

教科書

島崎藤村 『破戒』(新潮文庫)
田山花袋 『蒲団』(新潮文庫)

評価方法

- (1)授業参加態度:40%:討議への積極的参加
- (2)小レポート:30%:討議と参考文献等の取組み
- (3)学期末レポート:30%:定期試験に替えるもの

専門演習 (文化)

担当者：熊谷 芳郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

日本の子どもが置かれた状況、創りだした文化、歩んだ歴史を振り返り、複数で課題を担当して資料収集や発表を行い、その発表内容を基にした研究討議を行う。

また、上級生の研究発表をその準備から関わり、研究会の運営の仕方を学ぶとともに、大学での「学び」について具体的なイメージを持つ。

そのような活動の中から、各自が自分なりの課題を見出していく。見出した課題について、ここで学んだ方法を用いて資料を捜し、ブックレポートを作成する。

2.学びの意義と目標

大学におけるゼミナール形式の授業を初めて体験するという状況を踏まえ、研究の基礎技能について理解していくことを一番の目標とする。

世界は完成し閉じたものではなく、今も動きゆれているものである。子どもと教育、どちらも身近な存在ではあるが、あまり考えたことの無い人も多いだろう。そのような自分の足元を見直すことで、日本を含めたアジアの文化について、それぞれが自分なりの課題意識を持ってこの後の大学での「学び」に関する視点を見つけていくことと目指したい。

さらに、このゼミでの活動を通して、資料の探し方やまとめ方、発表の仕方を理解していくことを目指す。

準備学習(予習)

担当した課題論文を読んでまとめ、発表用の資料を作成する。

準備学習(復習)

研究討議を通じて学んだ内容を整理しておく。

授業計画

1. 授業に関するガイダンス、および子どもをめぐる状況について討議
2. 前回の討議内容を要点整理と、担当課題の決定
3. 図書館ガイダンス
4. 日本の子どもの100年について講義と、講義内容についての研究討議 1。
5. 日本の子どもの100年について講義と、講義内容についての研究討議 2。
6. 日本の子どもの100年について講義と、講義内容についての研究討議 3。
7. 担当した課題について発表と、発表内容についての研究討議 1。
8. 担当した課題について発表と、発表内容についての研究討議 2。
9. 担当した課題について発表と、発表内容についての研究討議 3。
10. 担当した課題について発表と、発表内容についての研究討議 4。
11. 担当した課題について発表と、発表内容についての研究討議 5。
12. 自らの課題に関する発表と、発表内容に関する討議 1。
13. 自らの課題に関する発表と、発表内容に関する討議 2。
14. 自らの課題に関する発表と、発表内容に関する討議 3。
15. 授業の総括と、演習 に向けての留意事項の確認。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)課題レポートと発表:40%
- (2)討議への参加状況:20%:moodlでのディスカッションを含む。
- (3)最終レポート:40%

専門演習 (歴史・思想)

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

歴史・思想の文献から、比較的取り組みやすいものを選び、発表してもらう。

文献を読んで初めて出会った言葉や考え方を丁寧に調べ、不明点や疑問点を率直に出してほしい。必ずやそこに、新しい、未解決の問題が立ち現れるはずである。そんな体験をしてほしいし、それが可能なゼミである。

2.学びの意義と目標

いよいよ卒業研究へとつながる専門的な研究のスタートである。とは言えまだ2年生。まずはレジメを作成するなど、研究発表の練習をしよう。その際、辞書を引く労を惜しんではならない。専門性の高い辞書を引き、調べることの大切さを学ぶのが、この段階での最終的な目標となる。

準備学習(予習)

発表の前の週に、発表に使用する基本研究文献をメンバーに配布する。これは、参加者が事前に文献に目を通した上で発表を聞くことで、理解を深め、討論に参加しやすくするためである。

準備学習(復習)

当ゼミでは、毎回の発表者が作成した配布資料を半年間蓄積すると、極めて分厚いファイルになる。常にファイルを見かえしながら、蓄積型の学びを進めて行ってほしい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 図書館オリエンテーション
3. レジメ作成法～先輩のレジメに学ぶ
4. 学生による発表
5. 学生による発表
6. 学生による発表
7. 学生による発表
8. 学生による発表
9. 学生による発表
10. 学生による発表
11. 学生による発表
12. 学生による発表
13. 学生による発表
14. 学生による発表
15. 学生による発表

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席、発表、議論への参加:50% (2)学期末レポート:50%

専門演習 (歴史・思想)

担当者：川崎 司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容

原則として「日本近現代の歴史・思想」を対象とするが、特に範囲は設けない。自由なテーマで伸び伸びと楽しんでもらいたい。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラム上の位置づけ

考える力、読む力、書く力、聞く力、調べる力、発表する力を身につける場となり、こころ豊かな感性を研く場ともなれば幸いである。

3.学びの意義と目標

研究発表を積み重ねていくうちに、ゼミ生同士の友情が芽生えていけば、これ以上の喜びはない。皆さんの、真実を見つめる目と、優しい手と、温かい心が永遠であることを祈る。

授業計画

- 1...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 2...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 3...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 4...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 5...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 6...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 7...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 8...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 9...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 10...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 11...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 12...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 13...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 14...ゼミ生の発表を中心に進める。
- 15...ゼミ生の発表を中心に進める。

準備学習(予習)

予め配られた発表者からのレジュメに従って予習をし授業に臨むこと。

教科書

授業の中で指示する

準備学習(復習)

発表者は終了後に、内容を補足してレポートを提出すること。

評価方法

(1)出席状況:33% (2)発表内容:33% (3)研究レポート:34%

専門演習 (歴史・思想)

担当者：清水 正之

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門で日本の思想・歴史を学ぶ学生のために、必須の日本思想のテキストを読みます。
本年度は、内村鑑三の『代表的日本人』を最初のテキストにして、原典を読むことの意味、ノート作成法、参考資料の調べ方等を学びます。その他の基本的文献をゼミ生との相談で選びます。それとあわせて、各自の卒業研究に向けての取り組みの手がかりをえられるようにしたいと思います。

発表形式の授業です。

2.学びの意義と目標

専門の卒業演習への準備的演習です。
歴史・思想文献を自らの読みをふかめ、課題を解く態度をつくることです。

準備学習(予習)

それぞれどのようなことに関心をもち考えているかを話し合い、相応しい文献や史料を共に探す方法や情報を参加者の皆と考えながら進める。
決められた頁数を予習し各回のポイントを纏めておくこと。

準備学習(復習)

その日のテキストを、授業で指示されたポイントに沿って、よみなおし、自らの考えを要領よくまとめておくこと。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.日本の宗教思想 1
- 3.日本の宗教思想 2
- 4.日本の文学と思想 1
- 5.日本の文学と思想 2
- 6.日本の芸術と思想 1
- 7.日本の芸術と思想 2
- 8.民俗と思想 1
- 9.民俗と思想 2
- 10.政治と思想 1
- 11.政治と思想 2
- 12.経済と思想
- 13.自然観と思想
- 14.伝統と近代
- 15.まとめ

教科書

内村鑑三 『代表的日本人』(岩波書店(岩波文庫版))

評価方法

(1)出席:50% (2)発表:30% (3)レポート:20%

専門演習 (歴史・思想)

担当者：柳田 洋夫

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

担当者の主たる研究対象は明治期以降の日本のキリスト教であるが、そもそも日本人の生き方あり方をテキストに即して探求する「日本倫理思想史」の学びを志してきた。よって、<日本人の心の歴史>に関わることならば、時代・ジャンルを問わず、受講者の希望も鑑みて一緒に勉強していきたい。とりあえずは共通のテキストを決めて、それを一緒に読み進めながら、各自が探求すべきテーマを考えていきたい。

2.学びの意義と目標

テキストの読解力を養うとともに、発表や討論を通して日本の思想や精神について、キリスト教というグローバルな視点も援用しつつ、より深く理解することを目指す。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表と討議
3. 発表と討議
4. 発表と討議
5. 発表と討議
6. 発表と討議
7. 発表と討議
8. 発表と討議
9. 発表と討議
10. 発表と討議
11. 発表と討議
12. 発表と討議
13. 発表と討議
14. 発表と討議
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)発表と討議への参加度と内容:40% (3)レポート:20%

専門演習 (歴史・思想)

担当者：村松 晋

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

美術・文学から「宗教」に至るまで、広い意味での 作品 を、時代の中で読み解くことを目指す。「相関文化」「日本思想入門」に共感してくれた人の参加を歓迎する。

2.学びの意義と目標

「歴史・思想」分野における「ものの考え方」調べ方、宗教や民俗へのアプローチの仕方など、研究の初歩を会得してもらいたい。まずは共通のテキストを講読する形式ですすめる予定であるが、参加者の顔ぶれにより、臨機応変に対応したい。

準備学習(予習)

レポーターは発表前に教員の事前指導を受けること。参加者はレジュメに予め眼を通した上でゼミに参加すること。

準備学習(復習)

事後は討論の結果をふまえ期末レポートを提出すること。なお本ゼミでの「発表」は、このレポート提出をもって初めて完結する。

授業計画

- 1.はじめに オリエンテーション
- 2.研究の手立て その1 ゼミとは何か
- 3.研究の手立て その2 テーマはどうやって決めるのか
- 4.研究の手立て その3 何を使って調べるか/図書館の使い方
- 5.研究の手立て その4 レジュメの作り方
- 6.テキスト講読のオリエンテーション その1
- 7.テキスト講読のオリエンテーション その2
- 8.参加者によるレポート
- 9.参加者によるレポート
- 10.参加者によるレポート
- 11.参加者によるレポート
- 12.参加者によるレポート
- 13.参加者によるレポート
- 14.参加者によるレポート
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表内容:50% (2)授業参加:50%
上記を勘案して評価する。「ゼミは決して休まない」気概で参加してほしい。

専門演習 (近現代文化)

担当者：清水 均

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「専門演習」の内容を継続、発展させる。即ち、「専門演習」で見つけた自らの研究テーマを更に深化させることを目指す。ただし、この段階では、必ずしもそのテーマをもって最終テーマとして決定することは求めない。

2.学びの意義と目標

現代の「想像力」を分析することを通じて、私たちがどのような世界に存在しているのかを考える。また、そのことを通じて、世界（社会）に対する批評的な視座を獲得することを目指す。

準備学習(予習)

自らの発表の準備は当然「間に合わせ」では充実した発表に繋がらない。持続的な準備の経過を「研究ノート」に記述することを求める。

準備学習(復習)

各授業時における発表に対して、感想・見解・質問を「発表シート」に記述し、毎授業時に提出する。

授業計画

1. ガイダンス:授業方法の説明、発表スケジュールの決定
2. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
3. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
4. 研究発表に向けてのプレゼンテーション
5. 研究発表(1)
6. 研究発表(1)
7. 研究発表(1)
8. 研究発表(1)
9. 研究発表(1)
10. 研究発表(2)
11. 研究発表(2)
12. 研究発表(2)
13. 研究発表(2)
14. 研究発表(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:50%
- (2)最終レポート:30%
- (3)研究ノート:10%
- (4)発表シート:10%

専門演習 (近現代文化)

担当者：熊谷 芳郎

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

このゼミでは、<子どもの眼から日本の文化を見直す>ことを目指す。まず、共通のテーマを決めて、資料を全員で読み進める。その間、一人ひとりが自分のテーマを見つけていく手助けをする。その活動を通して、資料収集の仕方や資料の読み方、レポートのまとめ方や論文の書き方を学んでいく。そして、各自が自分なりのテーマを見つけ、それぞれが研究を進めていく、その基礎力を身につけることを目指す。その成果は、卒研の最後に、研究発表会での発表の場につながっていくだろう。

2.学びの意義と目標

演習Iで学んできたことを確認した上で、ここでの学びを研究の基礎として、それぞれの研究テーマを見つけていって欲しい。自分の子ども時代を振り返ったときに浮かんでくる素朴な疑問から出発して、教育という文化の背後にあるものに迫ってほしい。

したがって、この演習では、次の点を目標とする。

- 1 さまざまな資料の検討を通して、研究をする上での基礎力を身につける。
- 2 それぞれが自分のテーマを見つけ、課題を設定する。
- 3 それぞれの研究を深めていく。

準備学習(予習)

授業で指定する資料について研究の基礎を実践してもらおう。そのため、発表準備に2～3週間かけるつもりでいてほしい。

準備学習(復習)

発表後に、研究討議を踏まえて再度まとめなおしをしてほしい。そのために1時間程度の学習が必要である。

授業計画

1. 授業に関するガイダンス、および子どもの文化に関する討議。
2. 前回の討議内容の整理確認と、共通課題の決定。
3. <子どもの眼から日本の文化を見直す>ことの意義について講義と、講義を受けての討議。
4. 共通課題についての分担発表と、発表に基づく研究討議 1。
5. 共通課題についての分担発表と、発表に基づく研究討議 2。
6. 共通課題についての分担発表と、発表に基づく研究討議 3。
7. 共通課題についての分担発表と、発表に基づく研究討議 4。
8. 図書館ガイダンス
9. 共通課題についての分担発表と、発表に基づく研究討議 5。
10. 各自の研究課題の発表と、それに関する討議。
11. 各自の研究課題に関する発表と、発表に基づく研究討議 1。
12. 各自の研究課題に関する発表と、発表に基づく研究討議 2。
13. 各自の研究課題に関する発表と、発表に基づく研究討議 3。
14. 授業の総括と、卒研 に向けての留意事項の確認。
15. それぞれの研究課題に関する発表・討議 3

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)課題に関する発表:40%
- (2)研究討議への参加状況:20%
- (3)最終レポート:40%

専門演習 (近現代文学)

担当者：黒木 章

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

・夏目漱石の前期三部作『三四郎』『それから』『門』を読む。
作品を精読しながら主題や登場人物が抱える問題を周辺の状況(作家自身・社会問題・文学批評一般)を考えながら、近代文学研究の具体的な訓練をする。

2.学びの意義と目標

・「演習I」では、研究のための資料探しなど初歩的な取り組みをしたが、ここでは一步踏み込む研究の方法を習得する。
・この段階で自分の研究法を着実に習得し、次に配置される「卒業研究」に向けて各参加者が目差す研究方法によって卒業論文作成ができるようにする。
・参加者をグループに分けて、それぞれの作品について次の3つの角度から報告・討議する。(1)作品論 同時代評・先行文献の把握と批評。(2)作家論 作品と漱石の周辺事情の連関確認。(3)我々の鑑賞というような角度から作品を把握しながら我々の読みを提示する。
・夏目漱石が提示した問題は現代の我々が取り組むべき問題でもある。日本文学部の学生が漱石文学に触れることは必須の学びであり、大学院に進むとか中高の国語科教員、日本語教員を目差す人には特にそうである。

準備学習(予習)

・積極的な対話・討議によって楽しいゼミにしたいので、毎回十分準備して参加することが必須。
・レジュメを作成する際には事前に担当教員の指導・助言をうけること。

準備学習(復習)

・自分のレポートに対するメンバーの意見や先行文献を再度検討し一歩深めたレポートを重ね、それがまた次の討議の材料になる。

授業計画

- 1.導入と演習方法の確認
- 2.『三四郎』
- 3.同 上
- 4.同 上
- 5.同 上
- 6.『それから』
- 7.同 上
- 8.同 上
- 9.同 上
- 10.『門』
- 11.同 上
- 12.同 上
- 13.同 上
- 14.同 上
- 15.まとめ

教科書

夏目漱石 『三四郎』(新潮文庫)
夏目漱石 『それから』(新潮文庫)
夏目漱石 『門』(新潮文庫)

評価方法

- (1)授業参加態度:40%:レポートと討議、説得力
- (2)小レポート:30%:討議結果の生かし方
- (3)学期末レポート:30%:定期試験に替えるもの

専門演習 (言語)

担当者：川口 さち子

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代語の問題点を扱う。

- ・インターネットを使ったり、参考文献に当たったりして、資料探索の方法を学ぶ
- ・受講生の関心あるテーマを取り上げて、参考文献を読み、ディスカッションを行う。
- ・実際に身の回りの言語事象を取り上げ、用例などを集め分析を行う。

2.学びの意義と目標

専門演習Iでは、共通課題を扱い、資料探索の基礎的なところを扱った。専門演習IIでは、実例を集め、分析できる力を養う。

目標 自分の身の回りの事象から用例を集め分析できる力をつけること、自分のテーマをみつけて、研究していくという姿勢を身につけることが目標である。

授業計画

1. 導入ーことばに関するエピソード、研究という視点
2. 資料の検索方法、資料の扱い方を学ぶ
3. 各自研究テーマを決め発表する
4. 参考文献購読
5. 参考文献購読
6. 採取データ中間発表 1
7. 採取データ中間発表 2
8. 参考文献購読
9. 参考文献購読
10. 採取データ分析と発表 1
11. 採取データ分析と発表 2
12. 参考文献購読
13. 最終発表 1
14. 最終発表 2
15. 最終発表 3 ・最終レポート提出

準備学習(予習)

発表があたっているものは、レジュメを準備する。無断欠席をしないこと。文献にあたり、十分準備すること。

教科書

プリントを配布する

準備学習(復習)

ほかの発表者の発表を見て学び、自分の研究方法にも取り入れること。

評価方法

- (1)調査・発表レポートの内容:60%
- (2)討論への参加度:20%
- (3)出席状況:20%

専門演習 (言語)

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代日本語のあり方や多文化共生社会で求められる「ことば」のあり方への関心を高め、自らの疑問点を明確にし、調査計画を立て、調査を実施し、その結果から根拠を求める練習をする。さらに、調査結果や独自の考察を発表し、演習参加者からの質疑に答えることで、口頭能力の伸長を目指す。ディスカッション形式となるため、互いに学び合う意識を常に忘れず、積極的に参加してもらいたい。

2.学びの意義と目標

何に興味があるのかを見つめ、どのような資料を収集し、データを得ることで、結論を導学ぶ。

準備学習(予習)

発表前には十分な準備を行うこと。

準備学習(復習)

発表後には、振り返りシートを提出すること。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 参考文献の発表
3. 参考文献の発表
4. 参考文献の発表
5. 支援センターへの訪問
6. 計画発表
7. 計画発表
8. 計画発表
9. 計画発表
10. 発表(1)
11. 発表(2)
12. 発表(3)
13. 発表(4)
14. 発表(5)
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:20% (2)発表:20% (3)提出資料:20% (4)最終レポート:30% (5)参加態度:10%

専門演習 (思想)

担当者：清水 正之

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業演習にすすむ最後のしあげの演習です。各自の問題意識にそった発表形式ですすめます。日本の思想に関わることがテーマですが、生命倫理や、環境倫理を、思想からといていくこともこのゼミの内容に合致します。

2.学びの意義と目標

専門的に思想を学び卒業論文・卒業レポートを完成させるための準備をととのえます。思想をまなぶ方法と態度をしっかりしたものとすることを目標としています。

準備学習(予習)

発表形式のゼミですので、意欲的な参加を希望します。自分の発表についてレジメを作成し、発表前に参加者に配布する。参加者は前もってレジメを読んでおく。

準備学習(復習)

毎回の発表についての意見を次回までに800字ほどにまとめる。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.日本思想の諸問題 1
- 3.日本思想の諸問題 2
- 4.日本思想の諸問題 3
- 5.日本思想の諸問題 4
- 6.主題から見た日本の思想 1
- 7.主題から見た日本の思想 2
- 8.主題から見た日本の思想 3
- 9.主題から見た日本の思想 4
- 10.日本思想の問題の歴史的位置づけ 1
- 11.日本思想の問題と歴史的位置づけ 2
- 12.日本思想の問題と歴史的位置づけ 3
- 13.日本思想の問題と歴史的位置づけ 4
- 14.日本思想の研究法
- 15.まとめと反省

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:30% (2)発表:50% (3)期末レポート:20%

専門演習 (思想)

担当者：村松 晋

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「歴史・思想(宗教を含む)」の分野から関心のあるテーマを自由に選び(要相談)、広い意味での 作品 の読み方・読み抜き方を学ぶ。特定の思想家・宗教家あるいは作家における狭義の 作品 を「歴史・思想」の視点から立体的に読み直したいという学生も、もちろん支援する。

2.学びの意義と目標

「専門演習I」での学びをふまえ、テーマ設定の仕方、文献の探し方、さらにその 読み解き方 を身につけていくことを目標にする。

準備学習(予習)

発表者はテーマ設定と参考文献について教員の事前指導を受けること。
参加者はレジュメに予め眼を通した上でゼミに参加すること

準備学習(復習)

事後は討論の結果をふまえ期末レポートを提出すること。なお本ゼミでの「発表」は、このレポート提出をもって初めて完結する。

授業計画

- 1.はじめに オリエンテーション
- 2.研究の手立て その1 いかにテーマを絞るか
- 3.研究の手立て その2 何を読んで深めるか
- 4.研究の手立て その3 どうやって伝えるか
- 5.研究発表
- 6.研究発表
- 7.研究発表
- 8.研究発表
- 9.研究発表
- 10.研究発表
- 11.研究発表
- 12.研究発表
- 13.研究発表
- 14.研究発表
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)発表内容:50% (2)授業参加:50%
上記3つを助案して評価する。なお全授業回数の三分の一以上を欠席した者は授業参加を放棄したと見なす。

専門演習 (思想)

担当者：柳田 洋夫

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

担当者の主たる研究対象は明治期以降の日本のキリスト教であるが、そもそもは日本人の生き方あり方をテキストに即して探求する「日本倫理思想史」の学びを志してきた。よって、<日本人の心の歴史>に関わることならば、時代・ジャンルを問わず、受講者の希望も鑑みて一緒に勉強していきたい。専門演習の学びをふまえつつ、共通のテキストと一緒に読み進めながら、各自が探求すべきテーマを考えていきたい。

2.学びの意義と目標

専門演習の学びをふまえつつ、さらなるテキストの読解力また考察力を養うとともに、発表や討論を通して日本の思想や精神について、キリスト教というグローバルな視点も援用しつつ、より深く理解することを目指す。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表と討議
3. 発表と討議
4. 発表と討議
5. 発表と討議
6. 発表と討議
7. 発表と討議
8. 発表と討議
9. 発表と討議
10. 発表と討議
11. 発表と討議
12. 発表と討議
13. 発表と討議
14. 発表と討議
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)発表と討議への参加度と内容:40% (3)レポート:20%

専門演習 (比較文化アジア)

担当者：濱田 寛

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

古典学の基本をテキストの「輪読」形式の演習を通して学ぶ。対象とするテキストは和文・漢文に対する受講生の理解度を踏まえて選定する。

2.学びの意義と目標

比較文化の研究を目標とする本ゼミにおける、基礎的・技術的な事項を学ぶ。本演習で修得する知識・技術は卒業研究での自律的な研究のための基礎力に相当する。

準備学習(予習)

演習発表の準備に相当の時間を要する

準備学習(復習)

演習発表において指摘を受けた箇所についての追加調査を「事後報告」として提出する

授業計画

1. ガイダンス
2. 演習発表概説
3. 模擬演習発表(1)/担当教員による模擬発表
4. 模擬演習発表(2)/担当教員による模擬発表
5. 演習発表(1)
6. 演習発表(2)
7. 演習発表(3)
8. 演習発表(4)
9. 演習発表(5)
10. 演習発表(6)
11. 演習発表(7)
12. 演習発表(8)
13. 演習発表(9)
14. 演習発表(10)
15. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習発表:80% (2)積極性:20%
積極性とは演習における傾聴・発言に対する評価をいう。演習形式の授業では、演習に「参加」する姿勢が問われる。出席をもって単位が保証される訳では無い。

専門演習 (比較文化 欧米)

担当者：菊池 有希

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

幻想文学 (fantastique) は、E.T.A.ホフマンやフランス・ロマン派、あるいはE.A.ポーら西洋の作家によって開拓された文芸ジャンルであるが、日本においても、泉鏡花や谷崎潤一郎、佐藤春夫や江戸川乱歩など、幻想文学作家は数多く存在する。本ゼミにおいては、それらの作品を、T.トドロフの幻想文学論なども参照しながら、丁寧に読み解き、彼らの幻想の《方法》について考察する。その際、可能ならば、比較文化のゼミらしく、欧米の幻想文学作品との対比も試みることもしてみたい。担当者による発表とゼミ生全員での討議、というかたちで進めていきたい。詳細については初回に指示する。(*基本的に2年生と3年生で同内容を扱うが、ゼミの進め方において少々違いがあることを註記しておく)

2.学びの意義と目標

本演習では、テキストを味読・精読することに加え、それを分析・解釈するとはどういうことを学んでもらう。人文学の基礎である テキストを読み解く作法 を習得することが、専門演習 の学びの意義であり目標である。

準備学習(予習)

ゼミ発表においては、周至な準備が要求される。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 幻想文学 (fantastique) とは何か (1)
3. 幻想文学 (fantastique) とは何か (2)
4. 発表及び討議
5. 発表及び討議
6. 発表及び討議
7. 発表及び討議
8. 発表及び討議
9. 発表及び討議
10. 発表及び討議
11. 発表及び討議
12. 発表及び討議
13. 発表及び討議
14. 発表及び討議
15. 全体討議

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末レポート:30% (2)発表:35% (3)授業参加度:35%

専門演習 (歴史)

担当者：東島 誠

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

古文書・古記録などの「史料」には、いまだ誰も論じていない未発見・未解明の事実が、それこそ無数に埋蔵されている。歴史上の事実を構成していくには、根拠、すなわち「史料」が必要であり、そこから説得力ある議論を導き出すにはどのような手続きが必要なのか、それを実践的に学ぶゼミである。

2.学びの意義と目標

専門演習では、「史料」をもとに自分で歴史像を描き出す、初めての体験をしてみよう。そのために必要な指導を、初めの第一歩から行なっていきたい。

先輩たちが証明してきたように、ゼミとは本来、日々新しい学説が生産される現場である。まずは『緑聖文化』第5・6・7号に公表されている、当ゼミの先輩たちの卒論を読んでみよう。そして、ぜひそれに続いてほしい。

準備学習(予習)

発表の前の週に、発表に使用する基本研究文献をメンバーに配布する。これは、参加者が事前に文献に目を通した上で発表を聞くことで、理解を深め、討論に参加しやすくするためである。

準備学習(復習)

当ゼミでは、毎回の発表者が作成した配布資料を半年間蓄積すると、極めて分厚いファイルになる。常にファイルを見かえしながら、蓄積型の学びを進めて行ってほしい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 図書館オリエンテーション
3. レジューメ作成法～先輩のレジューメに学ぶ
4. 学生による発表
5. 学生による発表
6. 学生による発表
7. 学生による発表
8. 学生による発表
9. 学生による発表
10. 学生による発表
11. 学生による発表
12. 学生による発表
13. 学生による発表
14. 学生による発表
15. 学生による発表

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席、発表、議論への参加:50% (2)学期末レポート:50%
(春学期開講 = 111J生の履修条件)

ゼミわけ時に説明があったように、春学期に当ゼミを履修する3年生以上の学生は、必ず同時開講の「日本史特殊講義」を並行して履修すること。履修しない場合は専門演習の単位を取得できない。

専門演習 (歴史)

担当者：川崎 司

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容

「専門演習I」の成果を発展させつつ、から、この世に流れる普遍的な法則をつかみとり、視野の広いしなやかな歴史観を織り込み、新たなを着実に刻んでいくことを願っている。範囲は原則として「日本近現代史」とするが、という大きなフィールドの中からテーマを選び、伸び伸びとを楽しんでもらいたい。

2.学びの意義と目標

密度の濃やかな「発表」「討論」を通し、自らの研究テーマを確定していく。

準備学習(予習)

予め配られた発表者からのレジユメに従って予習をし授業に臨むこと。

準備学習(復習)

発表者は終了後に、内容を補足してレポートを提出すること。

授業計画

- 1....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 2....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 3....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 4....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 5....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 6....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 7....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 8....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 9....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 10....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 11....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 12....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 13....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 14....ゼミ生の発表を中心に進める。
- 15....ゼミ生の発表を中心に進める。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席状況:33% (2)発表内容:33% (3)研究レポート:34%

相関文化

担当者：村松 晋

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「日本文化」とは何だろうか。「“日本”にしかない文化」というものは存在するのだろうか。否、そもそも「『日本文化』とは何か」を問い、それを探り当てようとする試みに、積極的な意義はあるのだろうか。本講義では、私たちの身の回りに息づく諸文化を、世界史的な文脈をも考慮しつつ、多角的かつ重層的な観点から問い質すことにより、上記の問いかけに対する一つの場を提示することを目的としている。

2.学びの意義と目標

「日本」「日本文化」「日本人」等々を問い質すための、具体的な場を獲得すること。「小さきもの」「名も無きもの」が奏でる文化に眼を向け、「ヒーロー」でなく「敗者」の哀歎にこそ耳を傾けられるようになってほしい。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、「ライフデザイン」における私の推薦図書に眼を通しておくこと。

準備学習(復習)

講義後はその日のうちにレジュメを読み直し理解を深め、次回までに前講義の最後で投げかけられた問いを考えてくること

授業計画

- 1.何を学ぶか オリエンテーション
- 2.「日本」を問い直す 「日本史」をめぐる様々なイメージ
- 3.アジアのなかの日本その1 竹をめぐる諸文化
- 4.アジアのなかの日本その2 『竹取物語』をめぐる文化誌
- 5.アジアのなかの日本その3 「竹取の翁」とはどういう人か
- 6.「日本文化史」の陰に その1 差別問題を考える
- 7.「日本文化史」の陰に その2 芸能と差別
- 8.「日本文化」を問う その1 「江戸の歌舞伎」と「明治の歌舞伎
- 9.「日本文化」を問う その2 創り出された「日本文化」
- 10.「日本文化」を問う その3 「日本語」と軍隊
- 11.文化とは何か その1 生活者の目線から
- 12.文化とは何か その2 欧米人の日本滞在記が問いかける世界
- 13.文化とは何か その3 明日を問うための資料論
- 14.残された課題「文化的多元主義」について
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:100%
期末試験によって評価する。全授業回数の三分の一以上欠席した者には期末試験の受験資格を与えない。遅刻等の扱いは初回の授業で説明する。

卒業研究(近現代文化)

担当者：清水 均

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「物語」分析を中心にゼミでの研究を進める。ただし、「物語」とは「想像力（欲望）」を基底として発生するものであり、それゆえ研究対象は小説、童話、昔話、映画、ドラマ、マンガ、アニメ、ゲームといったジャンルに留まらず、メディア、風俗、流行、スポーツ、お笑い、音楽、ファッション等々、広い範囲に及ぶ。

2.学びの意義と目標

「文化を考えると世界における自分自身の位置を見定めることである」と論じた批評家がいるが、文化を研究することは、何らかの意味で「自分自身への問いかけ」をすることでもある。そして、自分自身が常に変化し更新し続けるものであるとすれば、文化もまた我々の新たな体験として捉え直され続けることとなる。その意味で、研究を通じて、学生個々の発想と感性が試されると同時にそれが生かされることになり、ひいてはそれが大学卒業後の、人生の大いなる糧となるはずである。

準備学習(予習)

自らの発表の準備は当然「間に合わせ」では充実した発表には繋がらない。持続的な準備の経過を「研究ノート」に記述することを求める。

準備学習(復習)

各授業時における発表に対して、感想・見解・質問を「発表シート」に記述し、毎授業時に提出する。

授業計画

1. ガイダンス
2. プレゼンテーション:各自の研究段階を確認する
3. プレゼンテーション:各自の研究段階を確認する
4. プレゼンテーション:各自の研究段階を確認する
5. 研究発表
6. 研究発表
7. 研究発表
8. 研究発表
9. 研究発表
10. 研究発表
11. 研究発表
12. 研究発表
13. 研究発表
14. 研究発表
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:50% (2)最終レポート:30% (3)研究ノート:10% (4)発表シート:10%

卒業研究(近現代文化)

担当者：清水 均

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「卒業研究」の継続、発展を図る。大学での専門的な研究の総仕上げとしてレポート30枚(原稿用紙換算)以上を執筆することを課す。卒業論文を執筆する者はそのペースを作り上げることになり、それ以外の者にとっては研究の「証」を得ることになる。

2.学びの意義と目標

このゼミで「卒業研究」を履修し終えるということは、卒業後の人生において、時代や社会を眼差す力を獲得することになるはずである。

準備学習(予習)

基本的に卒業論文の執筆を目標に、持続的な研究を進めてもらう。その証として「研究ノート」を作成してもらうことになる。

準備学習(復習)

各授業時における発表に対して、感想・見解・質問を「発表シート」に記述し、毎授業時に提出する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 研究発表 1
3. 研究発表 1
4. 研究発表 1
5. 研究発表 1
6. 研究発表 1
7. 研究発表 1
8. 研究発表 2
9. 研究発表 2
10. 研究発表 2
11. 研究発表 2
12. 研究発表 2
13. 研究発表 2
14. まとめ 1
15. まとめ 2

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:40% (2)最終レポート:40% (3)研究ノート:10%
(4)発表シート:10%

卒業研究(近現代文化)

担当者：熊谷 芳郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自が関心のあるテーマの先行研究論文を実際に読み解き、その内容を参加者に紹介するとともに、自分なりの解釈と見解を述べることによって、参加者全体でディスカッションを行う。中には、まだ自分の問題が明確になっていない場合もあるであろうが、ともに実践記録や論文を読み進めることによって、自分の取り組むべき課題を発見していくことを目指す。

2.学びの意義と目標

目の前の出来事の背後にどのような思想が横たわっているのか、それを見抜く目を養ってほしい。そのような体験を通じて、文化研究の基本的な研究姿勢を学び取ることにつながるであろう。

準備学習(予習)

自分の選んだテーマについてほぼ1ヶ月に1回程度の資料報告をしてほしい。そのため、発表に合わせたペースで論文を読み解いてもらう。

準備学習(復習)

研究討議を踏まえて、次の発表までに発表内容を整理しなおす。

授業計画

- 1.文化を研究することの意味について講義と、討議。
- 2.各自の研究テーマに関する発表・討議 1。
- 3.各自の研究テーマに関する発表・討議 2。
- 4.各自の研究テーマに関する発表・討議 3。
- 5.各自の研究テーマに関する発表・討議 4。
- 6.各自の研究テーマに関する発表・討議 5。
- 7.各自の研究テーマに関する発表・討議 6。
- 8.国立国会図書館見学研修(学外授業)
- 9.各自の研究テーマに関する発表・討議 7。
- 10.各自の研究テーマに関する発表・討議 8。
- 11.各自の研究テーマに関する発表・討議 9。
- 12.各自の研究テーマに関する発表・討議 10。
- 13.各自の研究テーマに関する発表・討議 11。
- 14.各自の研究テーマに関する発表・討議 12。
- 15.各自の研究テーマに関する発表・討議 13。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)課題に関する発表:50%
- (2)研究討議への参加状況:30%
- (3)最終レポート:20%

卒業研究(近現代文化)

担当者：熊谷 芳郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自が関心のあるテーマの先行研究論文を実際に読み解き、その内容を参加者に紹介するとともに、自分なりの解釈と見解を述べることによって、参加者全体でディスカッションを行う。中には、まだ自分の問題が明確になっていない場合もあるであろうが、ともに実践記録や論文を読み進めることによって、自分の取り組むべき課題を発見していくことを目指す。最終的に学びの総括として研究発表会での発表、および最終レポートの完成につなげる。

2.学びの意義と目標

目の前の出来事の背後にどのような思想が横たわっているのか、それを見抜く目を養ってほしい。そのような体験を通じて、文化研究の基本的な研究姿勢を学び取ることにつながるであろう。

準備学習(予習)

1ヶ月に1回のペースで研究発表を行えるよう、自分の課題に関する先行研究論文を読んでいく。

準備学習(復習)

研究討議の内容を踏まえてまとめなおすとともに、これまでの発表内容と結合させていく。

授業計画

1. 研究を体系化することについて講義
2. 各自の研究テーマに関する発表・討議
3. 各自の研究テーマに関する発表・討議
4. 各自の研究テーマに関する発表・討議
5. 各自の研究テーマに関する発表・討議
6. 各自の研究テーマに関する発表・討議
7. 各自の研究テーマに関する発表・討議
8. 各自の研究テーマに関する発表・討議
9. 各自の研究テーマに関する発表・討議
10. 各自の研究テーマに関する発表・討議
11. 各自の研究テーマに関する発表・討議
12. 各自の研究テーマに関する発表・討議
13. 各自の研究テーマに関する発表・討議
14. 研究発表会での研究発表
15. 「学び」の総括、および卒業論文に向けての留意事項の確認。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)授業での発表:30% (2)研究討議への参加状況:20%
(3)研究発表会での発表:20% (4)最終レポート:30%

卒業研究(近現代文学)

担当者：黒木 章

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

鴎外文学を中心に1910(明治43)年問題を考える。
専門演習に続き本格的な文学研究に取り組むために配置される科目である。
1910年は大逆事件・日韓併合など日本近代史の上でも重要な出来事があり、近代文学史の上でも自然主義に抗して耽美派(谷崎や荷風)や白樺派(武者小路や志賀)が登場するなど重要な展開がみられる。ここでは鴎外の幾つかの小説を読むことを中心に、この年に発表された重要な文学評論を重ねて文学と社会の問題を考える。

2.学びの意義と目標

2010年は大逆事件や日韓併合100年の年として記憶されなければならない。日韓両国でもさまざまな記念行事がありその後も領土問題や戦時中の慰安婦問題が強く提起されて片づく兆しもみえない。大逆事件と日韓併合のことに深く関わった森鴎外のようなすを細かく検証することによって日本近代とは何だったのか、文学者(知識人)の責任とは何なのか、時代状況を確認しながら考えてみる。

準備学習(予習)

・演習は配布プリントで展開するので、歴史と文学・社会と文学という基本的な問題に研ぎ澄まされたセンスと主体的で意識的な取り組みが必要である。

準備学習(復習)

・各回とも相互討議が柱になる。自分の発言と参加者の発言とのを踏まえて、次の発言に生かさなければならない。

授業計画

1. 導入。問題の提起「1910年問題とは何か」。
2. 日韓両国の取組み
3. 1910年の日本の文学と社会について
4. 同 上
5. 同 上
6. 鴎外と二つの出来事
7. 同 上
8. 同 上
9. 鴎外の作品『あそび』『沈黙の塔』その他の読解
10. 同 上
11. 同 上
12. 谷崎・荷風・武者小路・志賀・啄木登場の意味
13. 同 上
14. 同 上
15. 同 上

教科書

プリントを配布する
参考文献等は適宜授業の中で紹介する。

評価方法

(1)授業参加態度:30% (2)小レポート:30%:2回 (3)学期末レポート:40%

卒業研究(近現代文学)

担当者：黒木 章

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

担当者が始めの3回程度を使って森鷗外研究の例を示す。その後参加者が各自の取り組みを報告し、それをめぐって討議することを繰り返す。参加者は学期中に何度か発表・報告をする。

2.学びの意義と目標

参加者が任意に取り組む作品や作家の問題をそれぞれに提示し、それをもとに相互討議を行うことで問題や考察の深化を目差す。これによって参加者が研究方法を身につけて卒業論文が作成できるようにする。

準備学習(予習)

・報告・発表ではレジユメ等の印刷物を作り事前に参加者全員に配布しなければならない。もちろん、レジユメ等を作成する際には内容や問題点について担当者の指導を受けなければならない。

準備学習(復習)

・自分の報告・発表と参加者の意見をもとに討議されたことをうけて、さらに整理・深化させた報告・発表を繰り返すので、復習は必須である。

授業計画

- 1.担当者による森鷗外研究の例示
- 2.同 上
- 3.同 上
- 4.参加者の発表と討議
- 5.同 上
- 6.同 上
- 7.同 上
- 8.同 上
- 9.同 上
- 10.同 上
- 11.同 上
- 12.同 上
- 13.同 上
- 14.同 上
- 15.講評とまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)授業参加態度:30%:発表と討議 (2)小レポート:30%:点検・整理
(3)学期末レポート:40%

卒業研究(言語)

担当者：川口 さち子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

敬語・文法・語彙・アクセントなどを含む現代語のゆれ、日本語と外国語との比較対照などを扱う。テーマを各自決めて、実例を採取・分析し、発表・質疑応答を行う。分析する資料は、テレビ番組、雑誌、新聞、小説、アンケート調査、インタビューなど自由に選ぶこととする。

2.学びの意義と目標

・卒業研究IIに結びつくように自分のテーマを見つけ、更に深めていくこと。
・課題を与えられてレポートを書くという形式ではなく、自分のテーマをみつけて、地道に研究していくという姿勢を身につけること。

準備学習(予習)

休まないこと。発表の際は、文献に十分あたり、レジユメを準備する。課題の提出物は必ず出す。発表があたっているものは、無断欠席をしない。止むを得ず、欠席するときは、前もって連絡すること。

準備学習(復習)

ほかの発表者の発表を見て学び、自分の研究にも取り入れること。

授業計画

1. 研究テーマ・論文の取り組み方について
2. 文献購読
3. 各自のテーマ発表(1)
4. 各自のテーマ発表(2)
5. 文献購読
6. 文献購読
7. 中間発表(1)
8. 中間発表(2)
9. 中間発表(3)
10. 文献購読
11. 文献購読
12. 文献購読
13. 最終発表1
14. 最終発表2
15. 最終発表3・最終レポート提出

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)調査・発表レポートの内容:60%
- (2)討論への参加度:20%
- (3)出席状況:20%

卒業研究(言語)

担当者：川口 さち子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「卒業研究I」に引き続き、敬語・文法・語彙・アクセントなどを含む現代語のゆれ、日本語と外国語との比較対照などを扱う。テーマを各自決めて、事例を採取・分析し、発表・質疑応答を行う。分析する資料は、テレビ番組、雑誌、新聞、小説、アンケート調査、インタビューなど自由に選ぶこととする。

2.学びの意義と目標

「卒業研究I」で扱ったテーマを各自深め、ある程度まとまった論文を書き、卒業論文へのステップとなるようにしたい。

目標

ゼミとしては、最後の課程となるので、各自まとまった論文と言えるレベルのものを書くこと。

準備学習(予習)

休まないこと。発表の際は、文献に十分あたり、レジユメを準備する。課題の提出物は必ず出す。発表があたっているものは、無断欠席をしない。止むを得ず、欠席するときは、前もって連絡すること。講読している文献は前もって目を通しておく。特に留学生の場合は、読み方を調べておくこと。

準備学習(復習)

ほかの発表者の発表から学び、自分の研究・分析に反映させる。

授業計画

1. 前学期の各自のレポート内容紹介
2. 今学期の各自の研究計画発表1
3. 今学期の各自の研究計画発表2
4. 今学期の各自の研究計画発表3
5. 文献購読
6. 文献購読
7. 文献購読
8. 中間発表1
9. 中間発表2
10. 中間発表3
11. 文献購読
12. 文献購読
13. 最終発表1
14. 最終発表2
15. 最終発表3・最終レポート提出

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)調査発表・最終レポートの内容:60%
- (2)討論への参加度:20%
- (3)出席状況:20%

卒業研究(言語)

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

自らの疑問点を明確にし、調査計画を立て、調査を実施し、その結果から根拠を求める練習をする。

2.学びの意義と目標

卒業研究IIに結びつくテーマを見つけること、更に、どのような資料で根拠を求めるかを各自で考えていく。

準備学習(予習)

発表前には十分な準備をすること。

準備学習(復習)

発表後に、振り返り小レポートを提出すること。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.先輩からのアドバイスを聴く
- 3.参考文献の発表
- 4.参考文献の発表
- 5.参考文献の発表
- 6.テーマ発表(1)
- 7.テーマ発表(2)
- 8.テーマ発表(3)
- 9.発表(1)
- 10.発表(2)
- 11.発表(3)
- 12.発表(4)
- 13.発表(5)
- 14.発表(6)
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席:25% (2)発表:25% (3)小レポート:10% (4)最終レポート:30%
(5)参加態度:10%

卒業研究(言語)

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業論文を執筆することを目標に、自らの興味を明確にし、研究の目的、資料、データ、論拠の求め方を学ぶ。

2.学びの意義と目標

論拠とオリジナリティという二つを満たす研究を行うことを目標とする。

準備学習(予習)

発表の為に、十分な準備をしてくること。

準備学習(復習)

発表後は、振り返り小レポートを提出すること。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.発表(1)(2)
- 3.発表(3)(4)
- 4.発表(5)(6)
- 5.論文の書き方
- 6.論文の書き方
- 7.発表(1)(2)
- 8.発表(3)(4)
- 9.発表(5)(6)
- 10.発表まとめ(1)
- 11.発表まとめ(2)
- 12.発表まとめ(3)
- 13.発表まとめ(4)
- 14.発表まとめ(5)
- 15.発表まとめ(6)

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:20% (2)発表:30% (3)小レポート:10% (4)最終レポート:30%
(5)参加態度:10%

卒業研究(古典文学)

担当者：渡辺 正人

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習は基本的には古典文学を扱うが、その周辺の文化的歴史的事項にも気をくばりつつ、テキストを多角的に読んでゆくこととしたい。春学期は、これまでの各自のテーマに基づき、読みを深めてゆく。できれば卒業論文へと、自分の研究のまとめにまでつなげてゆきたい。

2.学びの意義と目標

- (1)文学・文化への深い理解をすすめる。
- (2)論文を批判的に読み込む力をつける。
- (3)方法論にそって、自分の考えを深め、まとめる。

の3項目は研究する態度である。

卒業研究も最後となる。他人の意見を批判的に読み、自分の考えを構築してゆくことが目標で、それは研究のみならず社会人としても重要なスキルである。

準備学習(予習)

予習は、各自の準備を怠らぬこと。それは自分の担当のことだけでなく、ほかの人の分野にも関心を持つこと。

準備学習(復習)

復習は、発表時に指摘された事項、質問には必ずこたえる準備をすること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表
3. 発表
4. 発表
5. 発表
6. 発表
7. 発表
8. 発表
9. 発表
10. 発表
11. 発表
12. 発表
13. 発表
14. 発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表:70% (2)資料:10% (3)レポート:20%

卒業研究(思想)

担当者：清水 正之

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自が、卒業研究にむけて、日本の思想になかから、テーマを設定できるよう、発表と討論を中心にすすめます。
またテーマに沿った参考資料の探し方、その扱い方を、学んでいきます。

2.学びの意義と目標

卒業論文、卒業レポートの完成をめざして、各自の調べ考察する対象の理解と、研究法を学び身につける。

準備学習(予習)

意欲的に参加・出席し、発表の技法や態度を学んでください。各回の発表者の予告につき前もって考え、各回とも次回までに800字ほどの意見、感想をまとめておく。

準備学習(復習)

発表者は、討論を経て修正したレジメを再提出する。参加者は、発表についての見解を800字程度にまとめて翌週提出すること。

授業計画

- 1.はじめに
2. 卒業研究の課題のたてかた 1
3. 卒業研究の課題のたてかた 2
4. 思想関係資料の調べ方 1
5. 思想関係資料の調べ方 2
6. 思想関係資料の調べ方 3
7. 課題発表の実際 1
8. 課題発表の実際 2
9. 課題発表の実際 3
10. 課題発表の実際 4
11. 課題の発展 1
12. 課題の発展 2
13. 課題の発展 3
14. 課題の発展 4
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:30% (2)発表:40% (3)期末レポート:30%

卒業研究(思想)

担当者：清水 正之

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

思想をテーマに卒業研究をまとめる学生のための演習形式の授業です。各自の問題関心に沿った発表と討論を中心にすすめます。

2.学びの意義と目標

卒業研究を仕上げるための準備的な位置づけの授業です。卒業研究を仕上げ、自己表現を完全にちかづけるための目標設定、方法、態度、論理構成などを学びます。

準備学習(予習)

卒業研究は文章と思考による自己表現の一つです。積極的に授業参加して下さい。ほぼ毎回各自の発表レジメ(A4 1枚)を作成しておく。

準備学習(復習)

発表者は、討論を経て修正した発表のレジメを次回までに守成して再提出。参加者は800字ほどの発表への意見を纏めたものを提出する。

授業計画

- 1.はじめに ー卒業研究の意義
- 2.問題の設定 1
- 3.問題の設定 2
- 4.問題の設定 3
- 5.問題の設定の再考と補完史料の充実
- 6.問題の展開 1
- 7.問題の展開 2
- 8.問題の展開 3
- 9.問題展開と論理構成
- 10.論理構成の検討 1
- 11.論理構成の検討 2
- 12.論理構成の検討 3
- 13.資料の再検討 1
- 14.資料の再検討 2
- 15.まとめ ー卒業研究の完成をめざして

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:30% (2)発表:40% (3)レポート:30%

卒業研究(思想)

担当者：村松 晋

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

参加者各自が、専門演習II(思想(2))で取り組んだテーマを発展させることを目的とする。対象領域も専門演習IIのそれに準ずる。

2.学びの意義と目標

卒業研究、さらには卒業論文につなげ得る成果を手にすること。

準備学習(予習)

発表者はテーマ設定と参考文献について教員の事前指導を受けること。参加者はレジュメに予め眼を通した上でゼミに参加すること。

準備学習(復習)

事後は討論の結果をふまえ期末レポートを提出すること。なお本ゼミでの「発表」は、このレポート提出をもって初めて完結する。

授業計画

- 1.はじめに オリエンテーション
- 2.研究の手立て その1 専門演習から卒業研究へ
- 3.研究の手立て その2 自分を見つめるということ
- 4.研究の手立て その3 真の自分のテーマを発見する
- 5.研究発表
- 6.研究発表
- 7.研究発表
- 8.研究発表
- 9.研究発表
- 10.研究発表
- 11.研究発表
- 12.研究発表
- 13.研究発表
- 14.研究発表
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表内容:50% (2)授業参加:50%
上記を勘案して評価する。なお全授業回数の三分の一以上を欠席した者は、授業参加を放棄したと見なす。

卒業研究(思想)

担当者：村松 晋

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

最終学年の最後のゼミとして、名実ともに大学生活を総括する学びの場である。一人でも多くの人に、卒業論文を書いてほしいと希っている。

2.学びの意義と目標

上記に尽きている。本学で学んでよかったと思えるような学びの集大成を、ゼミ生どうしで共有したい。

準備学習(予習)

発表者はテーマ設定と参考文献について教員の事前指導を受けること。参加者はレジュメに予め眼を通した上でゼミに参加すること。

準備学習(復習)

事後は討論の結果をふまえ期末レポートを提出すること。

授業計画

- 1.はじめに 大学生活を総括するために
- 2.卒業論文とは何か その1
- 3.卒業論文とは何か その2
- 4.研究発表
- 5.研究発表
- 6.研究発表
- 7.研究発表
- 8.研究発表
- 9.研究発表
- 10.研究発表
- 11.研究発表
- 12.研究発表
- 13.研究発表
- 14.研究発表
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表内容:50% (2)授業参加:50%
上記を勘案して評価する。全授業数の三分の一以上を欠席した者は、授業参加を放棄したとみなす。

卒業研究(思想)

担当者：柳田 洋夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

担当者の主たる研究対象は明治期以降の日本のキリスト教であるが、そもそも日本人の生き方あり方をテキストに即して探求する「日本倫理思想史」の学びを志してきた。よって、＜日本人の心の歴史＞に関わることならば、時代・ジャンルを問わず、一緒に勉強していきたい。

2.学びの意義と目標

専門演習での学びをふまえつつ、それぞれのテーマのまとめに取りかかるための準備をする。テキストの読解力を養うとともに、発表や討論を通して日本の思想や精神をより深く理解する。さらに、これまで学んだこと、考えたことをしっかりとしたかたちにまとめることができるようになることを目指す。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表と討議
3. 発表と討議
4. 発表と討議
5. 発表と討議
6. 発表と討議
7. 発表と討議
8. 発表と討議
9. 発表と討議
10. 発表と討議
11. 発表と討議
12. 発表と討議
13. 発表と討議
14. 発表と討議
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)発表と討議への参加度と内容:40% (3)レポート:20%

卒業研究(思想)

担当者：柳田 洋夫

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

担当者の主たる研究対象は明治期以降の日本のキリスト教であるが、そもそもは日本人の生き方あり方をテキストに即して探求する「日本倫理思想史」の学びを志してきた。よって、<日本人の心の歴史>に関わることならば、時代・ジャンルを問わず、一緒に勉強していきたい。

2.学びの意義と目標

卒業研究Iでの学びをふまえつつ、それぞれのテーマの最終的まとめに向けて準備する。これまで学んだこと、考えたことをしっかりとしたかたちにまとめることができるようになることを目指す。

準備学習(予習)

授業においてその都度指示する。

準備学習(復習)

授業においてその都度指示する。

授業計画

1. 導入
2. 発表と討議
3. 発表と討議
4. 発表と討議
5. 発表と討議
6. 発表と討議
7. 発表と討議
8. 発表と討議
9. 発表と討議
10. 発表と討議
11. 発表と討議
12. 発表と討議
13. 発表と討議
14. 発表と討議
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)発表と討議への参加度と内容:40% (3)レポート:20%

卒業研究(日本文化)

担当者：黒木 章

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

・まず、参加者全員が自分の取組みたい問題を発表し、その意味や必要性を確認し合う。
・その後、各自が報告・発表するものを材料に相互討議を重ね、取組みの深化を図る。
・学期末レポートにまとめ、卒業論文執筆につなげる。

2.学びの意義と目標

大学生活のまとめとして卒業論文が書けるようにしたい。
大学生活が持つ意味を再確認するとともに自分の生涯の課題の発見あるいは確認をする営みであるので、主体的且つ貪欲なほど成果があがる。誠実に取組むか否かは自身の生き方そのものに関わる。

準備学習(予習)

・発表・討議を繰り返すので必須である。
・発表・報告ではレジユメを作成し、事前に参加者全員に配布しておかなければならない。
・レジユメ作成は事前に担当教員の指導・助言を受けた後でなければならない。

準備学習(復習)

自分の発表・報告に基づいて討議されたことを踏まえてさらに考察を深化させ、小レポートと学期末レポートにまとめる。

授業計画

1. 大学生活を総括するために その1
2. 大学生活を総括するために その2
3. 研究発表・討議
4. 研究発表・討議
5. 研究発表・討議
6. 研究発表・討議
7. 研究発表・討議
8. 研究発表・討議
9. 研究発表・討議、小レポート
10. 研究発表・討議
11. 研究発表・討議
12. 研究発表・討議
13. 研究発表・討議
14. 研究発表・討議
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)授業参加態度:30%:発表、討議
- (2)小レポート:30%:問題設定の意義、深化 (3)学期末レポート:40%

卒業研究(比較文化 アジア)

担当者：濱田 寛

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

日本と中国に関わる「比較文化」「比較文学」を対象とした演習である。また、広く「東アジア」における文化現象の考察も対象とする。上記の条件において、受講生の自由なテーマによる調査・研究発表を行う。演習発表後には成果としてのレポート報告を行う。必要な情報をどのようにして習得すべきか。またその情報をいかに活かすか。そしてそれをいかに提示すべきか。研究発表に不可欠な事項を、各自のテーマを考察する過程を通して学ぶ。

2.学びの意義と目標

必要な情報をどのようにして習得すべきか。またその情報をいかに活かすか。そしてそれをいかに提示すべきか。研究発表に不可欠な事項を、各自のテーマを考察する過程を通して学ぶ。

準備学習(予習)

演習発表の事前準備

準備学習(復習)

学期末レポート作成のための事後調査

授業計画

1. ガイダンス
2. 演習発表準備講義(1)
3. 演習発表準備講義(2)
4. 演習発表準備講義(3)
5. 演習発表(1)
6. 演習発表(2)
7. 演習発表(3)
8. 演習発表(4)
9. 演習発表(5)
10. 演習発表(6)
11. 演習発表(7)
12. 演習発表(8)
13. 演習発表(9)
14. 演習発表(10)
15. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習発表:30% (2)積極性:20% (3)学期末レポート:50%
演習発表は卒業論文執筆を前提として進める。

担当者：濱田 寛

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業論文執筆に向けた実践的な指導を行う。授業の形態は「演習発表(個人発表)」が中心となる。問題の所在、調査の方法、結論に到る考察の在り方、等々について詳細な検討を行うため、発表担当者には十全な準備を求めることになる。90分の授業運営については、60分程度の発表、30分程度の質疑応答で構成する。30分に満たない、あるいは準備不足の発表については再度の発表を設定することになろう。各自2回の発表担当を目指したい。

2.学びの意義と目標

卒業研究の成果を踏まえて、卒業論文/卒業レポート作成のための継続的な調査・研究・発表のスタイルの確立を目標とする。大学生活最後のゼミとして、「発表」の方法についても徹底的なブラッシュアップを行う。

準備学習(予習)

演習発表準備

準備学習(復習)

学期末レポート作成のための事後調査

授業計画

1. ガイダンス
2. 演習発表
3. 演習発表
4. 演習発表
5. 演習発表
6. 演習発表
7. 演習発表
8. 演習発表
9. 演習発表
10. 演習発表
11. 演習発表
12. 演習発表
13. 演習発表
14. 演習発表
15. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習発表:30% (2)積極性:20% (3)学期末レポート:50%
演習発表の準備のために放課後の研究室開放日を設定する予定である。また、発表担当以外の学生諸君は演習における積極的な参加によって自分自身の問題意識を磨き上げる場として自覚を促したい。

卒業研究(比較文化 欧米)

担当者：菊池 有希

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業研究Iでは、専門演習I及び専門演習IIで学んだことを土台にして、ゼミ生各人の問題意識を卒業研究というかたちにまで、発展・成熟させてゆく作法を学んでゆく。具体的には、自身の研究テーマについての先行研究に当たりつつ、自身の考えに客観性を付与してゆく作業が中心となるであろう。

2.学びの意義と目標

卒業研究 においては、自身の意見・解釈をいかに他者に対して説得的に語ってゆくか、ということが大事なコンセプトとなる。地道な調査と緻密な論理的思考をぜひ身に付けて欲しいと思う。これをこの時点で身につけておくことが、各自が自由に選択した論題に主体的に取り組む卒業研究 の必須の土台となるであろう。

準備学習(予習)

卒業研究 においては、常に自身の研究テーマについて思考を巡らせていることが求められる。また、発表においては、周到な準備が要求されることは言うまでもない。

準備学習(復習)

授業時に指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 専門演習から卒業研究へ(1)
3. 専門演習から卒業研究へ(2)
4. 発表及び討議
5. 発表及び討議
6. 発表及び討議
7. 発表及び討議
8. 発表及び討議
9. 発表及び討議
10. 発表及び討議
11. 発表及び討議
12. 発表及び討議
13. 発表及び討議
14. 発表及び討議
15. 全体討議

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)学期末レポート:30% (2)発表:35% (3)授業参加度:35%

卒業研究(比較文化 欧米)

担当者：菊池 有希

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

ゼミの最終段階である卒業研究 においては、各自が主体的に選択した論題に取り組んでもらい、一定の結論を導き出してもらうことになる。ゼミは、発表及び討議を通じて、最後に提出してもらう卒業レポート(原稿用紙30枚程度)をブラッシュアップし完成させるためのプロセスとなるであろう。

2.学びの意義と目標

卒業レポートは、大学での専門的な学びの集大成として位置づけられるものである。これに真剣に取り組む経験は、大学卒業後の各自の人生において、必ずや何らかのかたちで指針を与えてくれるものとなるはずである。

準備学習(予習)

発表に向けては周到な準備が要求される。

準備学習(復習)

授業時に指示する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発表及び討議
3. 発表及び討議
4. 発表及び討議
5. 発表及び討議
6. 発表及び討議
7. 発表及び討議
8. 発表及び討議
9. 発表及び討議
10. 発表及び討議
11. 発表及び討議
12. 発表及び討議
13. 発表及び討議
14. 発表及び討議
15. 総括

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)卒業レポート:50% (2)発表:25% (3)授業参加度:25%

卒業研究(歴史)

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自が関心のあるテーマの先行研究論文を、複数読み比べることが、一つの基本文献に取り組んできた「専門演習」と、最も異なる点である。複数の論者の 差異 を追究することで、必ずや第三の新しい論が立ち現れてくるであろう。それが卒業論文への第一歩である。まだ自分のなかで問題が明確になっていない場合でも、ともに図書館を渉猟することによって、ぜひとも自分の取り組むべきテーマを発見してほしい。

2.学びの意義と目標

専門演習 で、実際に「史料」をもとに歴史を考える端緒についたわけだが、つづく卒業研究 では、これまでの歴史家がどのように「史料」から歴史を考えてきたか、数多くの論文に触れてほしい。

取り組むべきテーマを発見したとき、先人たちはその問題をどのように考えようとしたのか、に学んでほしい。そして、その作業を追体験することを通じて、よりよい問題解決の方法を自ら模索してほしい。

準備学習(予習)

発表の前の週に、発表に使用する基本研究文献をメンバーに配布する。これは、参加者が事前に文献に目を通した上で発表を聞くことで、理解を深め、討論に参加しやすくするためである。

準備学習(復習)

当ゼミでは、毎回の発表者が作成した配布資料を半年間蓄積すると、極めて分厚いファイルになる。常にファイルを見かえしながら、蓄積型の学びを進めて行ってほしい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 先輩の論文を読む
3. レジюме作成法～先輩のレジюмеに学ぶ
4. 学生による発表
5. 学生による発表
6. 学生による発表
7. 学生による発表
8. 学生による発表
9. 学生による発表
10. 学生による発表
11. 学生による発表
12. 学生による発表
13. 学生による発表
14. 学生による発表
15. 学生による発表

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席、発表、議論への参加:50% (2)学期末レポート:50%

卒業研究(歴史)

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自の関心に基づく自由発表の指導を通じて、卒業論文を完成させるために必要な調査力・分析力の鍛錬を行なう。議論に参加すること、議論を組み立てていくことの、難しさと楽しさを味わってほしい。

4年生はいよいよ卒業論文を書き上げる年次であるが、春学期の段階では、まだテーマを絞り過ぎないほうがよい。幅広い研究文献や史料に触れる豊かな時間としてほしい。

2.学びの意義と目標

自分の研究を論文にまとめるという作業は、自分の中だけで完結する営みでは決してない。研究論文は、それを読む人があってはじめて研究論文たりうるといってよい。つまり論文とは、パブリックなものなのである。卒業研究の演習の場は、自分の主張が、自分とは異なる価値観を持つ他の参加者に届くかどうかを試す、絶好のチャンスである。同じ趣味や関心を持つものにしか通じない、隠語の世界に閉じこもってはいはならない。そのような意味で、この訓練は卒業後、社会に出ても役立ててほしい。

準備学習(予習)

発表の前の週に、発表に使用する基本研究文献をメンバーに配布する。これは、参加者が事前に文献に目を通した上で発表を聞くことで、理解を深め、討論に参加しやすくするためである。

準備学習(復習)

当ゼミでは、毎回の発表者が作成した配布資料を半年間蓄積すると、極めて分厚いファイルになる。常にファイルを見かえしながら、蓄積型の学びを進めて行ってほしい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 先輩の論文を読む
3. レジюме作成法～先輩のレジюмеに学ぶ
4. 学生による発表
5. 学生による発表
6. 学生による発表
7. 学生による発表
8. 学生による発表
9. 学生による発表
10. 学生による発表
11. 学生による発表
12. 学生による発表
13. 学生による発表
14. 学生による発表
15. 学生による発表

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席、発表、議論への参加:50% (2)学期末レポート:50%

卒業研究(歴史)

担当者：川崎 司

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容
「専門演習」で身につけた実力を発揮する時がいよいよ来た。たとえテーマを決めかねていても、迷いの歳月は決してむだにはならない。一生懸命求めれば、必ず自分の道が見えてくる。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラム上の位置づけ
「卒業論文」の作成が当面の目標となる。就職など諸活動との調和を計りたい。
3.学びの意義と目標
「卒業論文」には相当の時間と集中力を要する。一時も早いスタートを望む。

準備学習(予習)

ゼミ生全員が、質疑応答・討論に積極的に参加する心構えをもって授業に臨むこと。

準備学習(復習)

発表者は終了後に、内容を補足してレポートを提出すること。

授業計画

- 1....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 2....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 3....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 4....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 5....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 6....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 7....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 8....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 9....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 10....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 11....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 12....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 13....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 14....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。
- 15....「卒業論文」に向けての発表を中心に進める。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席状況:33% (2)発表内容:33% (3)研究レポート:34%

卒業研究(歴史)

担当者：川崎 司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容
大学における学びの総仕上げとして、できれば全員が「卒業論文」に挑んでもらいたい。就職活動とは決して行き違うことはない。もあなたが「大学」という恵まれた天地で何を学んできたのか注目している。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラム上の位置づけ
「卒論論文」の作成とは、自分を徹底して見つめる作業だ。その切実な体験があるかどうか。あなたは人生の分岐点にさしかかっている。今こそ未知の世界へと進み出ようではないか。

準備学習(予習)

互いに励まし合い、入念な準備をもって授業に臨むこと。

準備学習(復習)

発表者は終了後に修正を加え、清書して提出すること。

授業計画

- 1...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 2...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 3...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 4...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 5...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 6...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 7...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 8...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 9...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 10...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 11...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 12...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 13...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 14...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。
- 15...「卒業論文」を前提とした発表を中心に進める。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席状況:33% (2)発表内容:33% (3)研究レポート:34%

対照言語学

担当者：文 智暎

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本語と外国語、主に韓国語を中心に対照する。音声・文字・語彙・文法・言語行動等について、日本語との類似点、相違点を考えていく。また、その応用として日本語教育にどのように生かしていくかを考察する。

2.学びの意義と目標

- ・対照言語学の方法を学ぶ。
- ・外国語と日本語を比べることによって、日本語の特徴を理解する。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるトピックについて考えてくること。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 対照言語学とは
3. 対照言語学の方法
4. 韓国語のしくみ
5. 音声の比較 1
6. 音声の比較 2
7. 文字の比較 1
8. 文字の比較 2
9. 語彙の比較 1
10. 語彙の比較 2
11. 文法の比較 1
12. 文法の比較 2
13. 文法の比較 3
14. 文法の比較 4
15. 文法の比較 5
16. 前半のまとめ
17. 助詞 1
18. 助詞 2
19. 語順 1
20. 語順 2
21. 敬語 1
22. 敬語 2
23. 慣用表現 1
24. 慣用表現 2
25. 言語行動 1
26. 言語行動 2
27. 言語行動 3
28. 対照言語学の応用 1
29. 対照言語学の応用 2
30. 総まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)学期末試験:50% (2)出席:10% (3)授業中の小課題・小テスト:40%

多文化共生演習

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この授業では、「多文化とは何か」「多文化共生とは何か」を少人数グループで互いに意見を交換し合いながら、物事を見る視点には多様性があることを学んでいく。

2.学びの意義と目標

答えのない問題について、意見を交わしながら、最善案を導くというプロセスを学ぶことを目標とする。この学びによって思考力と表現力が伸長されるはずである。

準備学習(予習)

ディスカッションのための資料を配布するため、ディスカッション前に熟読しておくこと。

準備学習(復習)

授業終了時に、振り返りシートの提出を義務付ける。また、ディスカッションのテーマが終わるたびに小レポートを提出すること。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.マインドマップとグループディスカッション(1)
- 3.グループディスカッション(2)(3)
- 4.発表とまとめ
- 5.「パリ20区 僕たちのクラス」
- 6.マインドマップとグループディスカッション(4)
- 7.グループディスカッション(5)(6)
- 8.発表とまとめ
- 9.「青い目 茶色い目」
- 10.「青い目 茶色い目」
- 11.「橋と扉」
- 12.「橋と扉」
- 13.グループディスカッション(7)(8)
- 14.グループディスカッション(9)・発表とまとめ
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:30% (2)振り返りシート:15% (3)小レポート:15%
(4)最終レポート:20% (5)参加度:20%

中国語コミュニケーションA

担当者： 関 子謙

開講期： 春学期 必修・選択： 選択科目 授業回数： 週2回 単位数： 2単位

講義概要

1.内容

1、目的

初級の段階を終え、更に一段と上のレベルの中国語を学ぶ学生を対象とする。

2、カリキュラム上の位置づけ

発音の正確さ、ピンインのマスターを確認しつつ、積極的に話し、楽しい中国語を味わう中級に相当する科目である。

2.学びの意義と目標

改革開放政策に転じて以来、中国は大きな変貌を遂げた。市場経済を導入したことによって、社会の構造が激しく変化し、中国人でさえも、暫く中国から離れていて帰国すると、まるで異国へ来たかのような印象を持つと言う。地理的に近く、交流の歴史も長いお隣の国である中国と、そこで暮らす人々の生活習慣、価値観に触れ、最新知識を増やし、更に中国語の力を伸ばすことを目標とする。

問答形式を基本スタンスとして、教師と学生の会話や学生同士の練習が主です。耳と口などを駆使する一連の作業を通して基本句型習熟させることが狙いです。形を変えて何回でも繰り返して話すことがポイントです。

準備学習(予習)

事前に教科書を読んでおくこと

準備学習(復習)

前回の授業内容をおさらいすること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 発音復習
3. 発音確認テスト
4. 第一課 (ポイント)
5. 第一課 (トレーニング)
6. 第二課 (ポイント)
7. 第二課 (トレーニング)
8. 第三課 (ポイント)
9. 第三課 (トレーニング)
10. 第四課 (ポイント)
11. 第四課 (トレーニング)
12. 第五課 (ポイント)
13. 第五課 (トレーニング)
14. 読解確認テスト
15. 第六課 (ポイント)
16. 第六課 (トレーニング)
17. 第七課 (ポイント)
18. 第七課 (トレーニング)
19. 第八課 (ポイント)
20. 第八課 (トレーニング)
21. 第九課 (ポイント)
22. 第九課 (トレーニング)
23. 第十課 (ポイント)
24. 第十課 (トレーニング)
25. 長文読解トレーニング 1
26. 長文読解トレーニング 1 の解説
27. 長文読解トレーニング 2
28. 長文読解トレーニング 2 の解説
29. 長文読解トレーニング 3
30. 長文読解トレーニング 3 の解説

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席状況:20% (2)受講態度:40% (3)定期試験:40%

中国語コミュニケーションB

担当者：福田 素子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

授業内容:

中国語文法初級の学習を継続しながら、中国の時事問題に関する簡単な文章を読み、それらのトピックについて中国語で語り合う。加えて、雑誌や映画などに触れて、生の中国語に触れる機会も持つ。

2.学びの意義と目標

聞く・話す能力はもちろんのこと、中国語話者のものの考え方、コミュニケーションをとる時に留意する点についても身につけていきたい。

準備学習(予習)

課題となる文章の単語で、意味の分からないところは調べておくこと。

準備学習(復習)

会話に必要な最低限の単語と構文（人称代名詞や基礎的な動詞、簡単な挨拶）は各自復習しておいてほしい。また、積極的にコミュニケーションに参加する心構えが必要である。

授業計画

1. ガイダンス
2. 文法復習
3. 文法復習
4. 文法復習
5. 文章読解
6. 文章読解
7. ディスカッション
8. 練習
9. 文章読解
10. 文章読解
11. ディスカッション
12. 練習
13. 文章読解
14. 文章読解
15. ディスカッション
16. 練習
17. 文章読解
18. 文章読解
19. ディスカッション
20. 練習
21. 文章読解
22. 文章読解
23. ディスカッション
24. 練習
25. レポート課題文を読む
26. レポート課題文を読む
27. レポート課題文を読む
28. ディスカッション
29. ディスカッション
30. レポート課題解説

教科書

プリントを配布する
受講者の学習到達度や希望をもとにテキストを選択する。

評価方法

- (1)レポート:50%
- (2)小テスト受験:50%:一つの文章を読み終わるごとに小テストを行う。

中国思想

担当者：大坊 真伸

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義は2コマ連続の講義である。
1コマ目に「中国思想」、2コマ目に漢文訓読を教授する。

本年度の講義は「儒教」を扱う。ただし、必要に応じて「儒教」以外の「諸子百家」についても言及していく。

儒教の基本テキスト『四書』・『五経』を基礎とし、その外郭的な経書群も含めた、所謂「十三経」について、その基本的な構造を講義する。もっとも、深奥難解な内容も多いため、やり出すとキリがない。よって概論的なものにとどめる。

日本文化に関連のある逸話を紹介していくつもりである（例えば赤穂浪士と『礼記』など）。お楽しみに。

漢文訓読の基礎を学ぶ。

2.学びの意義と目標

中国の思想に触れてもらうため日本語訳を読み、その日本語訳から漢文（原文）を読解するような授業を行う。

中国思想の特徴、正確な漢文訓読を講義の目的とするが、漢文読解についてはあまり枝葉末節に拘らないようにしたい。

準備学習(予習)

中国思想・漢文句形、ともに高等学校ではあまり詳しく学んできてはいないことと推察する。よって予習を課すことはしない。
その代わりに、授業内に於いてしっかり学習内容を身につけて欲しい。

準備学習(復習)

今年度は“(入試によく出る)漢文重要単語”を家庭学習として課す。
詳細は初回授業時に説明する。
また、漢文句形の確認テストを行う。
プリント沢山なので、専用フォルダ必須！

授業計画

1. 【儒教】ガイダンス（中国思想での儒学の位置）
2. 漢文 ガイダンス（漢文の五文型）
3. 【儒教】孔子
4. 漢文 返り点・送り仮名・書き下し文
5. 【儒教】『論語』
6. 漢文 助字・返読文字
7. 【儒教】孟子の思想(1)
8. 漢文 再読文字
9. 【儒教】孟子の思想(2)
10. 漢文 否定文(1)~(3)
11. 【儒教】『大学』
12. 漢文 否定文(4)~(5)
13. 【儒教】『中庸』
14. 漢文 否定文(6)~(7)
15. 【儒教】『詩経』
16. 漢文 疑問形
17. 【儒教】『書経』
18. 漢文 反語形
19. 【儒教】『礼記』
20. 漢文 使役形・受身形
21. 【儒教】『易経』
22. 漢文 仮定形・比較形・選択形
23. 【儒教】『春秋』
24. 漢文 抑揚系・限定形・累加形・感嘆形
25. 【儒教】『春秋三伝』
26. 漢文 入試問題にチャレンジ！！
27. 【儒教】「三礼」・『孝経』・『爾雅』
28. 日本儒学概説～内村鑑三『代表的日本人』～
29. 【儒教】総括と試験
30. 漢文 総括と試験

教科書

森川 敏行 『入試頻出 漢文《語と句形》』(桐原書店)

評価方法

(1)単語小テスト:45%:漢文重要単語(2)句形小テスト:45%:漢文重要句形(3)期末試験:10%:毎時間の小テストの延長として行う予定である。
毎時間の小テストが評価の重要なウェイトを占める。
授業を欠席すると、その時間の小テストが0点になるばかりでなく、次の小テスト範囲も未習熟になってしまうので注意すること。

担当者：濱田 寛

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

中国六朝期の志怪小説の講読を中心とし、漢文読解力の涵養、基礎的な工具書の扱い方等にも配慮する。

2.学びの意義と目標

中国文学史上の「志怪小説」の位置づけを理解するとともに、具体的な作品の読解を通して、その作品世界に触れたい。また、上記のカリキュラム上の位置づけを踏まえて、基礎となる「訓読」についてより深い理解を目指す。

準備学習(予習)

配付資料に関する予習 / 教場で指示

準備学習(復習)

M o o d l eでの復習

授業計画

1. ・ガイダンス
2. ・志怪小説概論(1)
3. ・志怪小説概論(2)
4. ・志怪小説概論(3)
5. ・志怪小説概論(4)
6. ・志怪小説概論(5)
7. ・志怪小説各論(1) / 「三王墓」(1)
8. ・志怪小説各論(2) / 「三王墓」(2)
9. ・志怪小説各論(3) / 「范巨卿張元伯」(1)
10. ・志怪小説各論(4) / 「范巨卿張元伯」(2)
11. ・志怪小説各論(5) / 「董謠」(1)
12. ・志怪小説各論(6) / 「董謠」(2)
13. ・志怪小説各論(7) / 「鬼」(1)
14. ・志怪小説各論(8) / 「鬼」(2)
15. ・志怪小説各論(9) / 「管輅」(1)
16. ・志怪小説各論(10) / 「管輅」(2)
17. ・志怪小説各論(11) / 「隗炤」(1)
18. ・志怪小説各論(12) / 「隗炤」(2)
19. ・志怪小説各論(13) / 「天竺胡人」(1)
20. ・志怪小説各論(14) / 「天竺胡人」(2)
21. ・志怪小説各論(15) / 「胡母班」(1)
22. ・志怪小説各論(16) / 「胡母班」(2)
23. ・志怪小説各論(17) / 「妖怪・牛能言」(1)
24. ・志怪小説各論(18) / 「妖怪・牛能言」(2)
25. ・志怪小説各論(19) / 「到伯夷・安陽亭書生」(1)
26. ・志怪小説各論(20) / 「到伯夷・安陽亭書生」(2)
27. ・志怪小説各論(21) / 「阿紫」(1)
28. ・志怪小説各論(22) / 「阿紫」(2)
29. ・志怪小説各論(23) / 「阿紫」(3)
30. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)予習・復習:30%:Moodleを運用 (2)積極性:20%
 (3)学期末レポート:50%
 本講義はM o o d l eでのフォローアップを行います。受講生は定期的にM o o d l eにアクセスすることが必須となります。

伝統芸能 A

担当者：茂山 千三郎

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

日本の伝統芸能の中で、最もシンプルかつ基礎となる芸能「狂言」を通し、古典芸能の伝承を知る。具体的には、歴史、演技論、発声法、台本の分析、解釈、衣装分析、能舞台の機能と理論の解説。

基礎の演技「構え・歩み」から一曲の狂言の演技実習で衣装の着付けも含め、上演完成を目標とする。

2.学びの意義と目標

日本の「伝統芸能」の姿を知ること、私たちがどのような文化を育んできたか、そして、現在の私たちにとってどのような意味を持つのかを理解する。更には、実演を通して、「文化を体験すること」「文化を創造すること」という、アクティブラーニングを実践する。

準備学習(予習)

演技実習では、各自が日々台本の読み、演技を反復しておくことが求められる。

準備学習(復習)

演技実習では、その日行った台本の読み、演技のおさらいをしておくことが求められる。

授業計画

1. 伝統芸能論 狂言
2. 伝統芸能論 狂言
3. 伝統芸能論 狂言
4. 学外実習
5. 学外実習
6. 能狂言比較
7. 能狂言比較
8. 狂言演技論
9. 台本分析
10. 台本分析
11. 発声
12. 台本読み
13. 台本読み
14. 台本読み
15. 謡実習
16. 謡実習
17. 謡実習
18. 型の稽古
19. 型の稽古
20. 型の稽古
21. 狂言の動きの稽古
22. 狂言の動きの稽古
23. 狂言の動きの稽古
24. 狂言の動きの稽古
25. 狂言の動きの稽古
26. 狂言の動きの稽古
27. 狂言の動きの稽古
28. 着付け実習
29. 総合稽古
30. 総合稽古

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)狂言実習の評価:60% (2)狂言鑑賞レポート:20% (3)最終レポート:20%

ナレーション

担当者：川野 一字

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

文章をいかに正確に分かりやすく、伝えるかの訓練のための実践講座である。音声表現に欠かせない発音・発声、アクセント、イントネーションの基礎をしっかり学び、随筆、ニュースなどで練習を重ねながら、音声表現の基礎の確立を目指す。

2.学びの意義と目標

広い意味でのコミュニケーション論の一環であり、文章の内容をわかりやすく伝える音声表現の基礎である。

その文章表現の練習として、随筆、小説、詩、ニュース、お知らせ文など様々な題材にふれ、それぞれの特徴をつかみながら表現の基礎を学ぶ。口の正しい開き方にもとずいたはっきりとした発音、姿勢を正した腹式呼吸法による声量のある発声、そして何よりも間、ポーズの大事なことを理解し、意味の区切りにもとずく間の取り方を習得することを目指す。

準備学習(予習)

事前に指示するプリントの下読みを徹底すること。

準備学習(復習)

他の学生の読みを聞いて参考にし、良い点は取り入れること聞くことも重要だと認識すること

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.発音・発声・イントネーション
- 3.まず読んでみよう
- 4.随筆 1
- 5.随筆 2
- 6.ニュース
- 7.ニュース
- 8.お知らせ・アナウンス文 1
- 9.お知らせ・アナウンス文 2
- 10.小説を読む 1
- 11.小説を読む 2
- 12.ナレーション原稿 1
- 13.ナレーション原稿 2
- 14.ナレーション原稿 3
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)日常の読み:30% (2)授業への姿勢:10% (3)課題表現:60%

日本文学史(上代・中古)

担当者：有馬 義貴

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

奈良時代から平安時代までの文学史について、主要な作品（万葉集・古事記・古今和歌集・土佐日記・竹取物語・伊勢物語・源氏物語・枕草子、等々）を実際に鑑賞しながら学んでいく。

2.学びの意義と目標

一つ一つの作品の内容を把握するだけでなく、各作品が文学史の流れの中でどのように位置づけられるのかを理解する。各作品を読みながら、それぞれの繋がりや影響関係などをもおさえていきたい。

準備学習(予習)

上代・中古の主要な文学作品の概要を把握しておくこと。詳細は授業の中で指示する。

準備学習(復習)

講義の内容について、自分自身でも説明できるようにしておくこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 上代文学史概説
3. 和歌・歌謡（1）
4. 和歌・歌謡（2）
5. 神話・伝承（1）
6. 神話・伝承（2）
7. 中古文学史概説
8. 和歌・漢詩文（1）
9. 和歌・漢詩文（2）
10. 和歌・漢詩文（3）
11. 日記文学（1）
12. 日記文学（2）
13. 日記文学（3）
14. 日記文学（4）
15. 枕草子（1）
16. 枕草子（2）
17. 物語（源氏物語以前）（1）
18. 物語（源氏物語以前）（2）
19. 物語（源氏物語以前）（3）
20. 物語（源氏物語以前）（4）
21. 物語（源氏物語）（1）
22. 物語（源氏物語）（2）
23. 物語（源氏物語）（3）
24. 物語（源氏物語）（4）
25. 物語（源氏物語以後）（1）
26. 物語（源氏物語以後）（2）
27. 物語（源氏物語以後）（3）
28. 物語（源氏物語以後）（4）
29. 総括
30. 理解度の確認

教科書

鈴木 日出男, 多田 一臣, 小島 孝之, 長島 弘明 『古典入門 古文解釈の方法と実際』(筑摩書房)

評価方法

(1)学期末試験:70% (2)平常点:30%:(出席状況・コメントペーパー)

日本文学史(近現代)

担当者：前田 潤

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

内容

明治初期から平成に至るまでの日本文学の歩みを概観する。画期的な意味を持つ文学作品や文学者の動向に触れ、その歴史的な位置を確認すると共に、同時代の文化社会の中でそれらがどのような役割を果たしていたのかに言及する。特に政治や労働運動、活字出版メディアの史的展開と文学言説との関わりについては詳しく見取り図を引いてゆきたい。授業では項目を挙げるだけの解説は避け、記憶に残るような鮮烈な文学者の言動を紹介したいと考えている。

カリキュラム上の位置づけ

国語科教員資格取得者にとっての必修科目。もちろん、資格取得を目指す学生も受講できる。近現代の日本文学や日本文化に関心のある人にふさわしい科目である。

2.学びの意義と目標

「近代文学」という制度発生の歴史過程を注視し、「近代文学」が他領域とどのような影響関係のもとで変貌してきたのかについて学ぶことを通じて、「歴史」を相対化し、「現代」を対象化するまなざしを育みたい。

準備学習(予習)

授業中紹介してゆく作品の幾つかを、自ら手に取り読んでみて欲しい。

準備学習(復習)

各回完結型の講義ではあるが、近代文学史の流れを体系的に把握するためには、講義内容の連続性に配慮し、前回の内容を復習しながらついてきて欲しい。

授業計画

1. ガイダンス
2. 近代小説の起源
3. 「浮雲」の実験
4. 「たけくらべ」の文体
5. 「舞姫」の論じ方
6. 「阿部一族」は剽窃文学か
7. 「郊外」の発見
8. 「自然」をめぐる紆余曲折
9. 自己文学と自虐文学
10. 「坊っちゃん」語りの構造
11. 「三四郎」と「青年」
12. 「心」をめぐる論争
13. 革新者・正岡子規
14. 「家族」の文学・志賀直哉と疫病
15. 労働争議と大正文学
16. 職業作家としての芥川龍之介
17. 関東大震災と近代日本文学
18. 谷崎潤一郎の「転向」
19. 「新感覚」の実態
20. 「蟹工船」再考
21. 「人間失格」の「奥行き」
22. 「戦後」文学の可能性
23. 巨人・松本清張
24. 社会派推理小説について
25. 村上龍の軌跡
26. 1995・村上春樹の「転回」
27. 村上春樹と1Q84
28. 都市・ファッション・ノベル
29. 「詩人」としての津島佑子
30. 長野まゆみと桜庭一樹

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席・受講姿勢:50% (2)最終試験:50%

日本文学史(中世・近世)

担当者：家永 香織

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

中世・近世（時代でいうなら鎌倉時代から江戸時代まで）の文学作品を取り上げる。それまで貴族階級がほぼ独占していた文化形成の場に、まず武士階級が、そして町人階級が参入していく時期であり、俗っぽさ・人間臭さ・猥雑さ・生活感など王朝文化には見られない特徴が現れると同時に、王朝文化に対する遙かなるあこがれも見出せる時代である。雅やかな王朝文化とは違ったおもしろさを味わってほしい。

2.学びの意義と目標

中世・近世の文学作品から著名な作品、重要な作品を中心に選んで取り上げる。同時に、さほど著名ではなくとも、おもしろく読める作品にも触れる。各々の作品の独自性を明らかにすると同時に、他の作品との関連や、文学史の中でその作品がどのような位置を占めるかといった視点も大切にして読解を進める。多くの作品に触れる中で、日本古典文学がいかに多様で奥深いかを知って欲しい。

準備学習(予習)

作品の概要について、文学辞典などで確認しておく。図書館1階にある『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『日本古典文学大事典』（明治書院）などを活用して欲しい。

準備学習(復習)

ノートの見直しと整理をすること。ノートを見直す過程で、疑問点が見つかったら、次の授業の際に質問して欲しい。

授業計画

- 1.文学史とは
- 2.中世の韻文（和歌）- 王朝和歌から中世和歌へ
- 3.中世の韻文（和歌）- 藤原定家と後鳥羽院(1)
- 4.中世の韻文（和歌）- 藤原定家と後鳥羽院(2)
- 5.中世の韻文（和歌）- 藤原定家と後鳥羽院(3)
- 6.中世の散文（評論）- 無名草子
- 7.中世の散文（軍記）- 平家物語
- 8.中世の散文（日記）- 建礼門院右京大夫集(1)
- 9.中世の散文（日記）- 建礼門院右京大夫集(2)
- 10.中世の散文（日記）- とはずがたり(1)
- 11.中世の散文（日記）- とはずがたり(2)
- 12.中世の散文（随筆）- 方丈記
- 13.中世の散文（随筆）- 徒然草(1)
- 14.中世の散文（随筆）- 徒然草(2)
- 15.中世の散文（説話）- 発心集
- 16.中世の散文（説話）- 宇治拾遺物語(1)
- 17.中世の散文（説話）- 宇治拾遺物語(2)
- 18.中世の散文（説話）- 今物語
- 19.連歌から俳諧へ
- 20.近世の韻文（俳諧）- 松尾芭蕉
- 21.近世の韻文（俳諧）- 与謝蕪村・小林一茶
- 22.近世の散文（小説）- 近世の小説概論
- 23.近世の散文（小説）- 井原西鶴(1)
- 24.近世の散文（小説）- 井原西鶴(2)
- 25.近世の散文（小説）- 井原西鶴(3)
- 26.近世の散文（人形浄瑠璃・歌舞伎）- 近松門左衛門(1)
- 27.近世の散文（人形浄瑠璃・歌舞伎）- 近松門左衛門(2)
- 28.近世の散文（小説）- 読本
- 29.近世の散文（小説・落語）- パロディと笑話
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:60% (2)平常点:40%

日本語学(音声・音韻) A

担当者：中川 千恵子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

日本語教育の観点から、日本語音声学・音韻論の基礎を学ぶ。「あいうえお」など単音の発音について、規範的な発音法を学び、自分自身の発音との差異を考える。そのために、実際に発音したり音声を聞いたりして、積極的に音声の微妙な違いや自分の調音部位の状態を発見するような活動を行う。また、日本語の発音記号の書き方を身につける。

試験は、日本語教育能力検定試験の出題内容も視野に入れ、筆記と聴解の両方を課す。

2.学びの意義と目標

日本語教育の視点から、日本語音声学・音韻論の中の単音（分節音）についての知識と応用を学ぶ。日本人にとっては、自分の発音を客観的かつ論理的に考えること、外国人にとっては、日本語の発音を論理的に知ることが目標である。

準備学習(予習)

発見を重視するので、予習はせず、先入観なしに授業に臨むことで、好奇心を持って発見してほしい。

準備学習(復習)

復習シートを渡すので、必ずやること。また、手鏡などをみながら発音して、自分の口の動きを観察してほしい。

授業計画

1. 言語音を作る仕組み 音声について
2. 母音
3. 子音 - 1
4. 子音 - 2
5. 子音 - 3
6. 子音 - 4
7. 子音 - 5
8. 子音 - 6
9. 子音 - 7
10. 音素と異音 有声音と無声音
11. 特殊音素（拍）
12. 母音の無声化 聴解練習
13. 復習 聴解練習
14. 復習 聴解練習
15. 試験とその解説

教科書

国際交流基金 『音声を教える』（ひつじ書房）

評価方法

(1)期末テスト:60% (2)出席と参加:30% (3)授業態度:10%
出席率70%を割ったものは、期末テストを受けられない。

日本語学(音声・音韻) B

担当者：中川 千恵子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

日本語のアクセント・イントネーション・リズムなどの韻律（プロソディー）について学習する。実際の音声を聞いたり発音してみたりすることで、アクセントやイントネーションなどの韻律特徴をとらえ、体系化して考えることを学ぶ。規範とされる韻律体系と自分の発音や他の人の発音との差異について、実際に発音してみて確かめる。日本語教育能力検定試験の出題内容も視野に入れ、試験問題なども扱う。

2.学びの意義と目標

日本語教育の視点から、日本語音声学・音韻論の中の韻律（プロソディー）についての知識と応用を学ぶ。

日本人にとっては、自分の発音を客観的かつ論理的に考えること、外国人にとっては、日本語の発音を論理的に知ることが目標である。

準備学習(予習)

授業の中で指示した教科書をよく読んで復習してもらいたい。復習シートを渡すので、必ずやること。また、実際に発音して、自分の話し方を観察してほしい。

準備学習(復習)

授業の中で指示した教科書をよく読んで復習してもらいたい。復習シートを渡すので、必ずやること。また、実際に発音して、自分の話し方を観察してほしい。

授業計画

1. イントロダクション 韻律（プロソディー）とは？
2. イントネーション - 1
3. イントネーション - 2
4. イントネーション - 3
5. フットとフォーカス
6. アクセント - 1
7. アクセント - 2
8. アクセント - 3
9. アクセント - 4
10. アクセント - 5
11. アクセント - 6
12. アクセントとイントネーション復習
13. まとめ 1 実習 1
14. まとめ 2 実習 2
15. 試験とその解説

教科書

中川千恵子他 『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための発音練習帳』(ひつじ書房)

評価方法

(1)期末テスト:60% (2)出席と参加:30% (3)授業態度:10%
出席率70%を割った者は、期末テストを受けられない。

日本語学(文法) A

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この授業では、普段意識せずに使用している日本語を見直し、日本語がどのような文法から成り立っているのかを学んでいく。日本語の文法は「命題」と「モダリティ」から成ると言われているが、「文法A」では特に「命題」に重きを置く。また、「文法A」では主に単文を扱う。

2.学びの意義と目標

日本語を客観的に観察し、分析し、説明する力をつけることを目標とする。

準備学習(予習)

毎回、用語などに関する予習課題を提示する。

準備学習(復習)

授業で取り上げた文法項目は、返却されたワークシートを用いて、必ず復習しておくこと。

授業計画

1. 文法を考えるとということ
2. 単語とは
3. 品詞とは
4. 品詞を考える(活用)
5. 格の問題
6. 自動詞と他動詞
7. ボイス(1)受け身
8. ボイス(2)使役
9. やりもらい
10. アスペクト「～ている」
11. テンス「～る」「～た」
12. 空間に関する表現
13. 意志に関する表現
14. 解釈の多義性
15. 否定と文の解釈

教科書

森山 卓郎 『ここからはじまる日本語文法』(ひつじ書房)

評価方法

- (1)出席:25% (2)宿題・課題の提出:20% (3)中間レポート:10%
(4)期末テスト:40% (5)授業参加度:5%:発表などの授業内活動のこと

日本語学(文法) B

担当者：黒崎 佐仁子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この授業では、普段意識せずに使用している日本語を見直し、日本語がどのような文法から成り立っているのかを学んでいく。日本語の文法は「命題」と「モダリティ」から成ると言われているが、「文法B」では特に「モダリティ」に重きを置く。また、「文法A」では主に単文を扱ったが、「文法B」では複文についても考察していく。

2.学びの意義と目標

日本語を客観的に観察し、分析し、説明する力をつけることを目標とする。

準備学習(予習)

毎時間、数個の課題を提示する。その課題に取り組むことで予習を行ってほしい。

準備学習(復習)

毎時間始めにワークシートの返却を行うため、ワークシートを元に自主的にきちんと丁寧な復習を行ってほしい。

授業計画

1. 文法とは？
2. モダリティ 断定と不確定 医者「インフルエンザらしいですね」「インフルエンザのようですね」
3. モダリティ 断定と不確定 天気予報「明日は雨でしょう」
4. モダリティ 疑問文 「彼はどこにいるかわからない」「彼はどこにいるかわからない」
5. モダリティ 意志 「じゃあ、ぼくがやるつもりだ」「じゃあ、ぼくがやる」
6. 終助詞 「いい天気ですね」「そうです」「そうですね」
7. 主語と「は」と「が」
8. 「象は鼻が長い」「僕はうなぎだ」
9. とりたて 「女の子だけ来た」「女の子しか来なかった」
10. 単文と複文
11. 複文 「て」節
12. 複文 条件文 「雨が降るとこの傘を差しなさい」「雨が降ったらこの傘を差しなさい」
13. 複文 逆接 「急いでいるのは分かるのに、車は使うな」「急いでいるのは分かるが、車は使うな」
14. 名詞修飾 「内の関係」「外の関係」
15. 談話とテキスト

教科書

森山 卓郎『ここからはじまる日本語文法』(ひつじ書房)

評価方法

- (1)出席:25% (2)課題:25% (3)中間レポート:10% (4)期末レポート:30% (5)参加態度:10%

日本語学概説

担当者：小林 茂之

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代言語学は、科学の一分野として認識されるようになった。これは、チョムスキーによる生成文法と呼ばれる言語研究が言語学の主流の一つを占めるようになったためである。本講義では、現在アメリカの代表的知識人の一人であるチョムスキーについて紹介し、彼が確立した生成文法が何を問題とし、解明してきたかを概説する。そして、生成文法が研究対象とする母語話者の言語知識とは何であるかを、受講者のほとんどの母語である日本語と、言語の普遍性の観点から日本人にとってもっとも知られている外国語である英語のデータに基づいて、教科書の構成に従いながら解説し、歴史言語学の導入を補足する。

2.学びの意義と目標

比較研究的立場で日本語と英語について分析することは、現代言語学において常識であると言える。また、現代知性の代表の一人としてのチョムスキーと現代言語学を具体例を通して理解し、大学生レベルの現代言語学・言語哲学・認知科学に関する人文学的教養を身に付ける。

準備学習(予習)

講義時に配布するハンダウト(プリント)に、次回の教科書の予習ページが示されるので、それにしたがって教科書を予習する。

準備学習(復習)

期末のレポートの準備を含めて、発展的読書をする。また、講義で取り上げない部分を復習時に補う。

授業計画

1. チョムスキーの学問と思想(1)
2. チョムスキーの学問と思想(2)
3. 第1章 ことばの研究(1)
4. 第1章 ことばの研究(2)
5. 第1章 ことばの研究(3)
6. 第1章 ことばの研究(4)
7. 第2章 ことばの獲得(1)
8. 第2章 ことばの獲得(2)
9. 第2章 ことばの獲得(3)
10. 第2章 ことばの獲得(4)
11. 第3章 音としてのことば(1)
12. 第3章 音としてのことば(2)
13. 第3章 音としてのことば(3)
14. 第3章 音としてのことば(4)
15. 第4章 語彙と辞書(1)
16. 第4章 語彙と辞書(2)
17. 第4章 語彙と辞書(3)
18. 第4章 語彙と辞書(4)
19. 第5章 文の仕組み(1)
20. 第5章 文の仕組み(2)
21. 第5章 文の仕組み(3)
22. 第5章 文の仕組み(4)
23. 第6章 語の意味と文の意味(1)
24. 第6章 語の意味と文の意味(2)
25. 第6章 語の意味と文の意味(3)
26. 第6章 語の意味と文の意味(4)
27. 補足:歴史言語学入門(ラテン語・古英語)
28. 予備日
29. 予備日
30. まとめ

教科書

井上和子・他 『生成言語学入門』(大修館書店)

評価方法

(1)レポート:40% (2)出席:40% (3)授業態度:20%

日本語学特殊講義

担当者：宮城 信

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

この講義は、日本語の用言（動詞・形容詞および形容動詞）に注目して、意味論・語彙論・形態論の観点から考察を行う。日本語学における形容詞の位置づけ、歴史的変遷、形容詞の機能などについて概説し全体を像を捉える。さらに、語彙の広がり、意味的特徴をデータから考察する。そして、用言の機能の拡張や新しい形容詞の出現などについても言及する。

2.カリキュラム上の位置づけ

専門科目の一つである。日本語の用言の分析を通して、学術的観点、思考法、分析法の基礎を学ぶことになる。

2.学びの意義と目標

日常的に使用する母語である日本語を客観的に捉え、また歴史的変遷も踏まえて、外国語との比較も行いながら、その特質を理解するようつとめることを目標とする。

準備学習(予習)

高校までに学習した知識を前提とする。これまでの学習内容を深めたり、新たな解釈を示すことがあるので、引っかけりを覚えたら、調べる・質問するなどして解決しておくこと。

準備学習(復習)

毎時間プリントを配布するので、次回までに復習し問題点を解決しておいてください(疑問がある場合、かならず質問してください)。

授業計画

- 1.日本語を分析する
- 2.品詞概説
- 3.用言の内容と周辺
- 4.意味論・語彙論・形態論概説
- 5.動詞概説
- 6.動詞・形容詞の活用
- 7.動詞・形容詞の語彙
- 8.動詞の意味・機能(1)テンス・アスペクト
- 9.動詞の意味・機能(2)語彙概念1
- 10.動詞の意味・機能(3)語彙概念2
- 11.動詞の意味・機能(4)意味
- 12.動詞の格体制
- 13.形容詞・形容動詞概説
- 14.形容詞の意味・機能(1)テンス
- 15.形容詞の意味・機能(2)意味の境界
- 16.形容詞の意味・機能(3)類義・対義
- 17.形容詞の意味・機能(4)役割分担と拡張
- 18.形容詞の意味・機能(5)意味
- 19.副詞への派生
- 20.用言の国語学的研究概説
- 21.動詞・形容詞の史的変遷(1)
- 22.動詞・形容詞の史的変遷(2)
- 23.コーパスを利用した分析法(1)-共起-
- 24.コーパスを利用した分析法(2)-語順-
- 25.述部の予測
- 26.新しい語の出現
- 27.身近な日本語を考える(1)
- 28.身近な日本語を考える(2)
- 29.まとめ
- 30.test

教科書

プリントを配布する
資料は適宜配布する。また、重要参考文献に関しては授業中に紹介する。

評価方法

- (1)学期末テスト:60%
- (2)授業への取り組み:20%:授業への出席、発言、発表も含む
- (3)小レポート:20%:授業内容に関する小調査および考察

日本語教育概論

担当者：北村 淳子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、日本語教育の現状及び歴史を理解した上で、英語・国語教育との比較における日本語教育の特色、日本語の音声、文法、文字・表記、語彙、日本語教育と関わりのある社会言語学、心理学を概観する。また、教師としての心構えについても考える。

いくつかのテーマについては、講師が課題を出し、何人かの学生を指名し、レポートを書かせる。指名された学生の一人は、レポートの内容についてクラスに報告する。

2.学びの意義と目標

日本語教育に必要な基礎的知識を得ること。

準備学習(予習)

授業の前に、当日学習する教科書の当該箇所を読んでおくこと。用語なども調べておく。

準備学習(復習)

学習した内容と自らが発見したことをまとめる。

授業計画

- 1.日本語を学ぶ人、教える人
2. 同上
- 3.多文化共生と日本語教育
4. 同上
- 5.年少者日本語教育
6. 同上
- 7.日本語教育の歴史
8. 同上
9. 同上
- 10.日本語教育の特色
11. 同上
- 12.言語としての日本語
13. 同上
- 14.日本語の音声
15. 同上
- 16.日本語の文法
17. 同上
18. 同上
19. 同上
20. 同上
- 21.文字・表記
22. 同上
- 23.語彙
24. 同上
- 25.社会言語学 - ことばと社会のかかわりー
26. | 同上
- 27.心理学 - 学ぶということのメカニズムー
28. | 同上
- 29.日本語教師の心構え
30. 同上

教科書

高見澤孟 監修 『新・はじめての日本語教育1』(アスク)

評価方法

(1)レポートの内容:10% (2)教室内発表の内容:10% (3)授業態度:10% (4)試験:70%
出席時間数が全体の3分の2に満たない者は評価しない。

日本語教育実習

担当者：川口 さち子, 木原 郁子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

・外国人学生に日本語を教えるための実践的な力を養う。

1 教室内作業

- 1) 教科書の各課の指導項目を把握・分析し、各項目の導入方法およびドリルや会話等の練習方法を学び、教案が立てられるようにする。
- 2) 指導項目にあった、教材が作成できるようにする。
- 3) 模擬授業を行い、実際の教壇に立てるようにする。

2 現場実習...夏休みの2週間を使い、実際に日本語教育機関で見学および教壇実習を行う。見学ノート・教壇実習の教案およびそのレポート・日本語教育機関での実習を終えてのレポートを作成、提出する。

このほかに、本学の日本語授業にボランティアとして入ってもらうことがある。また、現場実習へ行く前に自主トレーニングを行ってもらう予定である。

2.学びの意義と目標

・日本語教授法演習を終了し、いよいよ実践への応用となる段階である。

・これを履修することにより、現場で実際に教えられる力を身につけてほしい。

準備学習(予習)

履修者にはほぼ毎回発表してもらう。取り組みが不十分な者は、現場実習に参加できないことがあるので、発表者はレジュメ・教案を十分に準備すること。

準備学習(復習)

本学の日本語授業に参与観察してもらうことがある。その場合は、見学レポートを提出してもらう。実習校での現場実習に参加する前に、教科書に再度目を通し、各課の文型・新出語彙は整理しておくこと。

授業計画

1. 講義概要・実習とは・教案作成の方法・予備テスト
2. 『みんなの日本語I・II』の構成および各課の指導項目の把握・分析
3. 『みんなの日本語I・II』の構成および各課の指導項目の把握・分析・教案作成準備
4. ラフ教案作成・発表
5. 教案詳細発表
6. 模擬授業(文型)
7. 模擬授業(文型)
8. 模擬授業(文型)
9. 模擬授業(文型)
10. 模擬授業(漢字)
11. 模擬授業(漢字)
12. 模擬授業(漢字)
13. 模擬授業(漢字)
14. 模擬授業(聴解)
15. 模擬授業仕上げ

教科書

スリーエーネットワーク編 『みんなの日本語初級I 本冊』(スリーエーネットワーク)
スリーエーネットワーク編 『みんなの日本語初級II 本冊』(スリーエーネットワーク)

評価方法

- (1)教案と発表:40% (2)討論への参加度:10% (3)出席状況:10%
(4)実習校での評価:20% (5)実習レポート・見学レポート:20%

担当者：作田 奈苗

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

<p>講義概要</p> <p>1.内容 この授業では、日本語を教えるときの効果的な教材の選び方、使い方、及び、作り方について考える。 日本語教師は、学習者のレベルや学習目的に合わせた的確な教材を用意できなければならない。そのため、教材選択の留意点を学び、また、どんなものが教材の素材になり得るかを学ぶ。さらに、その素材をもとに実際の教材を作成し、利用する実践力を身につける。 授業では講義だけではなく実際の教材作成に取り組み、それを発表し互いに検討する。</p>	<p>授業計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.教材の役割、レベル・ニーズに合わせた教材選び・教材作り 2.コントロールされた日本語 初級読解教材を作る 3.語彙・文型の導入とドリル(1) 絵カードの作成 ネットで素材を集める 4.語彙・文型の導入とドリル(2) 絵カード活用例の発表 5.文法練習(1) 文法練習問題の作成 Word、Excelの利用 6.文法練習(2) 文法練習問題例の発表 7.デモンストレーション(1) 動画の利用 PowerPointの利用 8.デモンストレーション(2) デモンストレーション教材の発表 9.初級作文教材(1) 作文教材の作成 10.初級作文教材(2) 作文教材例の発表 11.生教材(1) マンガ、雑誌などの利用 12.生教材(2) 生教材を使った授業活動の発表 13.ネット上にある日本語学習サイト(1) 14.スマートフォン、タブレット端末と日本語教育 15.ネット上にある日本語学習サイト(2) 教材分析(発表)
<p>2.学びの意義と目標 ・学習者のレベルや学習目的に合わせた教材を選んだり作ったりできるようになること。 ・インターネット、印刷物等の様々なメディアの中から教材として使える素材を入手し、それを利用した教材を作れるようになること。</p>	
<p>準備学習(予習) 課題の教材を完成させ、発表する準備をしておくこと。原則的に発表の割り当てられた日に発表できなければ、評価されない。</p>	<p>教科書 スリーエーネットワーク 『みんなの日本語 初級1 第2版 本冊』(スリーエーネットワーク)</p>
<p>準備学習(復習) 課題の教材を完成させ、発表する準備をしておくこと。原則的に発表の割り当てられた日に発表できなければ、評価されない。</p>	<p>評価方法 (1)教材作成(6回):40% (2)発表(5回):20% (3)レポート(3回):20% (4)出席率:20% 合計60点以上を単位取得の条件とする。</p>

日本語教授法演習

担当者：木原 郁子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「外国人に対する日本語」の教え方の基礎を学ぶ。いろいろな日本語教科書の特徴を調べる。教科書として『みんなの日本語』を用い、日本語文法を「文型」という観点から学ぶ。

アセンブリーアワーに行われる実習報告会（例年10月または11月に実施）、留学生弁論大会（開催される場合は11月頃）への参加とレポート作成は、この授業の一環として必須事項とするのでスケジュールを空けておくこと。また、入試日などの大学休校日を利用して、日本語学校の授業見学を行う予定である。

2.学びの意義と目標

「外国人に対する日本語の教師」になるための心構えをつくり、必要な基礎知識を身につける。受講資格は、「日本語教授法講義」を履修済みであること。また、この演習の単位を取得しなければ、「日本語教育実習」の履修の資格は得られない。

準備学習(予習)

教科書『みんなの日本語』で文型分析をするが、発表担当でない課についても、事前に目を通して、何を教えるのかを考えておくこと。

準備学習(復習)

文型分析した課の語彙や文型について、復習する。導入の仕方を復習したり、授業内で扱えなかった文型についても各自で、導入方法を考えてみる。分からないことは、次の授業で質問し、疑問を無くす努力をすること。

授業計画

- 1.日本語教授法についての概説
- 2.教科書分析(1)『みんなの日本語I』
- 3.教科書分析(2)『サバイバル・ジャパニーズ』
- 4.教科書分析(3)『SFJ』
- 5.教科書分析(4)『Besy People』
- 6.文型分析(1)『みんなの日本語I』 1課・2課
- 7.文型分析(2)『みんなの日本語I』 3課・4課
- 8.文型分析(3)『みんなの日本語I』 5課・6課
- 9.文型分析(4)『みんなの日本語I』 7課・8課
- 10.文型分析(5)『みんなの日本語I』 9課・10課
- 11.文型分析(6)『みんなの日本語I』 11課・12課
- 12.文型分析(7)『みんなの日本語I』 13課
- 13.文型分析(8)『みんなの日本語I』 14課
- 14.文型分析(9)『みんなの日本語I』 15課・16課
- 15.文型分析(10)『みんなの日本語I』 17課
- 16.文型分析(11)『みんなの日本語I』 18課・19課
- 17.文型分析(12)『みんなの日本語I』 20課
- 18.文型分析(13)『みんなの日本語I』 21課
- 19.文型分析(14)『みんなの日本語I』 22課
- 20.文型分析(15)『みんなの日本語I』 23課
- 21.文型分析(16)『みんなの日本語I』 24課
- 22.文型分析(17)『みんなの日本語I』 25課
- 23.文型分析(18)『みんなの日本語I』 まとめ
- 24.文型分析(19)『みんなの日本語II』 26課
- 25.文型分析(20)『みんなの日本語II』 27課
- 26.文型分析(21)『みんなの日本語II』 28課
- 27.文型分析(22)『みんなの日本語II』 29課
- 28.文型分析(23)『みんなの日本語II』 30課
- 29.文型分析(24)『みんなの日本語II』 31課
- 30.まとめと復習

教科書

スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級I 第2版 本冊』(スリーエーネットワーク)
スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級2本冊』(スリーエーネットワーク)

評価方法

(1)期末試験:60% (2)課題と授業への参加度:20% (3)出席率:20%
期末試験50%以上の得点、出席率70%以上、かつ課題提出率100%を単位取得の条件とする。

日本語教授法講義

担当者：川口 さち子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

まず、いろいろな外国語教授法を学んだ上で、初級・中上級の指導法、4技能（聞く・話す・読む・書く）の指導法、教材の使い方などを中心に学んでいく。

（1）各種教授法を学ぶ際は、ビデオを視聴したり、受講生に模擬学生になってもらい、外国語のモデル授業を行い、それについて討論を行う。また、数名の学生を指名してレポートを書いてもらう。担当者は、授業内で発表し、その後質疑応答を行う。

（2）<期末レポート>指定したいくつかの課題の中から選び、「期末レポート」を書き、期末最後の講義時間に提出する。

2.学びの意義と目標

・日本語教員養成のための科目である。日本語教育概論をとった上で履修すること。この講義で、教授法の全体的なことを学び、日本語教授法演習へと進む。

・第2言語としての日本語を外国人に教えるとはどういうことかということを知り、実際の現場で応用できるようにする。

授業計画

1. 外国語教授法の歴史
2. オーディオリンガル・メソッドとは 1
3. オーディオリンガル・メソッドとは 2
4. トータルフィジカルレスポンスとは 1
5. トータルフィジカルレスポンスとは 2
6. サイレントウェイとは 1
7. サイレントウェイとは 2
8. ヴェルボトナル法とは
9. コミュニカティブアプローチとは 1
10. コミュニカティブアプローチとは 2
11. 教師中心の教育から学習者主体の教育へ
12. コース・デザインとニーズ分析
13. シラバス/カリキュラム・デザイン
14. 「話す」ための教室活動 1
15. 「話す」ための教室活動 2
16. 「書く」ための教室活動 1
17. 「書く」ための教室活動 2
18. 「聞く」ための教室活動
19. 「読む」ための教室活動 1
20. 「読む」ための教室活動 2
21. 初級指導法 1 文型の導入
22. 初級指導法 2 文型の導入
23. 初級指導法 3 文型の導入と作文
24. 視聴覚教材 ビデオ・DVD教材の実際 1
25. 視聴覚教材 ビデオ・DVD教材の実際 2
26. 中・上級指導法と教材 1
27. 中・上級指導法と教材 2
28. 英語話者への教育
29. 中国語話者への教育、韓国・朝鮮語話者への教育
30. まとめ・期末レポート提出

準備学習(予習)

外国語のモデル授業を行うので欠席しないこと。教授法を理解するにはこの体験が重要である。また、数名の学生を指名してレポートを書かせる。担当者は、授業内で発表し、その後質疑応答を行う。指定したページは読んでおく。

教科書

小林 ミナ 『日本語教育能力検定試験に合格するための教授法』(アルク)

準備学習(復習)

習ったことを使って教材作成をしてもらうことがある。

評価方法

(1)期末レポート:50% (2)授業内発表:20% (3)討論への参加度:10% (4)観察レポート:10% (5)出席状況:10%

日本語表現法(ディベート)

担当者：瀬能 和彦

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

【内容と目的】

アカデミック・ディベートは、現代社会の抱える様々な問題を、肯定、否定に分かれて議論することで思考力、議論力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等の向上を図る教育ゲームです。この授業では、そのアカデミック・ディベートを初歩から学んでいきます。授業はディベート及びその理論に関する講義に加え、個人及びグループでの実技・演習（試合等）が中心となりますので、受講生の積極的な参加が求められます。人と積極的に関わることの好きな人向けの授業です。

【カリキュラム上の位置づけ】

2年生から受講できます。日本語の「文章表現」能力に加えて、口頭でも論理的にやりとりをする能力（プレゼンテーション能力及び傾聴力）を磨くために設けられた講座です。

2.学びの意義と目標

アカデミック・ディベートを学ぶことで、読む・聞く・書く・話すという基礎的な日本語の4技能を効果的に伸ばし、様々な問題の解決に必要な論理的・批判的思考力を育成することがこの講座の目的です。

準備学習(予習)

授業時に指示します。

準備学習(復習)

授業時に指示します。

授業計画

1. ディベートの基礎 1
2. ディベートの基礎 2
3. ミニディベート演習 1
4. 勝敗の決定と判定の方法
5. ミニディベート演習 2
6. 論題とリサーチの方法
7. ミニディベート演習 3
8. 立論の構築
9. 反駁の方法
10. 反対尋問の方法
11. まとめの方と議論の比較
12. 政策ディベート演習 1
13. 政策ディベート演習 2
14. 政策ディベート演習 3
15. ディベート作文

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)筆記試験:40% (2)課題・演習等:60%

日本語表現法(ディベート)

担当者：瀬能 和彦

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

【内容と目的】

アカデミック・ディベートは、現代社会の抱える様々な問題を、肯定、否定に分かれて議論することで思考力、議論力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等の向上を図る教育ゲームです。この授業では、日本語表現法(ディベート)で学習したことを更に深めて学んでいきます。授業は個人及びグループでの実技・演習(試合等)が中心となりますので、受講生の積極的な参加が求められます。人と積極的に関わることの好きな人向けの授業です。

【カリキュラム上の位置づけ】

2年生から受講できます。日本語の「文章表現」能力に加えて、口頭でも論理的にやりとりをする能力(プレゼンテーション能力及び傾聴力)を磨くために設けられた講座です。

2.学びの意義と目標

アカデミック・ディベートを学ぶことで、読む・聞く・書く・話すという日本語の4技能と共に様々な問題の解決に必要な論理的・批判的思考力を高度に育成することがこの講座の目的です。

準備学習(予習)

授業時に指示します。

準備学習(復習)

授業時に指示します。

授業計画

1. コミュニケーション・ゲーム
2. ミニディベート演習 1
3. 政策ディベート分析 1
4. ミニディベート演習 2
5. 政策ディベート分析 2
6. 政策ディベート演習 1
7. 政策ディベート分析 3
8. 政策ディベート演習 2
9. 政策ディベート分析 4
10. 政策ディベート演習 3
11. 政策ディベートの社会への応用 1
12. 政策ディベート演習 4
13. 政策ディベートの社会への応用 2
14. 政策ディベート演習 5
15. 振り返りとまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)レポート:40% (2)課題・演習等:60%

日本語表現法

担当者：副田 恵

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本講義では、言語技能の基礎をより細かく学び、確実に身につけていくことを目指す。敬語の使い方や文体、語彙力など、レポートや論文の基礎となる事項を学ぶ。問題形式のテキストを使用することにより、自分の表現力の進歩を確認していく。

基礎教育入門「書き方」では、大学生生活に必要な表現力の概略を学んだ。ここでは、表現の基礎となる言語事項を確実なものとしていく。一見、学習内容が後戻りするかに見えるのは、概略から詳細へという道筋をたどるからである。

2.学びの意義と目標

ともすれば、言語技能面に無関心な態度で論文やレポートを書いてしまいがちであるが、内容面が優れていても、それを伝える技能、すなわち使用語彙や文法などが十分でなければ、優れた論文やレポートになり得ない。本講義によって、その基礎技能を確実に身に付けていくことになる。

準備学習(予習)

テキストの解説部分を読む。

準備学習(復習)

授業中に取り組んだ問題で、間違ったところやわからなかったところをもう一度やり直す。宿題となった課題にきちんと取り組む。

授業計画

1. 敬語の種類と使い分け
2. 注意すべき敬語
3. 配慮を示す言葉
4. 品詞・活用の種類
5. ら抜き言葉・レタス言葉・さ入れ言葉
6. 文のねじれと言葉の係り受け・あいまい文
7. 接続語・指示語と文章
8. 類義語・対義語
9. 動詞の自他・視点
10. 文体、話し言葉・書き言葉
11. コロケーション
12. 部首・音訓・熟語
13. 仮名遣い・送り仮名
14. 総合問題
15. 総まとめ

教科書

名古屋大学日本語研究会GK7『スキルアップ日本語力 大学生のための日本語練習帳』(東京書籍)

評価方法

(1)出席:25% (2)参加態度:25% (3)提出物:50%

出席および授業中に出された課題の取り組み姿勢と提出物により評価する。ただしA/Hレポートの提出を絶対条件とする。

日本語表現法

担当者：船山 久美, 副田 恵, 坂巻 理恵子, 中島 佐和子

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本講義では、論理的な文章の表現方法を中心に学ぶ。その学びの基礎の上に、レポートや論文の書き方の基本を身につけることを目指す。基礎教育科目「書き方」、日本語表現法(1)で学んだことを基礎として、大学生活で必要とされる、より高度な表現力を身につける。

2.学びの意義と目標

大学生活ではレポートや論文を書く機会が多い。それらを書き上げる力を身につけることは、これからの学生生活に直接大いに役立つだろう。

準備学習(予習)

テキストの解説部分を読む。

準備学習(復習)

授業中に取り組んだ問題で、間違ったところやわからなかったところをもう一度やり直す。宿題となった課題にきちんと取り組む。

授業計画

- 1.文章入門
- 2.主題を選び、材料を集める
- 3.構成を考え、アウトラインを書く
- 4.草稿(下書き)を書く
- 5.推敲する
- 6.清書する
- 7.レポートを書く
- 8.論文を書く
- 9.論説文を書く
- 10.説明文を書く
- 11.報道文を書く
- 12.エントリーシートを書く
- 13.手紙を書く
- 14.レポート作成 1
- 15.レポート作成 2

教科書

速水 博司『大学生のための文章表現入門 正しく構成し、明快に伝える手順と技術』(蒼丘書林)

評価方法

(1)出席:25% (2)参加態度:25% (3)提出物:50%
出席および授業中の課題への取り組み姿勢と提出物により評価する。

日本史概説 A

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

「日本」という国はいつ誕生したのか。おそらく諸君は「縄文時代の日本」や「日本における稲作の始まり」といった表現に、何の違和感もなく慣れ親しんできたことであろう。だが、縄文時代や弥生時代には、まだ「日本」という名の国家は存在しなかった。まずはそのあたりから、諸君の常識、既成の歴史像に、心地よい揺さぶりをかけていきたい。なお、概説 A では中世前期までの歴史を扱う。概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない。この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部社会科学教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス: 「日本」? の歴史
2. 邪馬台国連合と 王の身体
3. 継体王朝はどう位置づけられたか
4. 推古朝と天武・持統朝 古代国家を考える
5. 「託宣」と「歌謡」 奈良時代末期に歌われた皇統革命
6. 「唐風」志向と日本の政治原理
7. 浮浪人とはなにか
8. (峠で一服) 心の闇に映じたもの 頼光物『土蜘蛛草紙』を読み解く
9. 院政期社会をどうとらえるか
10. 頼朝と義仲 その分岐点はなにか
11. 義経の結婚
12. 「泰時の徳政」と人身売買法 寛喜の飢饉と鎌倉幕府
13. 中世遊女の世界 後朝の別れの物語
14. 蒙古襲来と得宗専制
15. 悪党の14世紀 中世後期世界への展望

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1) 学期末試験: 55% (2) 授業内での提出カード: 45%: 提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本史概説 B

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

概説 B では、近世以降の歴史を扱うが、わずか十数回では、もちろんすべてをカバーすることはできないし、カバーしようとする高校の授業と大差ない、駆け足のものとなりかねない。いきおいテーマは選択を余儀なくされるが、ここでは特に、時代像がイメージでき、「考える歴史」が体験できるテーマを、精選して提供していきたい。

なお、概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部の社会科教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス： 中世後期世界から近世・近代へ
2. 中世世界を破壊したのは、信長・秀吉のいずれか？
3. 家康の神格化と江戸時代の天皇
4. 赤穂事件から見た武士の 近世
5. 災害復興から見た幕政と藩政 明暦江戸大火と宝永富士山噴火
6. 田沼意次か松平定信か
7. 国芳げに良し 化政文化から天保改革期の江戸社会
8. 鯨絵は、なぜいかにして生まれたか？
9. 幕末の情報世界 風説留からみた新選組像
10. 「新聞錦絵」と欲望する近代
11. 自由民権運動と土佐出身者たち
12. 日清・日露戦争と鉄道の 近代
13. 関東大震災の影と光と
14. 治安維持法をめぐる人びと
15. 総力戦から敗戦へ 社会変容のなかの思想的強度

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)学期末試験:55% (2)授業内での提出カード:45%:提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本事情(文化)

担当者：内藤 みち

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

日常目に行っている日本の伝統的な事物を取り扱う。それら事物の「色」や用いられる「鮑」「鯛」などの持つ意味や、「節句」「土俵祭り」「凧」「障子」の由来や、「地名」「家紋」等に含まれる意味などを学ぶ。

2.学びの意義と目標

日本文化にある事物の意味や規則性学ぶことを目標とする。国内に目を向けることにより、グローバル社会の中において、日本のみならず異文化の中にもそれぞれの文化独特の規則性や意味があることを意識しコミュニケーションをはかれるようになると考える。

準備学習(予習)

各講義内容で扱う事物や、授業内容の規則性・意味を持つ事物を見つけ考察する。

準備学習(復習)

各講義内容で扱う事物や、授業内容の規則性・意味を持つ事物を見つけ考察する。

授業計画

1. 授業概要、「文化」について
2. 「色」
3. 「和紙」で作られている物(1)
4. 「和紙」で作られている物(2)
5. 「イワイ」(1)
6. 「イワイ」(2)
7. 中間試験
8. 「地名」(1)
9. 「地名」(2)
10. 「人名・家紋」
11. 「クリスマス」
12. 「正月」
13. 「和菓子」
14. 「年中行事」(1)
15. 「年中行事」(2)

教科書

武光 誠 『図解版 常識として知っておきたい日本のしきたり』(廣済堂出版)

評価方法

- (1)中間試験:35% (2)期末試験:35% (3)提出物等:10%
- (4)クラスワーク:20%

日本思想概説

担当者：清水 正之

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

日本の思想は、日本列島の上で生成し展開してきた自己意識の歴史でもあります。「哲学」という思想形式をながくたないできた日本では、思想は学問や宗教として、あるいは文芸や芸術思想という形で、続いてきました。この講義では、そうした思想表現にも目を配りながら、倫理思想を中心に、古代から近代に至る日本の思想の歴史を概観します。日本の思想は、近代以前は、大陸を経由した先進文化・思想の、近世後期以降は、欧米の先進文化・思想の受容によって始まりますが、またその「選択的な」深まりをも示しています。日本の置かれた国際的関係の意味なども、思想の歴史を考えるに、重要なポイントです。

2. 学びの意義と目標

日本の思想の通史であり、入門的かつ基礎的なものです。日本の思想を学ぶことは、自己の内に流れている意識を対象化することでもあります。思想に限らず、歴史、文学史的知識をも得ることが出来るように授業を構成します。そのようにして、日本の思想が何を問題として何を解こうとしたのかを考えてみたいと思います。思想の学習は、思想の原典テキストを読むことが基本ですが、理解を助けるためビデオ等も利用します。

準備学習(予習)

小レポートを題材に、また授業中に意見を述べてもらう機会もつくりまします。授業への積極的参加を望みます。教科書の該当する一章、配付資料を前もって読んでおくこと。

準備学習(復習)

授業で指摘したポイントに沿って、教科書、配布資料を熟読し、要点をまとめておくこと。

授業計画

1. はじめに 日本の思想を学ぶ意味 1
2. 日本の思想を学ぶ意味 2
3. 神話の思想 1
4. 神話の思想 2
5. 古代歌謡にみる古代の思想と感性
6. 仏教の受容と展開
7. 古代仏教の思想
8. 平安仏教の思想 1
9. 平安仏教の思想 2
10. 王朝の文化と感性の表現
11. 物語と中世歴史書
12. 浄土教と鎌倉仏教 1
13. 浄土教と鎌倉仏教 2
14. 室町文化と芸道思想
15. キリシタンの伝来
16. キリシタンの伝来と近世の思想
17. 東アジアと儒教・朱子学
18. 朱子学の興隆
19. 反朱子学の思想
20. 武士の思想
21. 国学の思想とその周辺 近世の思想
22. 商人・農民の思想 近世の思想
23. 蘭学・洋学 近世の思想
24. 幕末の思想
25. 幕末・明治の新宗教の思想
26. 啓蒙の思想
27. 西洋受容 キリスト教
28. 近代の思想
29. 日本の思想と今後
30. まとめ

教科書

清水正之 『日本の思想』(放送大学教育振興会)

評価方法

- (1)出席点:30%
- (2)小レポート:40%:最低三回提出のこと
- (3)期末テスト:30%

日本思想特殊講義

担当者：村松 晋

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「3.11」以降の歴史を生きる私たちにとって、自己と自己を取り巻く社会とを批判的に問い質し得る視座を構築することは喫緊の課題である。そのための具体的な手立てを探るべく、近現代日本の思想史を（宗教を含む）、時事問題等をも絡めながら、問題提起的に講義する。思想・宗教のみならず、「戦争と革命の世紀」といわれる「20世紀の歴史」に関心を有するものの受講を歓迎する。

2.学びの意義と目標

現代日本の諸課題は、近代日本の直面した問題の圏内から原理的に抜け出てはいないことについて理解を深めること。

準備学習(予習)

毎回の講義終了時に、次回講義への導入として示された問いかけと関連資料をふまえ、問題意識を育んだ上で受講すること。

準備学習(復習)

レジュメを元に当日中に復習し、疑問点は積極的に教員に質問すること。また授業中に言及した文献にはできる限り直接あたること。

授業計画

- はじめに
- 現代日本の諸問題 その1
- 現代日本の諸問題 その2
- 映像資料に学ぶ
- 問題の所在 近代 とは何か
- 100年前の精神史
- 明治末期の思想家群像 その1
- 明治末期の思想家群像 その2
- 「大正」における課題
- 第一次世界大戦の衝撃
- 映像資料に学ぶ
- 大戦後の世界 思想史的考察
- 1920年代日本の思想家群像 その1
- 1920年代日本の思想家群像 その2
- アメリカと日本
- 中国におけるナショナリズムと日本
- 満洲をめぐる言論状況
- 昭和の精神史 その1
- 昭和の精神史 その2
- ファシズムの登場
- 映像資料に学ぶ
- 日中戦争と「社会変革」
- 「大東亜戦争」という呼称
- 映像資料に学ぶ
- 敗戦と知識人 その1
- 敗戦と知識人 その2
- 宗教の現代的課題 その1
- 宗教の現代的課題 その2
- 映像資料に学ぶ
- まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:100%
期末試験によって評価する。全授業回数の三分の一以上欠席した者には期末試験の受験資格を与えない。遅刻等の扱いについては初回に説明する。

日本思想入門

担当者：村松 晋

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

先人の営んできた思想・思考の歴史には、皆さんが自己と自己をとりまく社会とを批判的に問い質し、借り物でない独自の視点を構築していくために学ぶべきことがら、数多く散りばめられている。本講義では通史的に、その主要なものを提示することで、皆さんの「常識」に創造的なゆさぶりをかけてみたいと思っている。

2.学びの意義と目標

これまでに教え込まれた「知識」を主体的に検証し、自分なりのものの見方を構築していくきっかけを手に入れること。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、「ライフデザイン」における私の推薦図書に眼を通しておくこと。

準備学習(復習)

講義後はその日のうちにレジュメを読み直し理解を深め、次回までに前講義の最後で投げかけられた問いを考えてくること。

授業計画

- 1.何を学ぶか オリエンテーション
- 2.「無文字社会」の人々とその思想
- 3.「遺物」に託された祈りの世界
- 4.「カミ」をめぐる文化誌
- 5.仏教を受け容れた人々 「罪の意識」の芽生え
- 6.「百姓」=「農民」とされた訳 差別問題を考える
- 7.「見棄てられた人々」と共に 親鸞の深さと新しさ
- 8.歴史と思想の関係 その1 「転換の時代」の意味を問う
- 9.歴史と思想の関係 その2 「弱者」の目線から
- 10.歴史と思想の関係 その3 創られた「江戸時代」イメージ
- 11.「大日本帝国」を創った思想 その1 「祝祭日」の企図
- 12.「大日本帝国」を創った思想 その2 国家と教育
- 13.君たちはどう生きるか その1 「いのち」への祈り
- 14.君たちはどう生きるか その2 現代 への眼
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:100%
期末試験によって評価する。全授業回数の三分の一以上欠席した者には期末試験の受験資格を与えない。遅刻等の扱いは初回の授業で説明する。

日本史特殊講義

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

古文書・古記録などの「史料」には、いまだ誰も論じていない未発見・未解明の事実が、それこそ無数に埋蔵されている。この講義では、「史料」を読む力を初歩から養成しながら、歴史家が歴史を再構成していくプロセスの醍醐味を、多角的に学び、体験していただくことになる。

ほぼ2回に1回の割合で、毛筆のくずし字を楽しみながら読めるようになるための、「特別演習指導」もあわせて受けることができる。

2.学びの意義と目標

既存の学びに飽き足りない諸君に向けて、「聖学院大学以外でも通用する学び」を提供していくつもりである。

準備学習(予習)

負担にならない分量の毛筆のくずし字を自宅学習することで、実力アップを目指す。

準備学習(復習)

A 4ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス: 歴史を「考える」ってそういうことだったのか!
2. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(1)
3. 戦国大名文書入門(1) 判物と印判状
4. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(2)
5. 戦国大名文書入門(2) 判物と印判状
6. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(3)
7. 戦国大名文書入門(3) 直状と奉書
8. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(4)
9. 戦国大名文書入門(4) 直状と奉書
10. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(5)
11. 戦国大名文書入門(5) 年号のない文書“書状”
12. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(6)
13. 戦国大名文書入門(6) 年号のない文書“書状”
14. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(7)
15. 前半のまとめ
16. 中間試験 + 解説
17. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(8)
18. 続・直状と奉書 古文書様式論
19. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(9)
20. 下文と下知状 古文書様式論
21. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(10)
22. 史料・研究文献を探す 古文書応用編
23. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(11)
24. ○年○月○日の事実確定 古文書応用編
25. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(12)
26. 古記録のなかの古文書逸文から 古文書応用編
27. 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(13)
28. 古文書のなかの女性 古文書応用編
29. 後半のまとめ + 特別演習指導: くずし字を読んでみよう(14)
30. 質問受付 + 学期末試験

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)高得点の試験:60% (2)低得点の試験:10% (3)授業内での提出カード:30%:提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

中間試験・学期末試験の二度の試験のうち、得点率の高い方を6、低い方を1の割合で加重して評価する。

日本史の研究(キリスト教史特論)

担当者：川崎 司

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

自らのを通して得た晴れやかな感動を少しでも心の奥に届けることで、若い皆さんがその命の内に 神 から恵まれたを発見し、未来の開拓者になっていくきっかけになればと願っている。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラムの位置づけ
キリスト教入門の科目として位置づけ、とは何か一緒に考えていきたい。

3.学びの意義と目標
私たちの先達のに想いを寄せながら、明日をより良く生きるための新たな手がかりを見だし、波高いこの世のあるべき姿について考えを深めていきたい。

準備学習(予習)

折にふれ「聖書のことば」を書きとめる習慣を身につけてもらいたい。

準備学習(復習)

毎回配布する資料を熟読して試験に備えること。

授業計画

1. 「ふし지가り～まど・みちお 百歳の詩～」
2. 「私は“愛”を信じます・高山右近」, 「初女さんのおむすび～岩木山麓・ぬくもりの食卓～」
3. 「“不幸の津波に負けないで” 100歳の詩人・柴田トヨ」
4. 「天草四郎時貞」(大島渚監督作品)
5. 「聖書を読んだサムライたちI～龍馬をめぐる五人の男たち～」
6. 「聖書を読んだサムライたちII～世界に羽ばたいた四人の男たち～」
7. 「学問と情熱・未来へ贈る人物伝 新島襄」
8. 「日野原重明100歳～いのちのメッセージ～」
9. 「血と火の生涯・山室軍平」, 「死戦を越えて～賀川豊彦物語(1)」(山田典吾監督作品)
10. 「死戦を越えて～賀川豊彦物語(2)」
11. 「塩狩峠(1)」(中村登監督作品)
12. 「塩狩峠(2)」, 「三浦綾子の足跡～むなしさの果てに～」
13. 「永遠のふるさと～唱歌・童謡から賛美歌へ～」
14. 「この子を残して(1)」(木下恵介監督作品)
15. 「この子を残して(2)」

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席状況:25% (2)毎回の小テスト:25% (3)期末試験:25% (4)研究レポート:25%

日本史の研究(近世史特論)

担当者：上安 祥子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

江戸時代に生きた、さまざまな人びとの生活感覚を垣間見ることが出来る多様な史料にふれ、江戸という時代と社会の意識や志向、社会情勢を読み解く。

まずは、史料を目にする、そして史料に接することに慣れる、ということからはじめて、調べる、読む、考える、といった手順をふんで、歴史を研究する基礎的な作業を体験し、学ぶ。

取り扱う史料は、文献だけではなく、地図や図譜などもあり、適宜、画像を映写する。また、史料を実際に手にとる機会も、設ける予定である。

なお、文献史料は、原文と読み下し文を配布プリントに併記し、読み方や意味などは、授業時間内に確認・理解できるように、授業をすすめる。

2.学びの意義と目標

史料は、なんらかの情報を発信している。その情報には、人や書物などに媒介され、運ばれるだけではなく、人と人との間で、情報に媒介され、社会的な関係をつくりあげていく、という側面がある。

そのような関係の諸相を読み解く作業を通じて、「暗記する」ものとしてではなく、思考するものとして、歴史に向き合う姿勢を身に付けることを目指している。

準備学習(予習)

今回の授業内容に関して課題を出すので、簡略に答えられるように(指名する)準備をして、授業に出席すること。

準備学習(復習)

史料の内容について、キー・ワードや大意を復習すること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 近世人の 世界 認識
3. オランダ商館に集う人びと、長崎屋に集う人びと
4. 地図を売る人びと
5. 江戸時代の旅と観光(1)
6. 江戸時代の旅と観光(2)
7. 『政談』の写本
8. 魚めづる殿様、虫めづる殿様、鳥めづる殿様
9. 偕楽園主人とは誰か - 本草学の 公共 空間
10. 御所千度参りの波紋
11. 旅する団十郎 - 天保改革の一側面(1)
12. 奮闘する江戸町奉行 - 天保改革の一側面(2)
13. 「ぶらかし」と開国
14. 1867年、パリ万国博覧会の「日本」
15. まとめと試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)カード:40%:カードは、授業内の小レポートのこと。毎授業、提出。
(2)試験:60%
出席回数が、全授業回数の3分の2に達しない場合、評価の対象外。公欠を含む場合も、欠席が全授業回数の2分の1以上になれば、評価の対象外。正当な理由がない遅刻は減点、無断退出は欠席扱いとする。

日本史の研究(近代史特論)

担当者：川崎 司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

過去は未来のためにある。知ることを学ぶことによって、私たちは誤りのないを次の世代へ送り届ける役割を担っている。歴史の傍観者であっては決してならない。自ら主体的に参加していかなければならない。本授業では、日本近代史に焦点を当て、国家を絶対的な基準とするテキストには十分に書かれていない、これまで見過ごされてきた出来事や人物にも光を当てるなど、様々な視点や視座から検証を重ね、すでに出来上がってしまった見直ししたい。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラム上の位置づけ

これまで学んできたテキストの枠を超えて、歴史の見方をより深めていく。

3.学びの目標

を創ってきた無数の人々の記憶の中に、明日をよりよく生きるための新たな手がかりを見だし、波高いこの世を乗り越えていくエネルギーとしたい。

準備学習(予習)

第1回目に授業の概要を明らかにした後、次回のテーマを伝え資料を配布するので、最後まで予習を怠りなく続けること。

準備学習(復習)

授業毎に出される復習としての「課題」に真剣に取り組み、次の授業への足がかりを築く習慣をつけること。

授業計画

1. 「洪庵のたいまつ」司馬遼太郎、「緒方洪庵・天然痘との闘い～仁術なり～」
2. 「高杉晋作～時代を変えた男の魅力～」, 「獄舎の出会いが生んだ吉田松陰の思想」
3. 「坂本龍馬の生涯」
4. 「黒鉄ヒロシが語る勝海舟」, 「津田梅子～“アラウンド20”の悩み～」
5. 「山内昌之が語る西郷隆盛と大久保利通」, 「福澤諭吉～そして文明の海原へ～」
6. 「夏目漱石～懊悩する魂～」, 「関川夏央が語る正岡子規」
7. 「夏目漱石～人間を押し出す文学～」
8. 「板垣死すとも自由は死せず～日本に国会を誕生させた不朽の名言～」
9. 「挫折した政党政治「理念なき政党の迷走」, “官僚国家”への道「帝国憲法・権力の源泉」
10. 「〔坂の上の雲〕日英同盟～友情と別離 ロシアとの開戦！」
11. 「第0次世界大戦～日露戦争・渦巻いた列強の思惑～」
12. 「恋女房おりょう 龍馬を語る」, 「子規と律～闘病7年の記録～」
13. 「〔坂の上の雲〕二〇三高地」
14. 「〔坂の上の雲〕敵艦見ゆ」
15. 「真珠湾からの帰還～軍神と捕虜第一号～」

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席状況:25%
- (2)毎回の小テスト:25%
- (3)期末試験:25%
- (4)研究レポート:25%

日本史の研究(現代史特論)

担当者：川崎 司

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容
「昭和」という時代を象徴する存在であった昭和天皇が、運命の岐路に立って何を思い何を決断したのかを記録した映像『昭和天皇の時代』（保阪正康監修）をテキストに、NHK制作の最新映像も参考にして、激動の20世紀を振り返り、歴史の真相に少しでも迫りたい。

2.学びの意義と目標

2.カリキュラム上の位置づけ
春学期の『日本史の研究(近代史特論)』と密接に繋がっているので、できれば併せて受講してもらいたい。
3.学びの意義と目標
逆境や困難にも負けず生き抜いた私達の先輩のに寄り添いながら、真実を見つめる眼を養い、この世のあるべき姿を見極め、明日への確かな歩みを進めるための糧としたい。

準備学習(予習)

毎授業に配布する資料を精読し、「課題」に真剣に取り組み、また次回の授業テーマについての予習を怠りなく続け、学期末のテスト・レポートに成長の証しを遺してほしい。

準備学習(復習)

毎回配布する資料を熟読して試験に備えること。

授業計画

- 1.「昭和天皇の時代(1)摂政宮 皇太子裕仁」
- 2.「第0次世界大戦・日露戦争～渦巻いた列強の思惑～」
- 3.「昭和天皇の時代(2)若き天皇の誕生」
- 4.「昭和天皇の時代(3)天皇 沈黙の時代」
- 5.「さかのぼり日本史・日中戦争、満州事変」,「池上彰の戦争を考える～戦争はなぜ始まり、どう終わるのか～」
- 6.「昭和天皇の時代(4)運命の決断」
- 7.「日本人はなぜ戦争へと向かったのか(1)“外交敗戦”孤立への道」
- 8.「日本人はなぜ戦争へと向かったのか(2)陸軍、暴走のメカニズム」
- 9.「日本人はなぜ戦争へと向かったのか(3)熱狂はこうして作られた」
- 10.「日本人はなぜ戦争へと向かったのか(4)開戦、リーダーたちの迷走」
- 11.「証言記録・日本人の戦争(1)アジア・民衆に包囲された戦場」
- 12.「真珠湾への7日間～日米開戦・外交官たちの苦闘と誤算～」,「証言記録・日本人の戦争(2)太平洋、絶望の戦場」
- 13.「昭和天皇の時代(5)人間天皇の出發」
- 14.「昭和天皇の時代(6)新しい国づくり」
- 15.「昭和天皇・二つの「独白録」」,「太陽The Sun」(アレクサンドル・ソクーロフ監督作品)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席状況:25% (2)毎回の小テスト:25% (3)期末試験:25%
(4)研究レポート:25%

日本史の研究(古代史特論)

担当者：稲田 奈津子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

飛鳥・奈良時代に登場し消えていった、古代の「墓誌」に注目する。現代に残されたヒントの少ない古代史を理解するためには、学問分野の枠にとらわれない多角的な見方が必要である。文字資料であると同時に考古遺物でもあり、東アジア文化圏のひろがりを実現する「墓誌」を、様々な視角から考えていく。

2.学びの意義と目標

断片的な史資料から、いかに多くの情報をひきだし、それをもとに歴史像をいかに描いていくかが、古代史研究の醍醐味である。授業では、具体的な事例をとりあげつつ進めるので、そうした思考過程を体験してほしい。また近隣諸国の事例にも触れることで、日本を相対的に理解しようとする姿勢も身につけてほしい。

準備学習(予習)

次回講義に関連するプリントを配布するので、事前に目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業は配布プリントを中心に進めるので、プリントを読みなおして復習すること。

授業計画

1. ガイダンス 歴史のなかの墓誌
2. 話題の新発見墓誌
3. 墓誌の発生 日本の墓誌(1)
4. 都の墓誌 日本の墓誌(2)
5. 地方の墓誌 日本の墓誌(3)
6. 僧の墓誌 日本の墓誌(4)
7. 墓誌の発展と終焉 日本の墓誌(5)
8. 黄泉の国との契約書 買地券
9. 墓の標識 墓碑
10. 墓誌のふるさと 中国の墓誌
11. 武寧王陵の「誌石」 朝鮮半島の墓誌
12. ブッダの墓誌? 舍利埋納と墓誌
13. お経の「墓誌」 墓誌のその後(1)
14. 大名のお墓づくり 墓誌のその後(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1) 学期末試験:60%
- (2) 提出カード:40%:毎時間提出、優秀者には加点あり

日本史の研究(中世史特論)

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

東洋史学者内藤湖南には、今日の日本を知るには、応仁の乱以後の歴史を知っていれば十分、とする著名な講演（1921年）がある。戦国時代以前の中世は近代とはまったく異質な社会であった、とするその大胆な仮説の一方、現代社会は再び中世に向かっているかのようであり、中世史ブームが再燃しつつある。本講義では、南北朝時代から戦国時代に至る、中世後期の社会を深く掘り下げていく。

2.学びの意義と目標

諸君が書店で手に取ることのできる歴史書の舞台裏、つまり史料から歴史を描き出す現場へと案内する講義である。今に遺された古文書や日記、文学作品などから歴史を研究する手続きを、初歩から学ぶことを目標とする。

準備学習(予習)

教科書はあくまで講義の出発点であり、終着点ではない。「きわめて平易で軽妙な語り口」（編集者A氏）で、毎回10頁程度と負担も少ないので、かならず事前に読んだ上で授業に臨むこと。

準備学習(復習)

A4ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス 内藤湖南の「近代」とフロイスの「中世」
2. 中世に向かう現代 あなたも君も14世紀人？
3. 妄想と打算 双面の後醍醐天皇
4. 東アジア史のなかの1349 - 50年
5. 1367年、二人の公方の死
6. ある禅僧の諦念 あまりに日本的な……作法
7. 主体なき14世紀と天皇
8. 閉塞とV字回復の15世紀
9. 足利義政と真正の飢饉
10. 都市は生きやすいか
11. 惣村は住みやすいか
12. 埋め立てられる 間隙 徳川政治の起源
13. 信長は中世を破壊したか
14. 豊臣秀吉が壊し、作り変えたもの
15. 学期末のまとめ

教科書

東島 誠 『選書日本中世史2 自由にしてケンカラン人々の世紀(講談社選書メチエ)』(講談社)

評価方法

(1)学期末のまとめ:60% (2)授業内での提出カード:40%:提出カードの優秀者には、別途加点をなう。

日本の演劇

担当者：寺田 詩麻

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本の中世・近世に誕生し発展した芸能である、能・狂言・文楽（人形浄瑠璃）・歌舞伎のなりたちと特性について、後半は歌舞伎中心となりますが、教科書と、必要に応じてプリント教材・映像資料を使いながら解説します。

2.学びの意義と目標

・日本文化学科の専門科目「文化」科目に属します。
・演劇はどのような文化においても、その文化の中で生きている人間の生活や思考を表現する方法として重要です。能・狂言・文楽・歌舞伎は何百年もの間、昔の人たちの生活や思考のありさまをよく伝える演劇として、時代に合わせて上演のしかたを変化させながら、現在もさかんに上演されています。
近年、これらの芸能は文化的な重要性を広く認められるようになり、20代から40代の役者も多く、同世代の観客を集めようと意欲的な公演を行っています。この授業が興味を持つきっかけになればと考えています。

準備学習(予習)

授業中で扱う伝統芸能の内容と歴史について、インターネットなどを用いて事前知識を得ておくこと。また、後半の歌舞伎についてはあらかじめ教科書の該当項目を読んでおくこと。

準備学習(復習)

配布するプリントや教科書を用いて学習内容を整理し、期末に提出するレポートの項目を考えておくこと。じょじょに執筆が始まればなお良い。

授業計画

1. ガイダンス
2. 中世から近世の日本と演劇 能・狂言・文楽・歌舞伎
3. 能（1） 能舞台・装置・装束・身体動作
4. 能（2） 『井筒』の内容と舞台
5. 狂言（1） 人物の描写など
6. 狂言（2） その舞台
7. 現代に生きる能・狂言 / 中世のほかの芸能
8. 文楽（1） 人形浄瑠璃の起こり
9. 文楽（2） 近松門左衛門と竹本義太夫
10. 文楽（3） 近松以降の人形浄瑠璃
11. 文楽（4） 他の芸能とのかかわり
12. 歌舞伎（1） はじまりから元禄以前
13. 歌舞伎（2） 元禄歌舞伎・和事と荒事
14. 歌舞伎（3） 大坂の歌舞伎
15. 歌舞伎（4） 江戸の歌舞伎・文化文政以前
16. 歌舞伎（5）義太夫狂言のドラマ 義経千本桜（1）
17. 歌舞伎（6）義太夫狂言のドラマ 義経千本桜（2）
18. 歌舞伎（7）江戸の歌舞伎 四代目鶴屋南北（1）
19. 歌舞伎（8）江戸の歌舞伎 四代目鶴屋南北（2）
20. 歌舞伎（9）歌舞伎十八番と歌舞伎の古典化
21. 歌舞伎（10）江戸から明治へ 河竹黙阿弥（1）
22. 歌舞伎（11）江戸から明治へ 河竹黙阿弥（2）
23. 歌舞伎（12）江戸から明治へ 黙阿弥の周辺（1）
24. 歌舞伎（13）江戸から明治へ 黙阿弥の周辺（2）
25. 歌舞伎（14）明治の歌舞伎 団菊の時代
26. 歌舞伎（15）大正から昭和の歌舞伎 団菊以後
27. 歌舞伎（16）明治から昭和初期の歌舞伎 新歌舞伎（1）
28. 歌舞伎（17）明治から昭和初期の歌舞伎 新歌舞伎（2）
29. 歌舞伎（18）昭和戦後の歌舞伎
30. 現代の歌舞伎・文楽 / まとめ

教科書

古井戸秀夫 編 『新潮日本文学アルバム 歌舞伎』（新潮社）

評価方法

- (1)小レポート:30%:出席カードに毎回感想・疑問などを記す
- (2)小テスト:20%:重要キーワードの確認。半期のうち4～5回予定
- (3)レポート:50%:期末に提出。9つの題目の内任意の3つを選択この授業は春学期2時限連続授業を予定しています。間で休み時間は充分取りますが、よく考えて選択してください。

日本の音楽 A

担当者：鈴木 英一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

指導要領に和楽器が導入され、メディアに津軽三味線などの若き邦楽ミュージシャンが取り上げられ、現在は小さな邦楽ブームといえる状態にある。これは日本音楽が「見直された」結果であろうか、あるいは若者たちが耳慣れない音楽を新たに「発見」した状況なのであるか。それとも伝統音楽の変質か。日本音楽の存在価値を見極めてみたい。

「A」では主に近世以前の音楽を中心に扱い、各ジャンルについて随時補足する。

2.学びの意義と目標

まず重層的な日本の伝統音楽を紹介する。雅楽・能楽・浄瑠璃・近世三味線音楽・洋楽流入...現代音楽まで、各時代の代表的な音楽が今なおライブで聞くことができるのが日本文化の特異性である。これらを実際に鑑賞し、それぞれのジャンルの特殊性と音楽としての普遍性を検証することを目標とする。さらに講師は邦楽演奏家でもあるので、授業の中で実際に和楽器や歌唱を体験させることも考えており、今まで培ってきた音楽観を問い直してもらいたいと思う。

準備学習(予習)

予告する音楽について問題意識を持っておくこと。

準備学習(復習)

学習した音楽について、自分の好きなジャンルとの相違を認識してもらいたい。

授業計画

1. 貴族の歌謡
2. 庶民の歌謡
3. 宗教的な歌謡
4. 劇歌謡
5. セリフ術としての歌謡
6. 洋楽の影響を受けた歌謡
7. 津軽三味線I
8. 津軽三味線II
9. 和太鼓I
10. 和太鼓II
11. 歌舞伎音楽I
12. 歌舞伎音楽II
13. 西洋音楽との融合
14. 現代に生きる伝統音楽I
15. 現代に生きる伝統音楽II

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末レポ - ト:70% (2)平常点:20% (3)出席:10%

日本の音楽 B

担当者：鈴木 英一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

指導要領に和楽器が導入され、メディアに津軽三味線の若き邦楽ミュージシャンが取り上げられ、現在は小さな邦楽ブームといえる状態にある。これは日本音楽が「見直された」結果であろうか、あるいは若者たちが耳慣れない音楽を新たに「発見」した状況なのであるか。それとも伝統音楽の変質か。日本音楽の存在価値を見極めてみたい。

「B」では近世以降の劇場音楽を中心に扱う。

2.学びの意義と目標

重層的な日本の伝統音楽を紹介する。雅楽・能楽・近世三味線音楽・洋楽流入...現代音楽まで、各時代の代表的な音楽が、いまなおライブで聞くことができるのが日本文化の特異性である。これらを実際に鑑賞し、それぞれのジャンルの特殊性と、音楽としての普遍性を検証することを主な目標とする。さらに講師は邦楽の演奏家でもあるので、授業の中で実際に和楽器や歌唱を体験させることも考えており、今まで培ってきた音楽観を問い直してもらいたいと思う。

準備学習(予習)

とにかく数多くの伝統音楽を試聴しておいてください。

準備学習(復習)

学習した音楽を理論化してみてください。

授業計画

1. 雅楽
2. 能・狂言
3. 人形浄瑠璃
4. 歌舞伎
5. 雑藝
6. 近代演劇
7. 津軽三味線I
8. 津軽三味線II
9. 和太鼓I
10. 和太鼓II
11. 歌舞伎下座音楽I
12. 歌舞伎下座音楽II
13. 西洋音楽との融合
14. 伝統音楽の再生I
15. 伝統音楽の再生II

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)レポ - ト:70% (2)平常点:20% (3)出席:10%

日本の思想(キリスト教)

担当者：村松 晋

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

キリスト教をめぐって繰り広げられた、思想・宗教史上の数あるドラマについて多角的な視点から考察を加えることにより、「キリスト教」ならびに「日本史」へのイメージを刷新し、その実像に迫る手立てを獲得してもらおう。さらに「3.11」以後の歴史を生きる皆さんが、生きることの意味を主体的に考えていけるような授業を心がけていく。

2.学びの意義と目標

日本の歴史・思想・宗教、特に近代日本の思想史・文学史を視ていくための新しい視点を獲得し、上記領域への関心を深めていくこと。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、「ライフデザイン」の私の推薦図書に眼を通しておくこと。

準備学習(復習)

講義後はその日のうちにレジュメを読み直し理解を深め、次回までに前講義の最後で投げかけられた問いを考えてくること。

授業計画

- 1.何を学ぶか オリエンテーション
- 2.「キリスト教史」を問い直す
- 3.ザビエル以前のこと
- 4.ザビエルは、なぜ日本に来たか
- 5.ザビエルは、日本で何をしたか
- 6.ザビエルたちの言動は、なぜ人びとのところをつかんだか
- 7.ザビエルの日本伝道は、世界に何をもたらしたか
- 8.ザビエルの意外な「遺産」
- 9.近代日本のキリスト教を問い直す
- 10.明治のキリスト者 その1 その出自と内面世界
- 11.明治のキリスト者 その2 「世代交代」を促したもの
- 12.明治のキリスト者 その3 100年前の日本のすがた
- 13.近代日本のキリスト教の課題
- 14.現代日本とキリスト教 キリスト教からの問い
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:100%
期末試験によって評価する。全授業数の三分の一以上欠席した者には期末試験の受験資格を与えない。遅刻等の扱いについては初回に説明する。

日本の思想(儒教)

担当者：上安 祥子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

日本の近世という時代、公共性への志向 という思潮が立ち現れてくる。経済や政治を論じる言説として、積極的に現実の社会とかかわりをもっていた儒教は、その思潮を構成する、主なものの一つに数えられる。

日本の思想家たちが、いかなることを問題として見出し、それを解決するために、いかなることを、儒教の概念や理論を用いていかに表現したのか、という分析視角を設定して、その思潮をたどっていく。

2.学びの意義と目標

現代社会がどう変わり、またどう変えていくことができるのか、それを過去に学ぶことができるテーマとして、公共性 を取り上げている。

したがって、近世という過去の時代における 公共性 観念の形成を理解するだけでなく、未来に向けた 公共性 構築という、現代的な課題としてとらえ直し、ひとりひとりが、その課題に向き合うきっかけを得ることを目指している。

また、直面する問題の解決方法が模索され、選択される思想形成の経緯をたどることを通じて、論理的思考力を鍛えていくことも、重要な目標である。

準備学習(予習)

* 授業の冒頭で、前回の授業のカード内容を紹介し、論点を整理するので、配布したプリントやノートを見直したうえで、授業に出席すること。

* 配布プリントに、“予習”というコーナーを設け、たとえば調べておくべき用語などを指示するので、それらの課題に取り組み、答えを出しておくこと。

準備学習(復習)

配布プリントにある、“今回のPOINT&復習”のコーナーの、空欄補充をしておくこと。

授業計画

1. ガイダンス - 意図を読む
2. 「乱」とは何か
3. 「共に善に落ちたるところ」
4. 「私情」から「至情」へ
5. 徂徠学のかがやき？ - 丸山眞男氏の学説をめぐって(1)
6. 「めんめんこう」に悩む
7. なぜ「道」はつくられるのか
8. なぜ「道」は開かれるのか
9. 時代をこえる悩み
10. 「公理」という約束
11. 朱子学 “朱子学” - 丸山眞男氏の学説をめぐって(2)
12. 「偕楽」と「共楽」
13. 「国家を謀る」
14. 試される『新論』
15. まとめと試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)カード:40%:カードは授業内の小レポートのこと。毎授業、提出。
(2)試験:60%
出席回数、全授業回数の3分の2に達しない場合、評価の対象外。公欠を含む場合も、欠席が全授業回数の2分の1以上になれば、評価の対象外。正当な理由がない遅刻は減点、無断退出は欠席扱いとする。

日本の思想(仏教)

担当者：高山 秀嗣

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義では、日本の歴史上における仏教の推移過程についてさまざまな角度から検討を行っていく。日本仏教史の流れを概観することで、仏教を取り巻く周辺状況である日本の思想や文化などについても視野を広げて学びを深めていくことを目的とする。基本は講義形式を取るが、授業への参加も適宜求めていく。

2.学びの意義と目標

日本仏教史を通史的に概観することにより、日本仏教が社会のさまざまな分野と関わりながら展開してきたことを具体的に学んでいく。また授業に積極的に取り組むことにより、調べ学習や発表の練習などにもなる。

準備学習(予習)

教科書は授業開始までに通読しておきたい。各回の内容はあらかじめ提示するので、予習を行った上で授業に臨むこと。また、講義・討論などにも積極的に取り組みたい。

準備学習(復習)

教科書および配布プリントの内容は、レポートと深くかかわる。精読の必要がある。

授業計画

1. 日本仏教史概観
2. 仏教伝来
3. 聖徳太子
4. 奈良仏教
5. 平安仏教・1
6. 平安仏教・2
7. 鎌倉仏教・1
8. 鎌倉仏教・2
9. 鎌倉仏教・3
10. 室町仏教
11. 近世仏教
12. 近代仏教
13. 現代仏教
14. 現代の宗教状況
15. 講義のまとめ

教科書

廣澤隆之 『図説あらすじでわかる 日本の仏教とお経』(青春出版社)

評価方法

(1)レポート:50% (2)出席:30% (3)授業への取り組み:20%

日本の美術

担当者：佐伯 英里子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

授業のねらいと概要

日本美術の大きな流れは、他の文化領域と同様、常に外来の刺激を受け(近代以前は主に中国、以降は西欧諸国)その摂取消化を繰り返してきた。しかしそこには常に独自の日本的受容の姿勢、日本的な嗜好の選択が働いていたといえよう。本講義では、そうした外来と和との融合相克のなかで、一貫して変わらず続いてきた日本美術の実態を明らかにすることを目標に、絵画史を中心に概観する。

2.学びの意義と目標

日本美術に関する基礎的知識を習得するとともに、美術作品を単に感覚的に受け止めることから一歩進んで、表現の背後にある意味を読み解き、より深く鑑賞することにより、現在の問題意識ともリンクさせて考える力を養うことができるようになる。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、該当する箇所の教科書部分に目を通しておく。

準備学習(復習)

授業内のスライドやビデオ及び配付資料を参考としながら、授業内容のポイントを整理し、まとめる。

授業計画

1. 授業概要と参考文献紹介
2. 縄文と弥生
3. 奈良時代の美術 1
4. 奈良時代の美術 2
5. 奈良時代の美術 3
6. 平安時代の美術 1
7. 平安時代の美術 2
8. 平安時代の美術 3
9. 鎌倉時代の美術 1
10. 鎌倉時代の美術 2
11. 鎌倉時代の美術 3
12. 室町時代の美術 1
13. 室町時代の美術 2
14. 室町時代の美術 3
15. 総括
16. 安土桃山時代の美術 1
17. 安土桃山時代の美術 2
18. 江戸時代の美術 1
19. 江戸時代の美術 2
20. 江戸時代の美術 3
21. 江戸時代の美術 4
22. 近代の美術 1
23. 近代の美術 2
24. 近代の美術 3
25. 現代の美術 1
26. 現代の美術 2
27. 現代の美術 3
28. 日本美術の可能性
29. 総括
30. 試験とその解説

教科書

辻 惟雄, 泉 武夫 『日本美術史ハンドブック』(新書館)

評価方法

(1)小レポート:40% (2)試験:40% (3)授業態度:20%:出席状況と学習意欲

日本のポップ・カルチャー

担当者：清水 均

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「文化」は私たちにとって何らかの価値や意味があるとされる。特に、私たちの日々の営みと地続きの地平に存在するポップ・カルチャーは、意識的にも無意識的にも私たちの生活様式や生活感情そのものに価値や意味をもたらすものであるといえ、私たちは嫌でもポップ・カルチャーの影響下にあるといえる。この授業ではそうした視点に立って、2000年代（0年代）を中心とした想像力、表現力の有り様を検証することを通じて、私たちの現在地を確認してみたい。

2.学びの意義と目標

昨今、日本のポップ・カルチャーは「クール・ジャパン」として海外からも注目されているが、その実態を批評的に検証することで、学生個々の生の現場というものを確認してもらいたい。

準備学習(予習)

- ・ 授業ノートの作成（用語集作成等）を毎授業後に記述することを求める。2～3回程度提出してもらう。
- ・ 授業用配布プリントの熟読。

準備学習(復習)

授業ノートの作成。授業で扱うコンテンツに対する自身の見解と授業の説明をまとめ、ノートに記述する。2～3回程度提出してもらう。

授業計画

1. 授業ガイダンス及び導入（現代日本の時代の分岐点解説）
2. : 高度経済成長の終焉前後(1)キャッチコピー
3. : 高度経済成長の終焉前後(2)マンガ表現
4. : 高度経済成長の終焉前後(3)ウルトラマンの問題
5. : 高度経済成長の終焉前後(4)大衆音楽
6. : 高度経済成長の終焉前後(5)テレビドラマと映画表現
7. : 高度経済成長の終焉前後(6)ウォークマンの意義
8. : 高度経済成長の終焉前後(7)村上春樹の変容
9. : 高度経済成長の終焉前後(8)現代文学とここまでのまとめ
10. : 0年代の想像力へ(1)社会学からみた90年代以降
11. : 0年代の想像力へ(2)大衆音楽の変容
12. : 0年代の想像力へ(3)新世紀エヴァンゲリオンの問題
13. : 0年代の想像力へ(4)デス・ノートの問題
14. : 0年代の想像力へ(5)下妻物語の問題
15. : 0年代の想像力へ(6)下妻物語の問題
16. : 0年代の想像力へ(7)けいおん!!と涼宮ハルヒの問題
17. : 0年代の想像力へ(8)クレヨンしんちゃんの問題
18. : 0年代の想像力へ(9)昭和ノスタルジーと人生リセット願望
19. : 0年代の想像力へ(10)サマーウォーズの問題
20. : 0年代の想像力へ(11)ラストフレンズの問題
21. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(1) 学生の見解を共有する
22. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(1) 学生の見解を共有する
23. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(1) 学生の見解を共有する
24. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(2) 村上春樹「1Q84」を中心に
25. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(2) 村上春樹「1Q84」を中心に
26. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(2) 村上春樹「1Q84」を中心に
27. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(3)魔法少女まどか マギカ
28. : 現代ポップ・カルチャーの可能性(3)魔法少女まどか マギカ
29. : 現代ポップカルチャーの可能性(4)平成仮面ライダー
30. : 現代ポップカルチャーの可能性(5) 共同体と共生の課題

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)最終レポート:30% (3)小課題:10% (4)授業ノート:10%

日本の民俗

担当者：及川 高

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

民俗Folkloreとはごく普通の人々が生活のなかで特に意識することもなく営んでいる「あたりまえ」の文化のことである。こうした文化は我々の感覚や感性に深く根ざしていることから、つねに目の前にありながら見えにくく、それでいて強い影響力を具えている。そのような民俗をよくよくみてゆくと、そこには歴史的背景や意外な合理性がひそんでいることに気づかされる。本講義は日本を中心にその民俗文化に関する基本的知識を学ぶことを目的としている。

講義は前半（第3～20回）までは日本村落の基本的な成り立ちを理解することを趣旨とする。これはこれまで民俗文化が村落社会のフィールドワークをつうじて研究されてきたという学史的背景に基づいている。内容としては社会（第3～8回）、信仰（第9～14回）、生業（第15～20回）を大枠とし、こうした諸々の民俗文化が相互に関わり合いながら、いかに人々の生活をつくりだしてきたのかということ講義する。次いで後半（第21～30回）では、都市民俗学や芸能、口承文芸、比較民俗学といったテーマを各論的に論じ、日本の民俗文化を民衆史や文化史、東アジア史などと関わらせつつ理解していく。

最後に、本講義の受講にあたっての評価は出席点とレポートを勘案してつける。

2. 学びの意義と目標

国際化の流れのなかで異なる文化的背景をもつ人々と交流をもつ機会はますます増えている。本講義が全体として目的とするのは、日本人の「あたりまえ」を客観的に見直すための知識を学ぶことで、これからの国際社会で生きていく学生に、自ら文化摩擦を乗り越えていく力を身につけさせることにある。

一般に「文化摩擦」という問題は芸術のようなハイカルチャーの領域ではなく、生活習慣や生理的な好悪が関わってくる生活文化の領域で顕著に発生する。たとえばテーブルマナーや人との距離の取り方、挨拶の方法やお金の貸し借りのルールなどが挙げられるだろう。言わば文化摩擦とは「頭で考える」以上に「肌で感じる」問題なのである。こうした文化摩擦を乗り越えていくためには、自分が「あたりまえだ」と思っていたことを見つめ直し、日常生活の中のルールや作法をひとつの文化として、客観的に理解することが必要となる。こうした理解の手助けをすることが本講義の第一の目的である。

本講義の第二の目的は、学生諸君が今後世界で活躍する中で求められる「生活」という視点を身につけることである。世界の人々はそれぞれの場所で自らの「生活」を営んでいるのであり、そうした「生活」に馴染まない開発支援やビジネスは、善悪やコストに関わらず受け入れられにくい。このとき問題はそうした現地の「あたりまえ」の「生活」をどのように理解し、それらに身を寄せていくかということであり、本講義はそのための一助となることを目的としている。

準備学習(予習)

事前学習は特に要求しない。まずはインターネット等の情報で充分なので、民俗学という学問についての簡単なイメージを得ておくことと理解がすすみやすい。

準備学習(復習)

講義ごとに資料を配付するため、まずはこれを紛失しないようにA4版のファイルを用意しておくこと。本講義で扱う個々のトピックは、生活というレベルで相互に深く関わっているため、講義が進むにつれて、民俗の奥深さが見えてくるようになってくることと思う。また講義ごとに推奨文献を紹介するため、個々の関心に沿ってそれらを読み進めると理解が深まる。

授業計画

- ガイダンス 講義の目的とすすめ方
- 民俗と民俗学
- 社会 ムラとイエ (1)
- 社会 ムラとイエ (2)
- 婚姻 男・女・一族 (1)
- 婚姻 男・女・一族 (2)
- 人生 生まれる・育つ・老いる・死ぬ (1)
- 人生 生まれる・育つ・老いる・死ぬ (2)
- 祭祀 神・先祖・死霊 (1)
- 祭祀 神・先祖・死霊 (2)
- 災い 祟る・呪う・占う・祓う (1)
- 災い 祟る・呪う・占う・祓う (2)
- 人が神になるとき 霊威と権力 (1)
- 人が神になるとき 霊威と権力 (2)
- 日本の自然と食生活 (1)
- 日本の自然と食生活 (2)
- 山で暮らす人々 (1) 焼畑・狩り・ろくろ
- 山で暮らす人々 (2) 焼畑・狩り・ろくろ
- 海で暮らす人々 (1) 漁撈・捕鯨・魚売り
- 海で暮らす人々 (2) 漁撈・捕鯨・魚売り
- 非日常の経験 祭り・巡礼・災害 (1)
- 非日常の経験 祭り・巡礼・災害 (2)
- 町場と異人 商人・職人・芸能者 (1)
- 町場と異人 商人・職人・芸能者 (2)
- 口承の世界 由緒・神話・都市伝説 (1)
- 口承の世界 由緒・神話・都市伝説 (2)
- 民俗文化のひろがり 北・南・アジア (1)
- 民俗文化のひろがり 北・南・アジア (2)
- 伝承 伝える・忘れる・乗り越える (1)
- 伝承 伝える・忘れる・乗り越える (2)

教科書

プリントを配布する

評価方法

- 出席点:30%:2コマ連続の講義のため、両方に出席すること
- レポート:70%:2000～3000字程度のレポートの提出を求める

日本文化概論

担当者：清水 均

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「日本文化」を学ぶことについての導入講座である。日本文化学科では「語学・文学系統」「歴史・思想系統」「文化論・比較文化系統」の三つの柱を立て、「日本文化研究」へのアプローチ方法の目安を示唆しているが、本講座においては、この三つの柱を枠組みとし、それぞれの系統の専任の教員によるオムニバス形式の授業を展開する中で、「日本文化」に関する基礎的な学びをしてもらうこととなる。

2.学びの意義と目標

4年間にわたる本学日本文化学科での学びの基礎であり、その後の各自の具体的な研究目標を見定めるきっかけを掴んでほしい。その後の方向性に変更、修正がなされることに何ら問題はないが、「日本文化」を捉える上での広い視野を確保する姿勢を身につけてほしい。

準備学習(予習)

翌週の授業に関する配布資料を熟読し、疑問点を予め整理しておく。

準備学習(復習)

毎回の授業内容のまとめをノートに記述し、3回行う「まとめ」の授業の際に行う作業に向けての備えをしておく。

授業計画

1. ガイダンス・導入
2. 語学・文学(1)
3. 語学・文学(2)
4. 語学・文学(3)
5. まとめ
6. 歴史・思想(1)
7. 歴史・思想(2)
8. 歴史・思想(3)
9. 歴史・思想(4)
10. 歴史・思想(5)
11. まとめ
12. 文化論・比較文化(1)
13. 文化論・比較文化(2)
14. 文化論・比較文化(3)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)まとめ:50%

日本文学概説

担当者：黒木 章

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本近代文学入門。輪切り近代文学史。1868年の明治維新以来の日本近代の作品をおおよそ10年ごとに輪切りにしてその年々に発表された小説類を読んで、作品の時代背景や作家自身の課題を重ねながら講読し、日本近代文学史の大枠をつかめるようにする。
読みたいと思っていても大学入学以前には時間がなくて読めなかったような小説類は多いと思う。それらをとにかく読んでみよう、作品の内部にはどんな問題があるのか、なぜ話題にされるべき作品なのかなどを理解する。

2.学びの意義と目標

よく話題にされてきたものでありながら、未だ読んだことがないような代表的で有名な作品を読んで、文学する楽しみや読みの醍醐味を味わう。作品によって駆け足になったり精読になったりするが、小説読みの技術や方法を身につける。中高の国語教員免許取得を希望する人には選択必修科目である。

準備学習(予習)

- ・各時間のポイントや用語などを記して配布する印刷物に書き込み等をして自分の講義ノートを作り、予復習に役立てる。
- ・扱う作品類は事前に読了し、課題をもって参加しなければならない。

準備学習(復習)

フィードバックペーパーと質疑応答で復習と予習を確認しながら授業を進める。

授業計画

1. 導入。扱う作品の簡単な解説と問題点の提示。授業展開法の確認等
2. 福沢諭吉『学問のすすめ』（1871）読解
3. 同 上
4. スコット著坪内逍遙訳『春風情話』（1880）読解
5. 同 上
6. 森鷗外『舞姫』（1890）読解
7. 同 上
8. 同 上
9. 小試験
10. 泉鏡花『高野聖』（1900）読解
11. 同 上
12. 同 上
13. 谷崎潤一郎『青刺』（1910）読解
14. 同 上
15. 同 上
16. 武者小路実篤『友情』（1919）読解
17. 同 上
18. 同 上
19. 小試験
20. 予備 2回の小試験講評と今後の勉強法について
21. 太宰治『走れメロス』（1940）読解太
22. 同 上
23. 同 上
24. 大岡昇平『野火』（1950）読解
25. 同 上
26. 同 上
27. 大江健三郎『孤独な青年の休暇』（1960）読解
28. 同 上
29. 同 上
30. 定期試験

教科書

授業の中で指示する
進行状況を見ながらその都度もっとも安価な文庫本を指示する。入手困難な『春風情話』と『孤独な青年の休暇』は印刷物で配布する。

評価方法

- (1)授業参加態度:30%:フィードバックペーパーと質疑応答
(2)2回の小試験:30%:2回（各15%）(3)期末試験:40%

日本文学研究と批評(近現代)

担当者：佐藤 ゆかり

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本の近現代の著名な作家による名作短篇・中篇小説を採り上げ、学生の発表を中心に、講義とディスカッション、映像との比較等を交えて進める。

なお、履修者人数によっては、採り上げる作品を変更する場合もある。

2.学びの意義と目標

日本の近現代文学作品の解釈と鑑賞を通して、作家、作品、時代背景、同時代評、表現技法、文学史的背景、先行論文等も含めた基本的、総合的な研究方法を学ぶ。

目標は、(1)近現代文学の精読と、基本的、総合的な研究方法の習得、(2)自分の意見を、根拠をもって論述すること、(3)卒業論文の執筆に役立つ基礎的な近現代文学の知識の習得、である。

精読し、調査し、レジメにまとめ、発表するという流れは、情報収集、読み解き、探索、発信という、日常にも役立つと思われる。

準備学習(予習)

授業中採り上げる作品は必ず読んで、自分の意見をまとめてくること。

準備学習(復習)

授業内で採り上げた小説について、読んでくること。レジメを見直し、自分の意見をまとめること。

授業計画

- 1.近現代文学を読むとは？ 1
- 2.資料を使う
- 3.横光利一『春は馬車に乗って』 1
- 4.同 2
- 5.同 3
- 6.芥川龍之介『魔術』 1
- 7.同 2 映像とディスカッション
- 8.国木田独步『春の鳥』 1
- 9.同 2
- 10.同 3 まとめとディスカッション
- 11.有島武郎『小さき者へ』 1
- 12.同 2
- 13.同 3 まとめとディスカッション
- 14.川端康成『伊豆の踊子』 1
- 15.同 2
- 16.同 3
- 17.同 4 まとめとディスカッション
- 18.同 5 映像と文学
- 19.宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』 1
- 20.同 2
- 21.同 3 まとめとディスカッション
- 22.同 4 映像と文学
- 23.中島敦『山月記』 1
- 24.同 2
- 25.同 3 まとめとディスカッション
- 26.吉本ばなな『キッチン』 1
- 27.同 2
- 28.同 3 まとめとディスカッション
- 29.同 4 映像と文学
- 30.総まとめとディスカッション

教科書

プリントを配布する
プリントはなくさないように。

評価方法

(1)レポート:50% (2)発表:30% (3)平常点:20%
出席が3分の2以下の者は単位を認定しない。

日本文学研究と批評(近現代)

担当者：前田 潤

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

芥川龍之介を中心とする大正・昭和期の「短編小説」を主な考察対象としながら、「文学」にアプローチする多様な視点や方法論(文学理論)に触れると共に、資料の探し方+使い方、立論に至るまでの正しい手続きなど、近現代文学研究の基礎を学ぶ。各テキストの成立過程の検証を通じて、文学作品がどのような文化・社会的条件のもとで、どのような歴史的限界を背負って誕生するのかをつぶさに検討する。

文学研究・文化研究の基礎を学ぶ講座である。

この講義では、近現代の文学テキストを精読し、先行する他者の見解を整理した上で、意識的に自己の意見形成をはかる訓練をしてもらいたいと考えている。意見を「作り」、わかりやすく「伝達する」ことを前提として、テキストを丁寧に「読む」講座である。

2.学びの意義と目標

短編小説を精読し、文学テキストへの多様なアプローチの仕方学ぶことを通じて、学生が自らの主題と方法とを模索する契機としたい。

準備学習(予習)

対象となる幾つかの文学テキストについては、講義前に読了しておく必要がある。プリントで配布するものもある。初回授業で指示するため、初回授業には必ず出席のこと。

準備学習(復習)

とにかくテキストを読み返すこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 明治期の青年と「修学旅行」(1)(芥川龍之介)
3. 明治期の青年と「修学旅行」(2)(芥川龍之介)
4. 明治期の青年と「修学旅行」(3)(芥川龍之介)
5. 小説言説の中の「夢」(1)(芥川龍之介)
6. 小説言説の中の「夢」(2)(芥川龍之介)
7. 大正期雑誌の人気獲得戦略(1)(芥川・菊池寛)
8. 大正期雑誌の人気獲得戦略(2)(芥川・菊池寛)
9. 「小説」を成立させる技術をめぐる(1)(芥川龍之介)
10. 「小説」を成立させる技術をめぐる(2)(梶井基次郎)
11. 「小説」を成立させる技術をめぐる(3)(三浦哲郎)
12. 「小説」を成立させる技術をめぐる(4)(三浦哲郎)
13. 「小説」を成立させる技術をめぐる(5)(筒井康隆)
14. 「小説」を成立させる技術をめぐる(6)(筒井康隆)
15. 「小説」を成立させる技術をめぐる(7)(筒井康隆)
16. 「小説」を成立させる技術をめぐる(8)(村上春樹)
17. 「小説」を成立させる技術をめぐる(9)(村上春樹)
18. 「小説」を成立させる技術をめぐる(10)(村上春樹)
19. 「死」の暗号は解読できるのか?(1)(芥川龍之介)
20. 「死」の暗号は解読できるのか?(2)(芥川龍之介)
21. 比喩と象徴(1)(村上春樹)
22. 比喩と象徴(2)(村上春樹)
23. 戦争を見る目(1)(開高健)
24. 戦争を見る目(2)(開高健)
25. ベトナム戦争と小説(1)(開高健)
26. ベトナム戦争と小説(2)(開高健)
27. 戦時報道と小説(1)
28. 戦時報道と小説(2)
29. 写真と小説(1)
30. 写真と小説(2)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席・受講姿勢:50% (2)最終試験:50%

担当者：高桑 佳與子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

歌物語の代表作として広く知られる『伊勢物語』を講読していきます。授業では、作品の大きな魅力である主人公、色好みの貴公子・在原業平の人間像をつかんでいきます。また、業平の生きた時代背景や風俗習慣も確認していきます。

二条の後や伊勢の齋宮との許されない恋や、惟喬親王等との交流の中で詠まれた心打つ和歌の数々。『伊勢物語』は、それら業平の歌にまつわる話に、業平以外の人々の歌にまつわる物語も取り込みつつ、全体として業平の「みやびの世界」が形成されていることを学んでいきます。作品中の和歌の重要性に注目して、口語訳・解釈は詳細に考察していきます。

2.学びの意義と目標

同時代成立の和歌集『古今集』との関連等を考察しながら、「歌物語」としての作品の性格を明らかにしていきます。また、教職を目指す学生の古典対応力の増強も目標としています。

『伊勢物語』は『源氏物語』をはじめ、後世の文学作品にも影響を及ぼし、絵画の題材にもなっています。日本文化に受け継がれたものとの関係、発展を考える上で重要な作品です。その意味で、在原業平という人物、また歌物語の形成や、平安朝の美意識への理解を深めること意義深いことです。

準備学習(予習)

辞書を引いて自分の口語訳をしてみる。物語のクライマックスを形成する和歌の訳は、ぜひ参考書を見ないでチャレンジしてほしい。

準備学習(復習)

授業ノートをつくり、内容をまとめていくこと。授業で提示した資料等を調べ、ノートのまとめに加えるとよい。

授業計画

1. 作品概説 伊勢物語誕生の背景
2. " 色好み在原業平
3. 冒頭章段 1段
4. " 2段
5. 業平と二条の後関係章段 3段
6. " 4段
7. " 5段
8. " 6段
9. " まとめ
10. 東下り関係章段 7段
11. " 8段
12. " 9段
13. " 9段
14. " まとめ
15. 東国物語 10段
16. 今までの復習:和歌の技巧について
17. 伊勢齋宮関係章段 69段
18. " 70段
19. " 71段
20. " 72段 まとめ
21. 筒井筒の章段 23段
22. "
23. 筒井筒と他作品の比較 古今集
24. " 大和物語
25. " まとめ
26. 歌物語について
27. 惟喬親王関係章段 82段
28. "
29. "
30. まとめ 125段

教科書

石田 穰二 『伊勢物語 付現代語訳 (角川ソフィア文庫 (SP5))』 (角川学芸出版)

評価方法

(1)授業時提出物:40% (2)授業時発表:10% (3)期末試験:50%

担当者：上宇都ゆりほ

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本を代表する文学作品のひとつである『源氏物語』を原文で読んでみよう。光源氏をめぐる女性たちのすがたをいきいきと感ずることによって、平安時代の貴族の恋愛観や人生の苦悩に迫りたい。また『源氏物語』とはどのような作品か、各巻から抽出したエピソードを語る物語の一部を原文で読み解き、本作品の魅力に迫りたい。今年は学生参加のスタイルで授業を進めるので、初回の授業には必ず出席してほしい。

2.学びの意義と目標

2年生以上が選択できる文学系統の科目である。本講座では、古典作品の解釈・研究のために、辞書を片手に自力で古典作品を読解し、さらに作品の背景に広がる世界を調査研究する方法を身につける。自らの興味に従って、自由な視点から作品の背景を調べ、時代背景を学び、王朝貴族の生き方や価値観などを調べる力を養うことが目標である。

準備学習(予習)

参加型の授業であるから、担当者は十分に準備をして授業に臨むこと。自分の担当する箇所はもちろんのことであるが、他の発表者が担当する箇所についても、教科書を読んで予習すること。他のものもあらかじめ音読して予習し、古文に慣れ親しむこと。

準備学習(復習)

発表者の発表形式や内容について、自分の発表に取り入れるべき点を復習すること。

授業計画

1. 「源氏物語」概説と発表順番の決定、図書館にて調べ方の説明
2. 巻第一「桐壺」－光源氏の母と継母
3. 巻第五「若紫」－藤壺の恋と若宮の誕生
4. 巻第七「紅葉賀」－禁断の恋と若宮の誕生
5. 巻第九「葵」－車争いと生き霊
6. 巻第十二「須磨」－都から須磨へ
7. 愛と罪をめぐる世界の文学(1)－「オペラ座の怪人」より「ファントム」(1)
8. 愛と罪をめぐる世界の文学(1)－「オペラ座の怪人」より「ファントム」(2)
9. 巻第十八「松風」－明石の君の姫君
10. 巻第十九「薄雲」(1)－藤壺の女因の崩御
11. 巻第十九「薄雲」(2)－秘密の暴露
12. 巻第二十「朝顔」－紫の上の苦惱
13. 巻第二十一「乙女」－源氏の教育観
14. 巻第二十二「玉鬘」－紫の上に過去を告白
15. 巻第二十五「蛸」－文学論
16. 巻第二十八「野分」－夕霧の邪恋
17. 巻第三十一「真木柱」－夫に香炉を投げつける妻
18. 巻第三十二「梅が枝」－源氏の結婚観
19. 巻第三十三「藤裏葉」－夕霧と雲居の雁との結婚
20. 巻第三十四「若菜上」－女三の宮を垣間見た柏木
21. 巻第三十五「若菜下」－柏木の恋文を発見
22. 愛と罪をめぐる世界の文学(2)－トルストイ「復活」(1)
23. 愛と罪をめぐる世界の文学(2)－トルストイ「復活」(2)
24. 巻第三十六「柏木」－薫の君の誕生
25. 巻第三十七「横笛」－柏木の霊現る
26. 巻第四十「御法」－紫の上の死
27. 巻第四十二「匂兵部卿」－薫・匂宮の芳香
28. 巻第四十五「橋姫」－亡き柏木の秘文を読む
29. 巻第四十九「宿木」－浮舟を垣間見る薫
30. 巻第五十四「夢浮橋」－出家した浮舟

教科書

角川書店『源氏物語(角川ソフィア文庫 ビギナーズ・クラシックス)』(角川書店)

評価方法

(1)レポート:60% (2)発表内容:40%

日本文学特殊講義

担当者：家永 香織

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

和歌を抜きにして、日本文学を語ることはできない。しかし和歌は難しくわかりにくい、とっつきにくい、と思われがちである。そこで本講義では、和歌単体ではなく、散文（物語・日記・説話など普通の文章）に取り込まれた和歌を取り上げ、和歌が散文の中でどのように機能しているか、という観点で、和歌を読み解いていきたい。平安～鎌倉時代の物語・日記・説話・歌集など11作品を取り上げるので、多様な作品を読む楽しみも感じてもらえると思う。様々な作品を読みながら、和歌のおもしろさを味わって欲しい。

2.学びの意義と目標

たった一首の和歌があることによって、物語の主人公の性格が明らかになったり、場面が劇的に盛り上がったりすることもある。また、一首の和歌に基づいて、物語や説話が生まれることもある。物語・日記・説話の中で、和歌がどのような役割を果たしているかを読み解くことを目標とする。

準備学習(予習)

作品の概要を文学辞典などで確認しておく。図書館1階にある『日本古典文学大辞典』（岩波書店）や『日本古典文学大事典』（明治書院）などを活用して欲しい。

準備学習(復習)

ノートの見直しと整理をする。ノートを見直す過程で疑問点が見つかったら、次の授業の際に質問して欲しい。

授業計画

1. 古典和歌の基礎知識
2. 物語と和歌 - 『虫めづる姫君』(1)
3. 物語と和歌 - 『虫めづる姫君』(2)
4. 物語と和歌 - 『虫めづる姫君』(3)
5. 物語と和歌 - 『虫めづる姫君』(4)
6. 物語と和歌 - 『はいずみ』(1)
7. 物語と和歌 - 『はいずみ』(2)
8. 物語と和歌 - 『はいずみ』(3)
9. 物語と和歌 - 『はいずみ』(4)
10. 物語と和歌 - 『艶詞』(1)
11. 物語と和歌 - 『艶詞』(2)
12. 物語と和歌 - 『艶詞』(3)
13. 物語と和歌 - 『艶詞』(4)
14. 軍記と和歌 - 『平家物語』(1)
15. 軍記と和歌 - 『平家物語』(2)
16. 日記と和歌 - 『蜻蛉日記』(1)
17. 日記と和歌 - 『蜻蛉日記』(2)
18. 日記と和歌 - 『更級日記』(1)
19. 日記と和歌 - 『更級日記』(2)
20. 日記と和歌 - 『讃岐典侍日記』(1)
21. 日記と和歌 - 『讃岐典侍日記』(2)
22. 歌論書 - 『俊頼髓脳』(1)
23. 様々な形態の和歌 - 『源順集』
24. 歌論書 - 『俊頼髓脳』(2)
25. 説話と和歌 - 『今昔物語集』(1)
26. 説話と和歌 - 『今昔物語集』(2)
27. 説話と和歌 - 『今昔物語集』(3)
28. 説話と和歌 - 『今物語』(1)
29. 説話と和歌 - 『今物語』(2)
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末テスト:60% (2)平常点:40%

日本文学特殊講義

担当者：前田 潤

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

天災の発生が、同時代の社会・文学にどのような影響を与えてきたのかについて、多角的に考察する。「東日本大震災」の余波から議論を始め、「関東大震災」および「阪神淡路大震災」の発生が、小説を「書く」ことや「読む」こと、また、新聞雑誌に連載中の小説や各種刊行物にどのような影響を与えたのかをつぶさに検討する。同時に、多くの文学作品の中絶・変貌・誕生と深く関わる、震災直下のメディア状況や、罹災社会の混乱を考察する。「例外状況」と「文学」ソフトという観点から、戦争と文学との関わりについても言及する。なお、授業では映像資料を活用する。

専門領域への知を深化させてゆく契機となる講座である。

小説の言葉が、現実とどのように関わりながら編成されてゆくのかを知ると共に、震災被害の実態や社会・文化への影響、復興の問題点などについても学んでゆく。

2.学びの意義と目標

地震と文学との距離をめぐって思考することを通じて、「出来事」の重みに触れると共に、「出来事」が「構成」されるものでもあることをも知って欲しい。

準備学習(予習)

授業で扱う全ての文学テキストを読む必要は無いが、村上春樹の「震災」小説など、時間をかけて取り上げる2～3篇の作品については読してもらいたい。また、班分けをして班ごとに報告してもらおう場合もある。

準備学習(復習)

毎回の講義内容の整理と、紹介したテキストに触れることが重要。

授業計画

1. ガイダンス
2. 「東日本大震災」への視点(1) 「被災」の周辺から
3. 「東日本大震災」への視点(2) 初期報道の問題点
4. 「東日本大震災」への視点(3) 文化領域への蚕食
5. 「東日本大震災」への視点(4) 被災と「モラル」をめぐって
6. 天災と「共同体」をめぐる思考(1)
7. 天災と「共同体」をめぐる思考(2)
8. 予告された「震災」の記憶 高嶋哲夫「TUNAMI」
9. 震災発生と情報停滞(阪神淡路大震災)
10. 報道と「震災」の輪郭(阪神淡路大震災)
11. 復興と作家のボランティア実践(1)(田中康夫)
12. 復興と作家のボランティア実践(2)(田中康夫)
13. 震災とコミック
14. 「暴力」としての「震災」(1)(村上春樹)
15. 「暴力」としての「震災」(2)(村上春樹)
16. 震災直後の社会心理と救済(1)(宮本輝)
17. 震災直後の社会心理と救済(2)(宮本輝)
18. 災害ユートピア(1)(9・11)
19. 災害ユートピア(2)(ハリケーンカトリーナ)
20. 「例外」状況における文学表象 岡真理の思考
21. 「例外」状況における文学表象 アウシュビッツ
22. 震災と戦争(1)(小田実)
23. 震災と戦争(2)(小田実)
24. 物語的機縁としての「震災」(1)(東野圭吾)
25. 物語的機縁としての「震災」(2)(東野圭吾)
26. 震災直下の大正期メディア(1)(関東大震災)
27. 震災直下の大正期メディア(2)(関東大震災)
28. 震災の視覚像(竹久夢二)
29. 大正期婦人雑誌の変貌(菊池寛)
30. 震災モラトリアムと小説言説(村上浪六)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席・受講姿勢:50% (2)最終試験:50%

日本文学の中のキリスト教A

担当者：佐藤 ゆかり

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

講義形式で、キリスト教の影響を受けた作家、芥川龍之介、太宰治、正宗白鳥の小説を採り上げ、キリスト教との関わりについて学ぶ。
なお、採り上げる作品は、一部変更する場合もある。

2.学びの意義と目標

日本の近現代文学における「文学とキリスト教」、さらに「文学と宗教」というテーマについて理解を深める。目標は、(1)近現代文学の精読と、基本的、総合的な研究方法の習得、(2)近現代文学に見られる、作家とキリスト教との関わり方に対する知識の習得、(3)日本におけるキリスト教の受容の問題についての基礎的知識の習得、である。日本の作家がキリスト教をどのように受容したのかは、その時代の、その作家だけの問題ではなく、現在の一人一人の問題でもある。その意味で、複数の作家の関わりを知ることは、いろいろなケースを知ることであり、視野を広げることにつながると考える。

準備学習(予習)

授業中採り上げる作品は必ず読んで、自分の意見をまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業内で採り上げた小説について、読んでくること。

授業計画

1. 近現代文学とキリスト教
2. 太宰治『駈込み訴へ』 1
3. 同 2
4. 芥川龍之介『奉教人の死』 1
5. 同 2
6. 芥川龍之介『きりしとほろ上人伝』 1
7. 同 2
8. 芥川龍之介『神神の微笑』 1
9. 同 2
10. 芥川龍之介『おぎん』 1
11. 同 2
12. 正宗白鳥『何処へ』より 1
13. 同 2
14. 同 3
15. 日本文学とキリスト教のこれから

教科書

プリントを配布する
プリントはなくさないように。

評価方法

(1)レポート:70% (2)平常点:30%
出席が3分の2以下の者は単位を認定しない。

日本文学の中のキリスト教 B

担当者：佐藤 ゆかり

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

講義形式で、クリスチャン作家（カトリック）遠藤周作の長編小説『沈黙』を全編精読し、文学とキリスト教の関わり、遠藤の提示した日本におけるキリスト教の受容の問題について考える。

2. 学びの意義と目標

日本の近現代文学における「文学とキリスト教」、さらに「文学と宗教」というテーマについて理解を深める。目標は、（1）近現代文学の精読と基本的、総合的な研究方法の習得、（2）近現代文学に見られる、作家とキリスト教の関わり方に対する知識の習得、（3）日本におけるキリスト教の受容の問題についての基礎的知識の習得、である。日本の作家がキリスト教をどのように受容したのかは、その時代の、その作家だけの問題ではなく、現在の一人一人の問題でもある。その意味で、遠藤周作が提起した課題を、作品を通して考えることは、思考をさらに深めることにつながると考える。

準備学習(予習)

授業中採り上げる作品は必ず読んで、自分の意見をまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業内で採り上げた部分を再読し、自分の意見をまとめておくこと。

授業計画

1. キリスト教と近現代文学 遠藤周作の場合
2. まえがき
3. セバスチャン・ロドリゴの書簡
4. 同
5. 同
6. 同
7. 外の陽差しはあかるいの...
8. 空が翳り、雲がゆっくりと...
9. 二度目に筑後守と...
10. こうして毎日がすぎた。
11. 翌日、ふたたび...
12. この年の夏は、雨が少なかった。...
13. 元日には長崎の街では...
14. 切支丹屋敷役人日記
15. 『沈黙』総まとめ

教科書

遠藤周作 『沈黙』(新潮社)

評価方法

(1)レポート:70% (2)平常点:30%
出席が3分の2以下の者は単位を認定しない。

日本文化総論 A

担当者：清水 正之

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「日本の宗教的心性とキリスト教－カミ・ほとけ・神」という主題で、伝統的な宗教観をとらえるとともに、それとキリスト教（キリシタンおよび近代日本のキリスト教）との関連を考えてみる授業とします。

日本の思想史をふりかえると、もともとあった神道的世界（これも外来のものとも深く関係しているというみかたもありますが）のうえに、仏教、あるいは儒教をとり入れ、さらに西洋伝来のキリスト教を受容してきました。今わたしたちは、宗教的なものが、またあらためて別の形で重要な意味をもった世界と日本の現実に接しています。現代にいけるわたしたちの宗教的なものとの関わりは、近代以前の社会とは大きく異なりますが、同時にこの社会の宗教的な伝統と決して無縁ではありません。生活の一部にくみこまれ、すでに宗教的なものとして必ずしも自覚しているわけではありませんが、そのような伝統的な宗教観を、一度あらためて対象化し、知的に吟味、あるいは学問的に吟味することは、日本文化を知り、自らの問題として考える重要な意義があるでしょう。

2.学びの意義と目標

キリシタン・キリスト教と日本の伝来の宗教意識との接触、受容という問題をひとつの軸に、自らの依拠する宗教性・霊性をふりかえ、深めることをめざします。

準備学習(予習)

暮らしや身近な事柄の中から宗教的なものを感じ取り、新たな気づきができるよう意欲的な参加を望む。配布資料を事前によく読み、授業で指示したポイントつき次までに考えをまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業で指示したポイントにつき、配付資料を熟読して、要点をまとめる。

授業計画

- 1.はじめに ー授業の目的と進め方
- 2.カミをめぐる思想史 神道的世界(1)
- 3.カミをめぐる思想史 神道的世界(2)
- 4.ほとけの伝来と思想史(1) 仏教と神道
- 5.ほとけの伝来と思想史(2) 仏教の展開
- 6.儒教における宗教の位置と超越観 (1)
- 7.儒教における宗教の位置と超越観 (2)
- 8.キリシタンの思想(1) キリスト教と日本の出会い
- 9.キリシタンの思想(2) キリスト教と日本の出会い
- 10.キリシタンの思想(3) キリスト教と日本の出会い
- 11.徳川時代の宗教政策 諸宗教の対応
- 12.幕末・明治の新宗教
- 13.キリスト教とのあらたな接触 明治のキリスト教
- 14.近代日本の宗教と社会 宗教政策と宗教
- 15.現代日本と宗教

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)小レポート:30% (3)期末レポート:40%

日本文化特殊講義

担当者：清水 均

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私たちの身のまわりにある「文化」に対してどのようにアプローチできるのかを学ぶ。具体的には、
1、私たちのまわりにある文化テキスト（作品）を読むこと
文学テキスト（愛の表現）の読み
サブカルチャーテキストの読み
2、現代文化の諸問題について考えること
を通して考察を進めることになる。
尚、扱うテキスト（作品）名については授業時に指示する。

2.学びの意義と目標

文字通り「文化」を研究対象とすることで、私たちが今どのような世界に生きているのかを検証することを目的とし、かつ、そうした現状認識を通じて今後の文化創造、世界創造に私たちがどのように関わっていけるのかということの可能性を模索する。更には、「文化」を学ぶことを通じて、これからの世界を主体的に形成する役割を担う学生諸君には、大学という学びの場で「今を生きる」ための教養と知恵と生きる活力を身に付けてもらいたい。

準備学習(予習)

・ 授業ノートの作成（用語集作成等）を毎授業後に記述することを求める。2～3回程度提出してもらう
・ 授業用配布プリントの熟読。

準備学習(復習)

授業ノートの作成。授業で扱うコンテンツ（作品）に対する自身の見解と授業の説明をまとめ、ノートに記述する。2～3回程度提出してもらう。

授業計画

1. ガイダンス・導入（以下具体的なテキスト名については未決定）
2. 、文学テキストを読む(1)夏目漱石「ころ」
3. 、文学テキストを読む(1)夏目漱石「ころ」
4. 、文学テキストを読む(1)夏目漱石「ころ」
5. 、文学テキストを読む(2)高村光太郎「智恵子抄」
6. 、文学テキストを読む(2)高村光太郎「智恵子抄」
7. 、文学テキストを読む(2)高村光太郎「智恵子抄」
8. 、文学テキストを読む(3)谷崎潤一郎「痴人の愛」
9. 、文学テキストを読む(3)谷崎潤一郎「痴人の愛」
10. 、文学テキストを読む(4)角田光代「八日目の蝉」
11. 、文学テキストを読む(4)角田光代「八日目の蝉」
12. 、文学テキストを読む(5)親子の愛を歌った詩を比較する
13. 、文学テキストを読む(6)恋愛を歌った詩を比較する
14. 、文学テキストを読む(7)現代文学が描く「若者」
15. 、文学テキストを読む(7)現代文学が描く「若者」
16. 、サブカルチャーを読む(1)マンガ表現の読み方
17. 、サブカルチャーを読む(1)マンガ表現の読み方
18. 、サブカルチャーを読む(1)マンガ表現の読み方
19. 、サブカルチャーを読む(1)マンガ表現の読み方
20. 、サブカルチャーを読む(2)映像表現と文字表現
21. 、サブカルチャーを読む(2)映像表現と文字表現
22. 、サブカルチャーを読む(2)映像表現と文字表現
23. 、サブカルチャーを読む(2)映像表現と文字表現
24. 、サブカルチャーを読む(3)ディズニーアニメの問題点
25. 、現代文化の諸問題(1)現代文化の分岐点
26. 、現代文化の諸問題(2)「日本文化論」の問題点
27. 、現代文化の諸問題(3)2次（n次）創作とAKB48
28. 、現代文化の諸問題(4)都市の誕生
29. 、現代文化の諸問題(5)その他
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)最終レポート:30% (3)小課題:10% (4)授業ノート:10%

日本文化入門

担当者：寺田 詩麻

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の芸能のなかでもユニークな位置を占める日本の古典芸能、とくに能・狂言・文楽（人形浄瑠璃）・歌舞伎を中心にとりあげます。
・演じられているありさま（芸態）を見てそれぞれの違いの区別がつくこと
・よく上演されるいくつかの作品の内容を、映像資料を見ながら理解することを目標とします。

2.学びの意義と目標

・日本文化学科の基礎科目群の1つ。1・2年での習得を原則とします。それ以上の学年でも受講することができます。
・グローバル化する社会の中で必要なのは英語力だけではなく、英語を話すその人の教養だろうと思われれます。内外にわたる仕事をしている日本人が、日本文化について問われて答えられないことが多いと聞きます。また将来的に大学で日本文化を専攻したと自己紹介する場合、伝統芸能について問われることがあるでしょう。そうした時のためにこの科目が、あなたが伝統芸能について考える手助けになればよいと思います。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う芸能の大まかな歴史や上演内容を、インターネットなどを活用して事前に調べておくに役に立つはずで。

準備学習(復習)

授業で使用する映像資料はあくまで観劇の代用です。メモを取りながら見て下さい。毎回配布するプリントを各自利用しながら、授業中に見せる映像の内容を自分なりに整理してまとめておくといいと思います。

授業計画

1. ガイダンス
2. 日本の文学史と芸能史
3. 日本の伝統芸能 雅楽
4. 日本の伝統芸能 能
5. 日本の伝統芸能 能周辺の民俗芸能
6. 日本の伝統芸能 狂言（1）
7. 日本の伝統芸能 狂言（2）
8. 日本の伝統芸能 文楽（1）
9. 日本の伝統芸能 文楽（2）
10. 日本の伝統芸能 文楽（3）
11. 日本の伝統芸能 歌舞伎（1）
12. 日本の伝統芸能 歌舞伎（2）
13. 日本の伝統芸能 歌舞伎（3）
14. 日本の伝統芸能 落語・講談など
15. 全体のまとめ・試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)小レポート:40%:出席カードに授業の感想・疑問などを毎回記す
- (2)試験:60%:期末の小論文試験

比較宗教学

担当者：芦名 裕子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容
宗教学は1870年頃、マックス・ミュラーによって提唱された新しい学問である。しかし、神学など、経典研究を中心とする学問の歴史はすでに確立していた。

そこで、まず、宗教学の基礎を講義し、世界の宗教を比較宗教学の視点から学んでいく。さらに、アジアの宗教にも焦点を置き、比較考察する。また、私たち日本人の宗教観を世界の諸宗教と比較しながら、再考察し、身近な信仰についても考えてみよう。
イスラム教・ヒンズー教・道教など世界の宗教を調査から裏づけられた概説をする。

パチカンの内部に迫るDVDによる授業（1回）

2.カリキュラムの位置づけ

宗教学の基礎を学ぶ。宗教への興味を喚起する。

2.学びの意義と目標

宗教学の基礎を学び、諸宗教の経典や内容を修得し、グローバルな視野を獲得する。

日本人の宗教を考え、身近な信仰についてもそのルーツ等を探る。

準備学習(予習)

1回2コマの欠席は大きいので、欠席しないように体調等を整える。

準備学習(復習)

講義で暗記するように指示された項目をきちんと暗記する。講義で紹介した著作を図書館で確認する。

授業計画

1. プロローグ(可能な限り出席のこと)
2. 比較宗教学とは何か
3. 宗教学の基礎
4. 宗教学の方法
5. キリスト教概説
6. キリスト教(カトリック)
7. ユダヤ教と日本
8. ユダヤ教概説
9. イスラム教
10. 仏教概説
11. チベット仏教
12. ヒンズー教
13. 中国宗教(道教1)
14. 道教2 儒教
15. 中国仏教
16. アメリカの宗教
17. アメリカ新宗教(1)
18. アメリカ新宗教(2)
19. 日本仏教
20. アジアの宗教
21. 日本人の信仰(七福神など)
22. キーワード学習
23. プロテスタント神学
24. レポートの書き方等の説明
25. 日本古代宗教(1)
26. 日本古代宗教(2)
27. ヨーロッパの宗教 DVD使用
28. 日本の新宗教
29. 基礎知識テスト
30. レポートテスト

教科書

芦名裕子 『楽しい宗教学』(三恵社)

評価方法

(1)基礎テスト:50% (2)レポート:40% (3)出席点:10%:20回分までを計算

比較文化概論

担当者：菊池 有希

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本授業では、比較文学・比較文化という学問領域に関連するさまざまな具体的事例を紹介しながら、「比較」という方法論の理解の定着を図ってゆく。

2.学びの意義と目標

文化と文化のあいだに生起する事象について思考するための武器を手に入れることが、本授業の学びの意義であり目標である。

準備学習(予習)

事前にプリントなどを配布した場合、目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 「比較文学」の諸問題(1)
3. 「比較文学」の諸問題(2)
4. 「影響・受容」の諸問題(1)
5. 「影響・受容」の諸問題(2)
6. 「影響・受容」の諸問題(1)
7. 「クロスジャンル」の諸問題(1)
8. 「クロスジャンル」の諸問題(2)
9. 「クロスジャンル」の諸問題(3)
10. 「異文化への視線」の諸問題(1)
11. 「異文化への視線」の諸問題(2)
12. 「異文化への視線」の諸問題(3)
13. 「ジャポニスム」の諸問題(1)
14. 「ジャポニスム」の諸問題(2)
15. 「ジャポニスム」の諸問題(3)
16. 「オリエンタリズム」の諸問題(1)
17. 「オリエンタリズム」の諸問題(2)
18. 「オリエンタリズム」の諸問題(3)
19. 「日本論」の諸問題(1)
20. 「日本論」の諸問題(2)
21. 「日本論」の諸問題(3)
22. 「ポストコロニアル批評」の諸問題(1)
23. 「ポストコロニアル批評」の諸問題(2)
24. 「ポストコロニアル批評」の諸問題(3)
25. 「トランスレーション・スタディーズ」の諸問題(1)
26. 「トランスレーション・スタディーズ」の諸問題(2)
27. 「トランスレーション・スタディーズ」の諸問題(3)
28. 総括(1)
29. 総括(2)
30. 期末試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:50% (2)小レポート:50%

比較文化特殊講義

担当者：濱田 寛

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

九世紀の日本における「漢詩」と「和歌」の位相を比較文学・比較文化の視点から探る。

2.学びの意義と目標

九世紀の日本は、文化史的には「国風文化」への過渡期の世紀である。本講義では「漢詩」と「和歌」の位相に注目して、『古今和歌集』成立前後の文学史的・文化史的な理解を目標とする。

準備学習(予習)

教場およびMoodleにて指示

準備学習(復習)

教場およびMoodleにて指示

授業計画

1. ガイダンス
2. 中国文芸理論と詩学
3. 中国文芸理論と詩学
4. 中国文芸理論と詩学
5. 中国文芸理論と詩学
6. 中国文芸理論と詩学
7. 中国文芸理論書と日本への将来
8. 中国文芸理論書と日本への将来
9. 中国文芸理論書と日本への将来
10. 中国文芸理論書と日本への将来
11. 中国文芸理論書と日本への将来
12. 『歌経標式』歌病説
13. 『歌経標式』歌病説
14. 『歌経標式』歌病説
15. 『句題和歌』を巡る問題点
16. 『句題和歌』を巡る問題点
17. 『句題和歌』を巡る問題点
18. 『句題和歌』を巡る問題点
19. 『新撰万葉集』を巡る問題点
20. 『新撰万葉集』を巡る問題点
21. 『新撰万葉集』を巡る問題点
22. 『新撰万葉集』を巡る問題点
23. 『千載佳句』を巡る問題点
24. 『千載佳句』を巡る問題点
25. 『千載佳句』を巡る問題点
26. 日本漢詩の展開
27. 日本漢詩の展開
28. 『古今和歌集』の歌論
29. 『古今和歌集』の歌論
30. 学期末試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)予習・復習:30%:Moodleを運用 (2)積極性:20%
(3)学期末試験:50%
受講生は定期的にMoodleにアクセスすること

比較文化特殊講義

担当者：菊池 有希

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本授業では、幕末・維新时期から敗戦までの我が国の知識人の西洋体験の意味について考察してゆく。

2.学びの意義と目標

近代日本の知識人は、それぞれの時代状況において、それぞれのやり方で「西洋」を「発見」し、「日本」を「発見」してきた。彼らのその知的な営みから、近代以降の日本が内包する諸問題について、一定の理解を得ることを目標とする。

準備学習(予習)

事前にプリントなどを配布した場合、目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 福澤諭吉の西洋体験 (1)
3. 福澤諭吉の西洋体験 (2)
4. 福澤諭吉の西洋体験 (3)
5. 福澤諭吉の西洋体験 (4)
6. 久米邦武の西洋体験 (1)
7. 久米邦武の西洋体験 (2)
8. 久米邦武の西洋体験 (3)
9. 久米邦武の西洋体験 (4)
10. 森鷗外の西洋体験 (1)
11. 森鷗外の西洋体験 (2)
12. 森鷗外の西洋体験 (3)
13. 森鷗外の西洋体験 (4)
14. 夏目漱石の西洋体験 (1)
15. 夏目漱石の西洋体験 (2)
16. 夏目漱石の西洋体験 (3)
17. 夏目漱石の西洋体験 (4)
18. 永井荷風の西洋体験 (1)
19. 永井荷風の西洋体験 (2)
20. 永井荷風の西洋体験 (3)
21. 永井荷風の西洋体験 (4)
22. 島崎藤村の西洋体験 (1)
23. 島崎藤村の西洋体験 (2)
24. 島崎藤村の西洋体験 (3)
25. 島崎藤村の西洋体験 (4)
26. 横光利一の西洋体験 (1)
27. 横光利一の西洋体験 (2)
28. 横光利一の西洋体験 (3)
29. 横光利一の西洋体験 (4)
30. 試験及びその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:50% (2)小レポート:50%

文化交流史(欧米と日本)

担当者：黒木 章

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

最初の文部大臣森有礼の思想と行動を通じて日本の近代化の問題を考える。
森有礼は、幕末に秘密留学生として英国に渡り、文明の根底にある「人間の問題」を探求する必要があることに気づく。そして明治維新の際帰国した後、米国小弁務使、清国大使、英国大使になったが、この間彼の一貫する関心は「国民教育」の問題である。明治期の教育行政の担い手となった彼の言動にどのような問題があったのかを検証する。

2.学びの意義と目標

夏目漱石が講演「現代日本の開化」で言ったように、日本の近代化は黒船来航に象徴される欧米列強との出会いによって始まったといえる。森有礼の幕末秘密留学に係る僅か数年の体験は彼の思想形成とその後の生き方に重要な意味を持ち、そのことが憲法発布の当日の朝暗殺される事態に深く関わるようである。
ここでは特に明治初期の国民教育の問題を巡ってあらわになる日本人の持つ可能性と挫折を考えることになる。このことは現代の我々の課題を逆照射することを意図してている。

準備学習(予習)

・ほぼ毎回資料や授業の問題点を記した印刷物を配布して展開し、受講生はそれに書き込みをして自分の講義ノートを作るだけでなく、予復習に役立ててもらう。

準備学習(復習)

・ほぼ毎回配布・回収するフィードバックペーパーによって予復習の状態をみる。例えば授業中に紹介する参考書や文献を読んでいるかどうか等授業参加態度の評価にする。

授業計画

1. 導入。森有礼を問題にする意図の説明と彼の生涯の概説
2. 黒船来航と日本の内外の事情
3. 同 上
4. 同 上
5. 馬関戦争と薩英戦争
6. 同 上
7. 秘密留学の事情と意図
8. 同 上
9. 英米での学び
10. 同 上
11. 同 上
12. 帰国とアメリカ小弁務使時代
13. 同 上
14. 同 上
15. 帰国と『明六雑誌』
16. 「妻妾論」と結婚をめぐる問題
17. 同 上
18. 清国公使と英国公使時代
19. 自由民権運動・静岡事件をめぐる問題
20. 同 上
21. 同 上
22. 国民教育をめぐる問題
23. 同 上
24. 同 上
25. 同 上
26. 同 上
27. 暗殺とその後の国民教育の展開
28. 同 上
29. 同 上
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する
・ほぼ毎回配布する印刷物によって展開する。

評価方法

- (1)授業参加態度:30%:フィードバックペーパーと質疑応答
- (2)小レポート:30%:学期途中で1回課す
- (3)期末レポート:40%:定期試験に替わるもの

文化人類学

担当者：中空 萌

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

文化人類学と聞くと、世界中の民族の風変わりな慣習（そしてそれらは一見現代日本に住む私たちとは何の関係もなさそうです）を寄せ集めるだけの、マニアックな分野と思われるかもしれませんが。しかし実際のところ、そのような「異文化」を対象として人類学者が取り組んできたのは、自分たちとは異なる考え方や行動様式の持ち主をいかに理解するのかという、グローバル化した現代社会にとっても重要な課題だったりします。自分とは異なる共同体に属する「他者」をフェアに理解するためには、自分自身の何気ない振る舞いや思考を距離を置いて眺める訓練をし、自分の文化にとっての常識が必ずしも全ての人にとっての常識ではないということを知る必要があります。自分の文化にとっての当たり前を相対化することなしには、他の人々にとっての当たりの前提を受け入れることなどできないからです。この講義では、文化人類学における基本的な文化理解の方法と理論の解説、そして性、食、家族、交換といった日常的な（それでいて人間にとって普遍的な）トピックについての「異文化」と「自文化」の比較を通して、文化人類学を貫くこうした知的態度について学んでいきます。さらに講義の後半には、開発、人権といった文化間の接触が問題となる現代的な課題についても扱い、どのようにしたら多文化間の理解と対話の可能性が拓けるのか、文化人類学の立場から考えてみたいと思います。

2.学びの意義と目標

日常的な場面においても「異文化との接触」が増加している現代日本社会において、他者との共生、共存が大事だとよく言われます。宗教や文化を異にする人々が互いの違いを認め合いながら共に生きる、というのは素晴らしいことではあるけれど、同時にとても難しいことでもあります。自分とは異なる思考や行動様式の持ち主に接したときに、「文化が違うから到底理解することなどできない」と理解を放棄するのではなく、また「違いは表面的なものに過ぎず、同じ人間だから根底ではつながっているはずだ」と理想主義に走るのでもなく、まず相手がどのように世界を見ているのかを冷静に観察・理解した上で、自分と何が違って何が同じなのかを見極め、対話のための手がかりを得る現実的な態度こそが重要になります。自社会とは遠く離れた場所に暮らす人々の文化に魅了され、彼らのことをよく知ろうと試行錯誤を繰り返してきた文化人類学者が醸成した理論や方法には、こうした態度を得るためのヒントが多く隠されています。その一部について知ること、グローバル化した社会でどう生きるのかを考える契機を得てほしいと思います。

準備学習(予習)

事前に次回のプリントを配布した場合には、それに目を通し、自分の身近な事例を使って考えを深めてくること。

準備学習(復習)

各回の授業で配布するプリントを再読し、また学期末のレポートのための文献を読み進めておくこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 文化人類学的なものの見方とは
3. フィールドワークと民族誌（1）
4. フィールドワークと民族誌（2）
5. 文化人類学の歴史（1）
6. 文化人類学の歴史（2）
7. 自然と文化（1）
8. 自然と文化（2）
9. 性差：男らしさと女らしさ（1）
10. 性差：男らしさと女らしさ（2）
11. 親族関係：「家族」とは何か（1）
12. 親族関係：「家族」とは何か（2）
13. 交換：市場交換と贈与交換（1）
14. 交換：市場交換と贈与交換（2）
15. 医療：「病」とは何か（1）
16. 医療：「病」とは何か（2）
17. 「人間」の概念：「個人」のなりたち（1）
18. 「人間」の概念：「個人」のなりたち（2）
19. 法と慣習（1）
20. 法と慣習（2）
21. 儀礼と宗教（1）
22. 儀礼と宗教（2）
23. 開発と文化（1）
24. 開発と文化（2）
25. エスノサイエンスと西洋科学（1）
26. エスノサイエンスと西洋科学（2）
27. 文化相対主義と人権（1）
28. 文化相対主義と人権（2）
29. これまでのまとめ
30. レポートの書き方

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席点:30%
- (2)授業後のリアクションペーパー:30%
- (3)学期末のレポート:40%

文化とグローバリゼーション

担当者：菊池 有希

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本授業では、グローバリゼーションを「15世紀以降に本格化した、西洋を主導とする地球規模のヒト・モノ・カネの動き」と広義に捉えつつ、そのようなグローバリゼーションの動きと日本及び日本文化との関わりはいかなるものであったのか、という問題について、西洋人の日本に対する眼差しのありようを手掛かりに、考察を試みてゆく。

2.学びの意義と目標

我が国においてグローバリゼーションは単純な肯定的文脈で語られることが多いようだが、グローバリゼーションが文化理解においてなかなか厄介な問題をはらむものだということを理解してもらうことが、本授業の目標の一つである。

準備学習(予習)

事前にプリントなどを配布した場合、目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業中に指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 外から見た 鎖国日本 (1)
3. 外から見た 鎖国日本 (2)
4. 外から見た 鎖国日本 (3)
5. ラフカディオ・ハーンの 内から見た日本 (1)
6. ラフカディオ・ハーンの 内から見た日本 (2)
7. ラフカディオ・ハーンの 内から見た日本 (3)
8. ジャポニズム (1)
9. ジャポニズム (2)
10. ジャポニズム (3)
11. 世界文学 としての『源氏物語』 (1)
12. 世界文学 としての『源氏物語』 (2)
13. 世界文学 としての『源氏物語』 (3)
14. 二つの 日本文化私観 (1)
15. 二つの 日本文化私観 (2)
16. 二つの 日本文化私観 (3)
17. 菊と刀 の波紋 (1)
18. 菊と刀 の波紋 (2)
19. 菊と刀 の波紋 (3)
20. ひよわな花 と ナンバーワン のあいだ (1)
21. ひよわな花 と ナンバーワン のあいだ (2)
22. ひよわな花 と ナンバーワン のあいだ (3)
23. テキストとしての日本 の快樂 (1)
24. テキストとしての日本 の快樂 (2)
25. テキストとしての日本 の快樂 (3)
26. グローバル化時代 の 日本文化 (1)
27. グローバル化時代 の 日本文化 (2)
28. グローバル化時代 の 日本文化 (3)
29. 総括
30. 試験とその解説

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)試験:50% (2)小レポート:50%

文芸(創作)

担当者：藤田 のぼる

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この授業は文学作品創作の実習を行います。授業者の専門が児童文学なので、参考にするのは児童文学が多くなりますが、それぞれの創作作品は児童文学に限らず、自由な素材、テーマで書いてもらいます。「創作」が果たして学べるものかどうかという疑問があるかと思いますが、創作のタネはそれぞれの心の中に意外に潜んでいるもので、それにどのような手順でどのように形を与えてやるかを学ぶということになるでしょう。

具体的には、「読む」と「書く」ことの両方を通して、学んでいきます。最終的にそれぞれ自分のオリジナル作品を仕上げることが目標とします。授業の進め方については、受講者の数や希望、提出された作品の傾向などによってかなり変更するケースもありますが、一応の予定として掲げておきます。なお、授業の性格上、受講人数には限定がありますので、事前の掲示など注意してください。また、第1回目の授業は、最大限休まないようにしてください。

2.学びの意義と目標

- ・文学作品を、創作という立場から分析、観賞する。
- ・実際に創作活動を通して、文学の表現について考える。

準備学習(予習)

作品を読むことは授業内で消化しますが、書くことは宿題になりますので、相応の時間を要します。

準備学習(復習)

授業で紹介された作品は、なるべく読むようにしてください。

授業計画

1. 始めに～授業の進め方について、前年度作品を読む
2. レッスン1～作文を書こう
3. 作文を読む～「設定」ということ
4. レッスン2～ のつもりになって
5. 作品を読む1～一人称と三人称
6. レッスン3～「視点」ということ
7. レッスン4～会話文
8. 作品を読む2～会話文を生かす
9. 作品を読む3～他大学作品
10. レッスン5～絵本に文をつける
11. 作品を読む4～展開を考える
12. 自作の構想について
13. レッスン6～原稿の書き方
14. 作品を読む5
15. レッスン7～映像を文章に
16. 作品の一次提出
17. 提出作品の個別指導A
18. 提出作品の個別指導B
19. 作品を読む6
20. 作品を読む7
21. 短編の書き方
22. 提出作品の問題点1
23. 提出作品の問題点2
24. 提出作品の問題点3
25. 作品最終提出
26. 提出作品を読む1
27. 提出作品を読む2
28. 提出作品の回覧と感想1
29. 提出作品の回覧と感想2
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)提出作品:80% (2)出席:10% (3)提出物:10%

文章表現法

担当者：太田 ミユキ, 副田 恵, 坂巻 理恵子

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

文章表現力を養い高めるためには、まずもって、文章表現のための基本的な方法を習得しておくことが大事となる。その方法を、前学期の「基礎教育入門（書き方）」で学んだことを基礎にして、ひたすら読みひたすら書くことで身に付けようというのが、本科目のコンセプトである。具体的な進め方としては、毎回始めに若干の説明をおこなった後、時間の限りワークシートや小論文を作成する作業をおこなってもらおう。また、各自が事前に準備した学びに基づく小論文を作成する回も設けたい。すべて個人作業である。毎回提出した課題は、採点して次回に返却する。（ワークシート・原稿用紙は、毎回こちらで用意する）

2.学びの意義と目標

本科目は、大学生として相応しいレポート・小論文を書くための土台となる基礎力を身につけることを目的とするものである。さまざまな記事を読んだ上で、事実を客観的に説明する、自身の考えを論理的に記述するなどの技法を大学初年次に習得しておくことは、上級学年に進級してゆくにつれて比重を増してくる専門的な学びにおいて、大きな意味を持つてくるであろう。

準備学習(予習)

初回に具体的に授業計画のプリントを配布するので、その計画に従って、事前に調べたり読んだりしておくこと。

準備学習(復習)

次回の課題作成につながってゆくように、返却された課題に付されたコメントや添削にしっかり目を通しておくこと。

授業計画

1. 導入
2. 文章構成練習
3. 実作練習
4. 実作練習
5. 実作練習
6. 実作練習
7. 実作練習
8. 実作練習
9. 実作練習
10. 実作練習
11. 実作練習
12. 実作練習
13. 実作練習
14. 実作練習
15. 総括

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)提出物:70% (2)出席:30%

毎回作成した課題（ワークシート・小論文）を提出してもらい、それを採点したものを集成して評点をつける。したがって、未提出の回があると評点に大きく影響するので、遅刻・欠席には特に注意すること。毎回、課題に取り組むことが試験なので、特に学期末試験はおこな

担当者：川野 一字

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代の放送を理解するため、とりわけテレビ放送を理解するために映像の歴史をふりかえる。映像の始まりから発展、そして記録映画、芸術的映画、現代のテレビ放送へとつながる流れをたどる。その中で映像が果たした役割、社会に与えた影響、またそうした映像製作で培われた力が初期のテレビ放送を支えてきた背景を理解する。

そして今放送はどのような役割をにない、時代をどのように伝えているか。通信（IT）との融合はどう進み、これからどう発展してゆくのか。随時映像を視聴しながら、そのつど小論文にまとめてゆく。

2.学びの意義と目標

全科に共通する、社会情報、コミュニケーション論の基礎の一つである本講では、批判的な目で情報を受けとめ、自ら情報を発信することも視野に入れて学ぶ。そのため毎時間の小論文作成を重視している。聴取した音声情報、視聴した映像情報をどう受けとめたか。その情報のポイントはなにか。ポイントを表現するための題材の選び方は適切だろうか。等々、放送素材を吟味しながら、映像を、放送を見る目を養ってゆく。小論文の作成はそうした力をつけるための格好の方法でもある。文章力向上のための講座を強く意識している。

準備学習(予習)

講座の初めのころ、推薦図書を提示する。

準備学習(復習)

この講座では復習が重要である。必要な場合は文章の添削もしながら、小論文の質を高めてゆきたい。

授業計画

1. 映像の歴史 1 映像の始まり
2. 映像の歴史 1 映像の始まり
3. 映像の歴史 2 映像の発展
4. 映像の歴史 2 映像の発展
5. ラジオ放送の開始
6. ラジオ放送の開始
7. 戦後日本の復興とテレビ
8. 戦後日本の復興とテレビ
9. テレビ放送の初期
10. テレビ放送の初期
11. テレビ放送の発展
12. テレビ放送の発展
13. メディアの課題 テレビと通信の融合
14. メディアの課題 テレビと通信の融合
15. テレビが映し出す現代社会 1
16. テレビが映し出す現代社会 1
17. テレビが映し出す現代社会 2
18. テレビが映し出す現代社会 2
19. テレビが映し出す現代社会 3
20. テレビが映し出す現代社会 3
21. テレビが映し出す現代社会 4
22. テレビが映し出す現代社会 4
23. テレビが映し出す現代社会 5
24. テレビが映し出す現代社会 5
25. テレビと日本文化
26. テレビと日本文化
27. テレビデジタル完全化
28. テレビデジタル完全化
29. 課題論文作成
30. 課題論文作成

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)日常の小論文:30% (2)授業への姿勢:10% (3)課題論文の作成:60%

担当者：氏家 理恵

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、英語と日本語との間の翻訳事情について、その歴史と文化を概観し考察する。授業は講義形式で毎回テーマを変え、ものの名前や概念、ことわざや言い回し、広告のキャッチコピー、作品タイトル、文学作品、映画の字幕、歌詞など、なるべく多くの題材を扱いながら、翻訳傾向の特徴や時代による変容を見ていきたい。それと同時に、翻訳の限界や、翻訳するときには生じる危険性、翻訳作品の伝達上の問題点なども指摘する。

2.学びの意義と目標

翻訳という行為が、単なる言語変換という行為だけにとどまるものではなく、既存の文化や思想に影響を与え、さらには新たな文化や概念を形成する行為であることを確認し、また、身の回りにはあふれている翻訳語に気づき、考えるきっかけにしてほしい。

準備学習(予習)

テーマごとに予習課題課題を課す。また、配布したプリントは授業前に読んでおくこと。

準備学習(復習)

中間・期末レポートのテーマは授業の総復習とする。レポートの準備として、授業内容の復習をするとともに、身の回りにおける翻訳例収集に努めること。

授業計画

1. イントロダクション
2. 日本語と英語 - 言語的差異概観
3. 外来語とカタカナ語
4. 明治期の翻訳事情と翻訳者たち
5. 西洋文化の翻訳事情
6. 明治期の翻訳語の傾向とパターン
7. 文芸用語の翻訳
8. 文学作品の翻訳事情
9. 翻訳作品の傾向と翻訳パターン
10. 翻訳をめぐる問題（講義後半へ向けて）
11. 日本文学の翻訳事情
12. 『雪国』と『我輩は猫である』
13. シェイクスピア劇の翻訳事情
14. 『ロミオとジュリエット』『ジュリアス・シーザー』の翻訳
15. 英詩と韻文の翻訳 - 韻とリズム
16. 詩（韻文）翻訳の問題
17. 『マザーグース』の翻訳事情
18. 短歌と俳句の翻訳 『百人一首』と『奥の細道』
19. ジョークと言葉遊び
20. 『不思議の国のアリス』の翻訳比較
21. 児童文学と翻訳
22. 聖書と賛美歌翻訳事情
23. 賛美歌とクリスマスソング
24. 方言と語りのパターン
25. 昔話と民話
26. オノマトペ
27. マザーグースのオノマトペ翻訳
28. コミック文化と漫画文化
29. まんが翻訳事情
30. まとめ - 翻訳をめぐる諸問題

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)平常点:40%:ミニッツノートと確認テスト (2)課題:20% (3)中間レポート:20% (4)期末レポート:20%

ライフデザイン・良く生きるA

担当者：清水 均

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講座は学生個々の「キャンパスデザイン」「キャリアデザイン」の充実を願うと同時に、生涯にわたる「ライフデザイン」をイメージしてもらい、それぞれの人生が「良く生きる」といえるような充実したものとなってほしいという願いをこめた講座である。
学科カリキュラムにおける「専門基礎科目」に位置する必修科目である。即ち、日本文化学科の学生として卒業するためには履修が絶対に欠かせない科目ということである。

2.学びの意義と目標

大学で過ごす数年間が人生にとって非常に大切な時間であることは言うまでもない。特に他者とのコミュニケーション力を養成することは生涯にわたって自己を生かす上で必須の要件となるので、是非とも身につけておいてほしい。一方、「読書記録」においては、記述作業を通じて、「読み」の力を養成するとともに、自己を内省する手がかりを掴んでほしい。

準備学習(予習)

「私の読書記録」を作成し、毎授業ごとに経過報告を提出する。最終的には「課題図書」「自由図書」から各2冊以上、合計5冊以上の書籍を読むことを義務づける。

準備学習(復習)

「授業シート」に毎回の授業についての感想、見解を記述する。

授業計画

1. ガイダンス及び教務指導
2. コミュニケーションワーク(1)/図書館ツアー(1)*クラス別に実施
3. コミュニケーションワーク(1)/図書館ツアー(1)*クラス別に実施
4. キャリアデザインとは(1) - キャリアサポート課によるレクチャー
5. キャリアデザインとは(2) - キャリアサポート課によるレクチャー
6. キャンパスデザインとは(1) - 上級生の話を聴く
7. キャンパスデザインとは(2) - 自分のキャンパスデザインを描く
8. 自己表現プログラム(1)
9. 自己表現プログラム(2)
10. コミュニケーションワーク(2)
11. コミュニケーションワーク(3)/図書館ツアー(2)*クラス別に実施
12. コミュニケーションワーク(3)/図書館ツアー(2)*クラス別に実施
13. ビブリオバトル(1)
14. ビブリオバトル(2)
15. まとめ(テスト形式)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)読書記録:25% (3)授業シート、ワークシート:25%

ライフデザイン・良く生きるB

担当者：柳田 洋夫

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「ライフデザイン」は、学生個々の「キャンパスデザイン」「キャリアデザイン」の充実とともに、生涯にわたる「ライフデザイン」をイメージし、それぞれの人生が「良く生きる」といえるような充実したものとなってほしいという願いをこめて実施される講座である。

「ライフデザインB」では、「キャリア」を意識してそれぞれのキャンパスライフをどのように組み立てるかをデザインする。また、日本文化学科の学生としてどのような専門研究をするかという方向づけのヒントとなるプログラムを実施する。

2.学びの意義と目標

「キャンパスデザイン」「キャリアデザイン」を具体的に描き、これから先の学生生活の目標をつかむ。

準備学習(予習)

授業計画に基づいて事前に指示が出るのでその都度準備をすること。

準備学習(復習)

その時間に学んだことを基にして、常に4年間の学生生活計画を確認すること。

授業計画

1. ガイダンスならびに春学期の振り返り
2. 人文学から「職業」を考える
3. 専門研究への導入
4. 専門研究への導入
5. 専門研究への導入
6. 専門研究への導入
7. 専門研究への導入
8. 専門研究への導入
9. キャリアデザインプログラム
10. キャリアデザインプログラム
11. キャリアデザインプログラム
12. キャリアデザインプログラム 卒業生講演
13. キャリアデザインプログラム 内定者パネルディスカッション
14. キャリアデザインプログラム 資格講座案内他
15. まとめの作業

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席・参加度:25% (2)「私の読書記録」:25%
(3)授業内容に関する提出物:25% (4)最終課題:25%

歴史と社会

担当者：川崎 司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

喜びと怒りと哀しみと楽しみと、繰り返され積み重ねられていく「歴史」の襞。そこに刻まれた「社会」の諸相。誰もが限られた時の中で躍動し輝きを放つ。いとおいしい日常の営み。父母や祖父母の世代に起きたことが、さまざまに関連し合っただけで今日の「社会」ができていく。その間に語り継がれてきた「歴史」の映像に五感を傾け、そこに流れている普遍的なるものを探究し、歪んだ自己満足を排し、明日をよりよく生きるための指針としたい。

2.学びの意義と目標

1945年の終戦記念の日を起点とし、以後の復興から繁栄の道を駆け上った67年を、歴史的・社会的な見地からじっくり見つめてみる。現在の暮らしの原点を探し、その間に何が生まれて何が喪われていったのかを、遺された映像記録の中から共に検証していきたい。

準備学習(予習)

毎授業に配布する資料を精読し「課題」に真剣に取り組み、また次回の授業テーマについての予習を怠りなく続け、学期末のテスト・レポートに成長の証しを遺してほしい。

準備学習(復習)

毎回配布する資料を熟読して試験に備えること。

授業計画

1. 「世界恐慌と太平洋戦争 昭和元～20年 1926～1845」
2. 「『蟹工船』 ～小林多喜二のメッセージ」
3. 「私は貝になりたい(1)」
4. 「私は貝になりたい(2)」、「韓国・朝鮮人戦犯の悲劇」
5. 「第五福竜丸(1)」
6. 「第五福竜丸(2)」「第五福竜丸が伝えた核の恐怖」
7. 「核なき世界を ～物理学者・湯川秀樹」
8. 「愛と怒りと ～映画監督・木下恵介」
9. 「二十四の瞳(1)」
10. 「二十四の瞳(2)」
11. 「名もなく貧しく美しく(1)」
12. 「名もなく貧しく美しく(2)」、「父と子 ～続・名もなく貧しく美しく」
13. 「キューポラのある街(1)」
14. 「キューポラのある街(2)」、「北朝鮮に帰ったジュナ～ある在日朝鮮人家族の50年」
15. 「ALWAYS 三丁目の夕日(1)」
16. 「ALWAYS 三丁目の夕日(2)」
17. 「ALWAYS 続・三丁目の夕日(1)」
18. 「ALWAYS 続・三丁目の夕日(2)」、「懐かしの昭和 神武景気から60年安保へ」
19. 「映像の戦後60年 焼け野原・ゼロからの再生 1945～1960」
20. 「映像の戦後60年 疾走する日本・光と影 1960～1975」
21. 「東京オリンピック」、「オリンピックへの道 ～平和への聖火」
22. 「映像の戦後60年 経済大国ニッポン 1975～1990」
23. 「映像の戦後60年 混迷の時代・人々は生きる 1990～2005」
24. 「おくりびと(1)」
25. 「おくりびと(2)」
26. 「帝銀事件(1)」
27. 「帝銀事件(2)」
28. 「若者たち」
29. 「若者はゆく」
30. 「めぐみ - 引き裂かれた家族の30年」

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席状況:25% (2)毎回の小テスト:25% (3)期末試験:25% (4)研究レポート:25%

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

大規模な災害が起こったとき、人々はいかに行動してきたか。この講義では、18世紀中ごろの、ある匿名の一女性の行動を糸口として、そこから現代のNGOやNPOのボランティア活動にも通じるような、社会関係の構築可能性を文化の中に見出していく。その際、人々の間を橋渡しするメディアーターの役割に注目したい。前近代社会のメディアが、次の時代のどのような新しい社会性を生み出していくのだろうか。メディアオロジーという視点に立って、2013年の今、諸君とともに考えていこう。

2.学びの意義と目標

この科目で問いかけている内容は、『朝日新聞』テークオフ、『東京新聞』この本この人、『毎日新聞』論壇をよむ、『日本経済新聞』書評、NHKラジオ深夜便、BSフジLIVEプライムニュース等で取り上げられた。素材ははるか昔の歴史のなかにあるが、今、そしてこれからを考える授業である。

授業アンケートでの「新しい考え方。理解できた時の納得感」という学生の言葉が、この科目の雰囲気をよく表していると思う。

準備学習(予習)

午前の講義内容を昼休みをはさんで午後に深め、絵や図に描いてもらう。他の学生の描いた絵は、次回講義で諸君のイメージをさらに深めることとなる。そうした、学びの連鎖からなる講義である。

準備学習(復習)

午前の講義内容を昼休みをはさんで午後に深め、絵や図に描いてもらう。他の学生の描いた絵は、次回講義で諸君のイメージをさらに深めることとなる。そうした、学びの連鎖からなる講義である。

授業計画

1. ガイダンス 1: 逃げつかれた文明の治癒
2. ガイダンス 2: 災害史を通して見えてくるもの
3. 吉宗の時代の災害ボランティア
 - 1 そのとき幕府は何を考えたか？
4. 吉宗の時代の災害ボランティア
 - 2 高間伝兵衛と「三十歳ばかりの女」
5. 二人の長明1 鴨長明と今長明
6. 二人の長明2 「作者」とは誰か？
7. 中世後期のアソシエーション 1 橋をかける人々の思い
8. 中世後期のアソシエーション
 - 2 その人はなぜ飢えた人を救ったのか？
9. 自発と強制の間 1 中世的勸進と公共負担
10. 自発と強制の間 2 行基とは誰か？
11. 中世的勸進の変質 1 排除 される側の論理
12. 中世的勸進の変質 2 排除 する側の論理
13. 中世的勸進の変質 3 アソシエーションの挫折と更新
14. 1985年5月13日のコンサート・エイドへ + 前半のまとめ
15. 近代市民社会とはなにか 後半への序章
16. 1989年の自由 遅ればせの革命 へ
17. 映画監督ケシロフスキの 革命 前夜 《偶然》と《デカローグ》
18. 映画監督ケシロフスキの 革命 後 《ふたりのペロニカ》と《トリコロール》
19. 近代化・市民革命・戦後民主主義
20. 日本型「オホヤケ」の超え方
21. 明治における「江湖」の浮上
22. 江湖散人、あるいは放浪の思想
23. 近代的読書公衆と女性 君子から読者へ
24. 「江湖の義、いづくんぞ在らんや」
25. 交通の自由、思想の運輸 1 植木枝盛と小野梓
26. 交通の自由、思想の運輸 2 中江兆民・内村鑑三・夏目漱石
27. 明治30年代における超党派の思考 1 理想団と共闘の論理
28. 明治30年代における超党派の思考 2 内村鑑三の日露戦後
29. 西欧型近代市民社会を超えて（または学生発表会）
30. 後半のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)前半のまとめ:35% (2)後半のまとめ:35% (3)授業内での提出カード:30%:提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

Intercultural Communication

担当者：E . D . オズバーン

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1. Content – This course introduces the fundamental principles of intercultural communication through the integration of concepts from the fields of social psychology, cultural anthropology, and communication theory. Particular emphasis is placed upon comparative culture, with the focus being upon Japan and America and the role that culture plays in the communication process between individuals from these two dynamic, yet very different, countries.

2. Role in the Curriculum – The course is designed specifically for exchange students in the Japan Studies Program (JSP), but it is also available as an elective to regular students who are highly motivated.

2.学びの意義と目標

Learning Objectives – The primary objectives are to familiarize students with the cultural influences on communication between Japanese and Americans and to apply the principles learned to the students' lives.

準備学習(予習)

• Students are expected to complete the weekly textbook reading assignments and be prepared to discuss the contents in each class.

準備学習(復習)

• After each lecture, students should revise the notes taken in class and review them, committing to memory the key points.

授業計画

1. Course Introduction & Overview: What is culture?
2. Culture Variance: How do cultures differ?
3. Dimensions of Culture: Adler, Hofstede I
4. Dimensions of Culture: Adler, Hofstede II
5. Dimensions of Culture: Trompenaars & Hall
6. Dimensions of Culture: The GLOBE Study I
7. Dimensions of Culture: The GLOBE Study II
8. Cultural Values & Attitudes: Rokeach & Inglehart
9. Subcultures
10. Comparison of National Cultural Groups
11. Comparison of Japanese & American Culture I
12. Comparison of Japanese & American Culture II
13. Comparison of Japanese & American Culture III
14. MIDTERM EXAM
15. Culture & Perception
16. Culture & Language I
17. Culture & Language II
18. Cultural Code Words: Japanese I
19. Cultural Code Words: Japanese II
20. Intercultural Communication Theories
21. Cultural Differences in Communication
22. Culture & Nonverbal Communication I
23. Culture & Nonverbal Communication II
24. Cultural Biases
25. Culture Shock I
26. Culture Shock II
27. Intercultural Competence I
28. Intercultural Competence II/INTEGRATION PAPER DUE
29. Japanese & Americans Working Together
30. FINAL EXAM

教科書

Jandt, Fred E. 『An Introduction to Intercultural Communication (7th ed.)』 (SAGE Publications, Inc.)

評価方法

(1)attendance :15% (2)reading assignments :20% (3)term paper :35%
(4)exams :30%

担当者：D. バーガー

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

In this course we will explore three broad areas of language use in society: 1) how accent, dialect, and multilingualism, including language decline and revitalization, reflect and help form personal and group identity and how linguistic prejudice negatively affects all of these; 2) how human relations are expressed through honorific and polite language; and 3) how non-discriminatory language reform illustrates the relationship between language change and social change.

2.学びの意義と目標

The purpose of this class is to help students gain a better understanding of how we use language to interact with others, to both uplift and degrade individuals and groups in society, and how language helps form our identity.

準備学習(予習)

ディスカッションに積極的に参加するために、プリントを事前に読むこと。

準備学習(復習)

授業中にノートを取り、小テストのためにノートとプリントを復習すること。

授業計画

1. Course Introduction; Misconceptions about Language
2. Linguistic Prejudice and Linguistic Inequality
3. Linguistic Prejudice and Linguistic Inequality
4. National, Official, Standard, and Common Language
5. Dialect, Accent, Speech Style and Register
6. Bi/Multilingualism; Diglossia
7. Multilingual Japan (Ryukyuan, Ainu, hogen)
8. Endangered Languages and Language Revitalization
9. Ainu and Ryukyuan
10. Hawaiian and American Indian Languages
11. Hawaiian and American Indian Languages
12. Polite Language (1): Differing Views of " Politeness "
13. Polite Language (2): Speech Acts
14. Polite Language (3): Theories of Politeness I
15. Polite Language (4): Theories of Politeness II
16. Polite Language (5): Theories of Politeness III
17. Polite Language (6): Honorific Language
18. Polite Language (7): Japanese and Other Languages
19. Polite Language (8): The Speech Act of Apology
20. Polite Language (9): Japanese and English Apology
21. Discriminatory Language (1): Language Change
22. Discriminatory Language (2): American English
23. Discriminatory Language (3): Japanese
24. Discriminatory Language (4): NHK Guidelines
25. Discriminatory Language (5): University Guidelines
26. Discriminatory Language (6): Inclusive Language
27. Discriminatory Language (7): Sexist Language
28. Discriminatory Language (8): Nonsexist Language Reform
29. Discriminatory Language (9): Nonsexist Language Reform
30. Review

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)attendance :10%:授業への出席 (2)class participation:15%:授業での参加態度 (3)quizzes:20%:小テスト (4)term paper :25%:学期末レポート(英語) (5)final exam :30%:期末試験